第７章　総括

第１節　方形周溝墓の様相

当遺跡では、これまで266基の方形周溝墓を確認した[1)]。「荒尾南遺跡」の報告書において、該当地区の様相については述べられているが、本報告書が平成６年度より始まった当遺跡の一連の発掘調査において、一区切りとなることから、当遺跡全体での方形周溝墓の様相について、分布状況、構造上の特徴、方形周溝墓の重複、各期の供献土器、付帯する各期の土坑墓（木棺墓）の観点から検討を加える。

１　各時期の分布状況（図2554～2557）

Ⅰ期　Ｂ地区西部域南部での９基を確認した。Ⅰ期の方形周溝墓は県内で初見の例にあたり、その判断は慎重に行った。今回、Ⅰ期の方形周溝墓として報告するものは、重複する方形周溝墓のうちもっとも前後関係が古く、Ⅰ期の土器が供献されている可能性が高いと判断したものである。土器によって構築時期が推定可能なものが多く該当する。供献土器が確認できないものや後続する時期の方形周溝墓による削平を想定すると、潜在的にはさらに多くのⅠ期方形周溝墓があった可能性がある。確認数が少ないが、現状ではＢ地区南端のみに分布し、継続する時期のような規則性は認められない。東海地方ではⅠ期の方形周溝墓として、一宮市山中遺跡の事例がよく知られている[2)]。山中遺跡の事例では平面形が整った長方形で、これらが整然と配置されているようにみえる。当遺跡の分布状況とは対照的である。

Ⅱ期　Ａ地区で29基、Ｂ地区で20基、Ｃ地区で５基の計54基を確認した。Ａ地区ではそのほぼ中央からやや西寄り、Ｂ地区ではほぼ中央に分布する。最も濃密に数多く分布するのはＡ地区である。詳細はＡ地区Ⅱの報告に譲るが（岐阜県文化財保護センター2013）、おおよそ平面形が長方形を呈する方形周溝墓が面的に分布する。一部、周溝を共有するものが認められ、おおよそ南北・東西とも軸を

表562　方形周溝墓時期別・地区別基数

	Ａ地区	備考	Ｂ地区	備考	Ｃ地区	備考	平成６年	市教委	合計
縄文	1	土器棺墓1							1
Ⅰ期			21	土器棺墓2 木棺墓9 土坑墓1					21
Ⅱ期	29		20		6	土器棺墓1	1		56
Ⅲ期	22		19		3				44
Ⅳ期	25		76	土坑墓1	26			5	132
Ⅴ期			3		2	木棺墓1	2		7
Ⅵ期	2				8		1		11
Ⅶ期					1				1
Ⅷ期					1	前方後方形			1
Ⅸ期	1	土坑墓1	1	土坑墓1					2
その他			5	中期3 時期不明2	3	中期3			8
計	80		145		50		4	5	284

表中にある数字はSZとしてNo.を付けたもの（土坑墓・木棺墓なども含む）
「平成６年」としてあるのは平成６年度　岐阜県文化財保護センター調査分
「市教委」としてあるのは大垣市教委調査分　2003　大垣市教育委員会　『荒尾南遺跡Ⅱ』

揃えて構築されている様相が看取できる。方形周溝墓が立地しない空白地が南北方向にのび、その両側に方形周溝墓が分布する。その一方で、主軸方向は南北方向に向けるが、個々の方形周溝墓で向きがわずかに異なるものが認められるため、東西方向の軸方向の方が揃うことがＡ地区Ⅱの報告書で指摘されている。このように一部に軸方向の違いがあるものの、後のⅢ期と同じく一定の企画性のもとに方形周溝墓は構築する。これまでの分布の南限はSZ080であったが、今回の報告によりＢ地区東部域南端にあるSZ216によって南北方向はＢ地区全体に分布する可能性を示したといえる。Ｂ地区の中央部に未調査区域を残すため全容を明らかにできないが、Ｂ地区東部域、西部域のそれぞれ西端と東端に分布が偏る傾向があることから、未調査区域にⅡ期の方形周溝墓が広く分布し、中心を占める可能性がある。こうした状況からＡＢ地区ではⅡ期方形周溝墓の分布範囲のうち、南北方向について

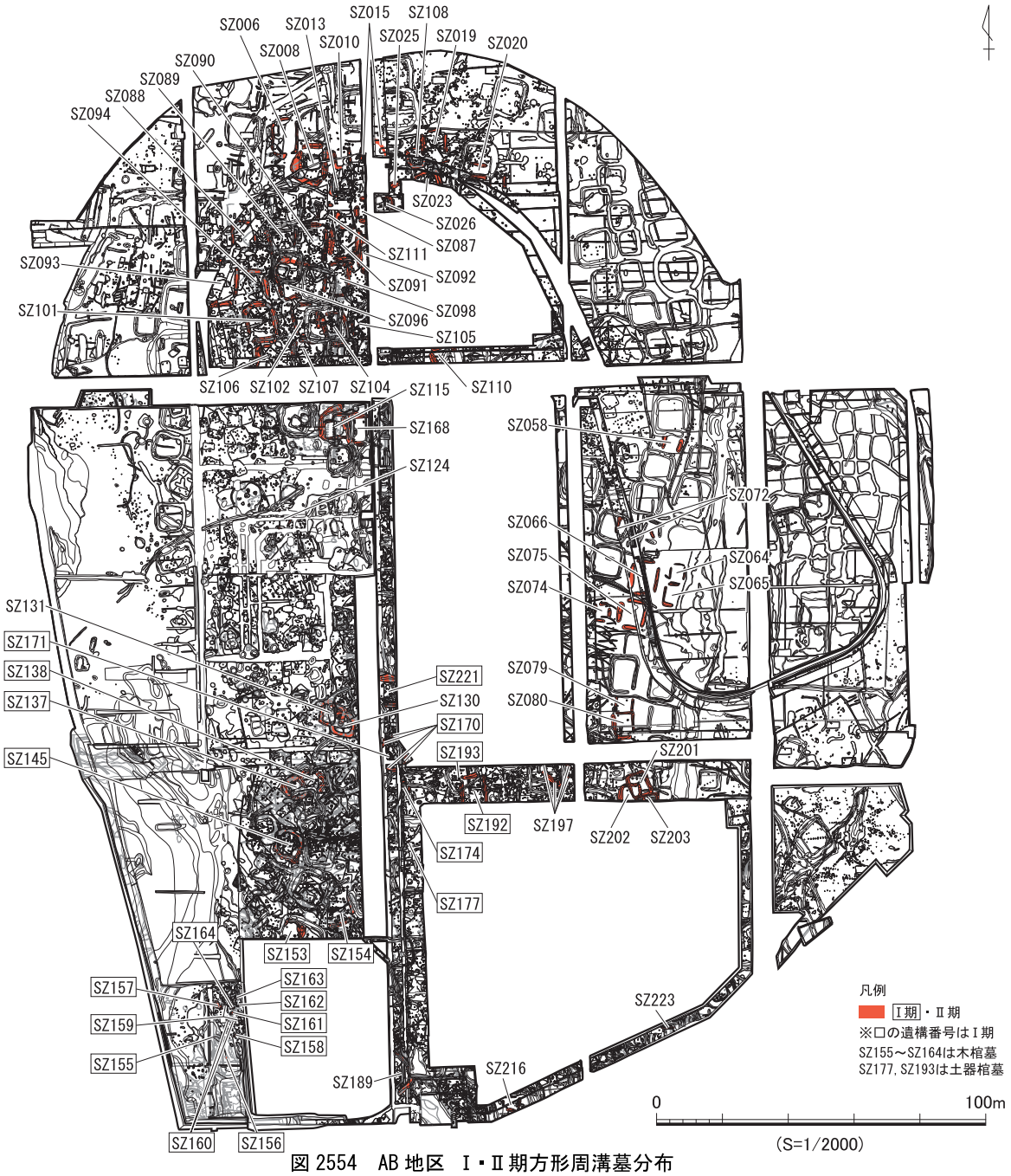


図 2554　AB 地区　Ⅰ・Ⅱ期方形周溝墓分布

は調査区の中心付近に濃密に分布する可能性があるといえよう。ただし、Ｂ地区ではＡ地区で確認できた連綿と構築された様相は未調査区域の制約もあって確認できなかった。SZ64、SZ65、SZ66、SZ75などの分布の様相はＡ地区と類似することから、Ｂ地区の未調査区域には相当のⅡ期の方形周溝墓があった可能性がある。

Ｃ地区では07_2・3地点、09_11・13地点と07_10地点、08_13地点、09_5地点、平成６年度発掘区（岐阜県文化財保護センター1998『荒尾南遺跡』）の３箇所に分布する。その総数は５基を数える。Ｃ地区はＡＢ地区と違って、未調査区域が大きく面的な様相は把握できない。調査区が狭いという制約のなかでも、Ｃ地区ではＡＢ地区のように主軸方向を揃えて規則的に連なる様相はあまり顕著でない。Ｃ地区のなかでも広い調査区にあたる07_2・3地点、09_11・13地点では、Ⅱ期に後続するⅢ期

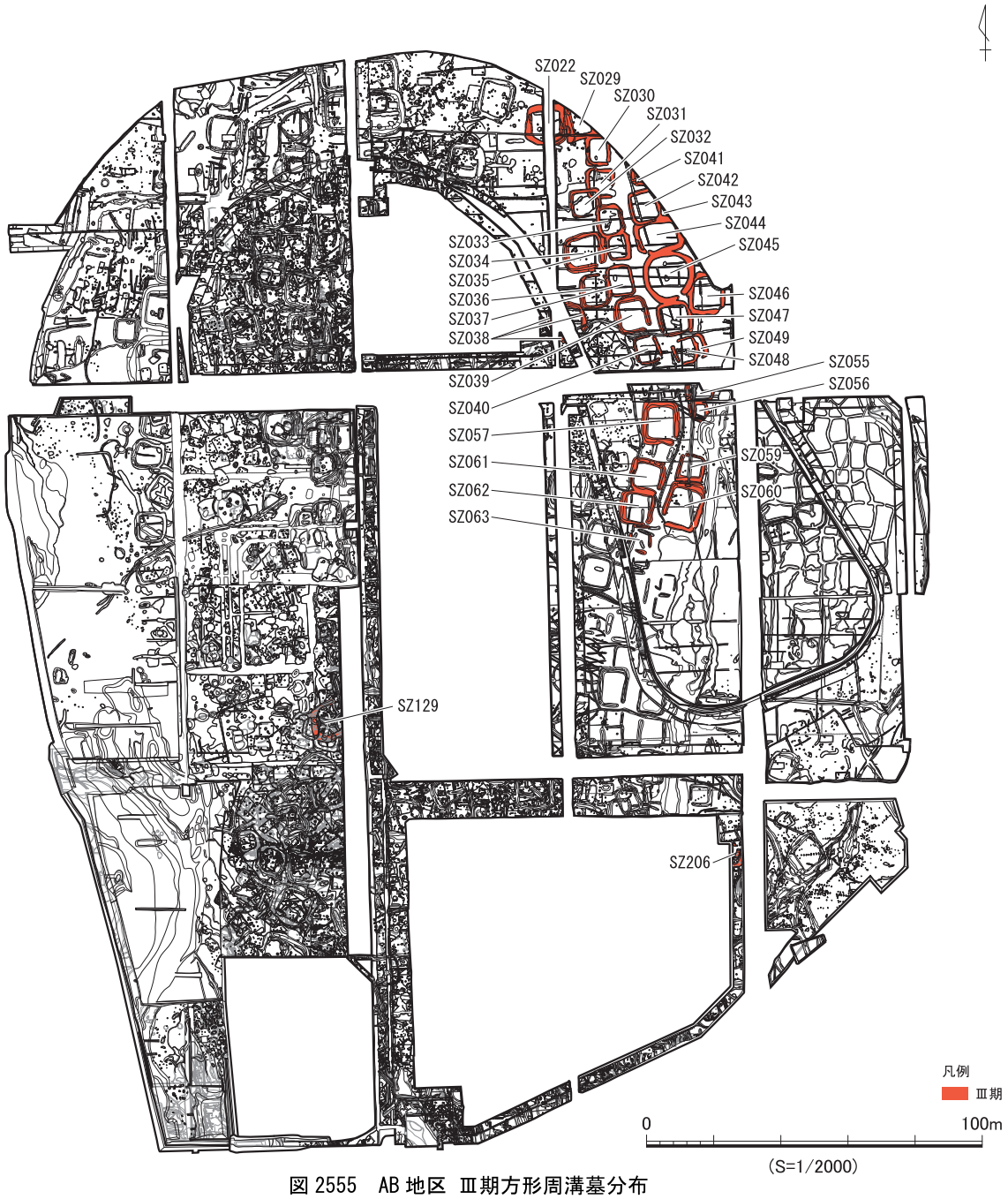


図 2555　AB 地区 Ⅲ期方形周溝墓分布

・Ⅳ期の方形周溝墓が同一箇所に重複しながら密集して構築される。その様相は主軸方向を揃えるなどといった規則性は見受けられない。未調査区域があるため判断材料を欠くが、Ｃ地区ではⅡ期～Ⅳ期の方形周溝墓を同一地点に継続して構築した可能性がある。

Ⅲ期　Ａ地区で22基、Ｂ地区で19基、Ｃ地区で３基の計44基を確認した。Ａ地区では調査区東端、Ｂ地区では大溝西側に隣接して濃密に分布する。ＡＢ地区の分布範囲には方形周溝墓が位置しない南北にのびる空白地があり、この両側に整然と方形周溝墓が位置する。このため、空白地が南北にのび墓道にもみえることはＡ地区Ｉの報告書で指摘している（岐阜県文化財保護センター2012）。これまでの報告書中では、Ⅲ期方形周溝墓はＡＢ地区では先に述べたとおり調査区東側に偏在すると想定していた。今回、新たに報告するＢ地区西部域、東部域それぞれ中央寄りに数基のⅢ期方形周溝墓が分

図 2556　AB 地区 Ⅳ期方形周溝墓分布

布することを確認した。Ⅲ期方形周溝墓が調査区東側に偏在するものの、調査区中央側にも多く分布する可能性があることを示したといえる。細かくみると、これまで確認してきたⅢ期方形周溝墓は列状に連なり、他の時期の方形周溝墓と重複しない傾向が認められた。今回、確認した調査区中央側にある方形周溝墓は検出した範囲が一部にとどまり、列状となるかは判然としないが、他の時期の方形周溝墓と重複する箇所が認められた。

Ⅳ期　Ⅳ期の方形周溝墓はＡＢＣ地区を通じて最も数が多く 131 基が認められる。各地区の内訳はＡ地区 25 基、Ｂ地区 75 基、Ｃ地区 26 基で各地区とも多く分布し、なかでもＢ地区での分布が顕著である。ＡＢ地区について概観する。分布はおおよそ調査区西側に偏る。Ａ地区ではⅡ期方形周溝墓の分布域

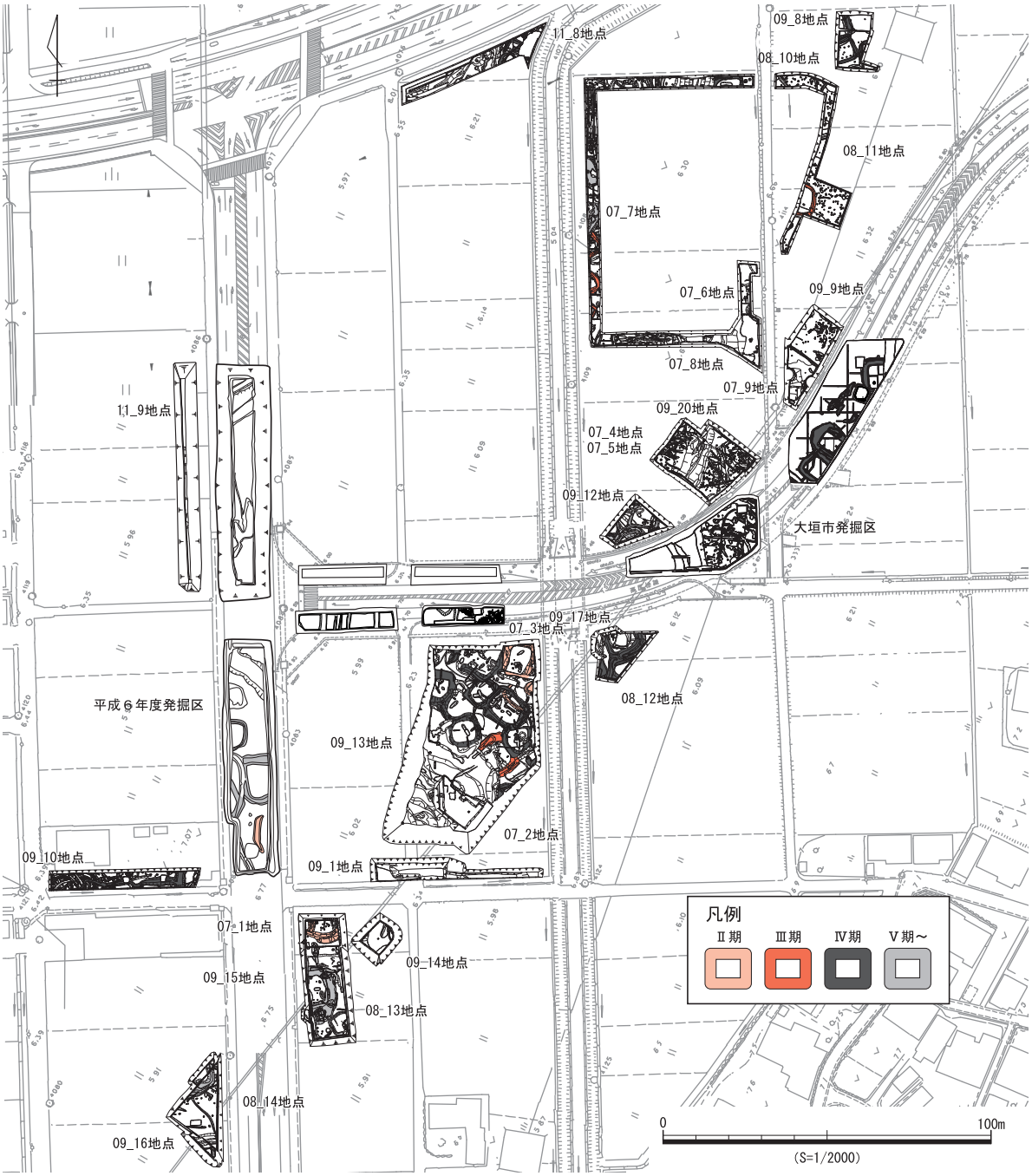


図 2557　Ｃ地区 方形周溝墓分布

と重なる。その顕著な例としてSZ008、SZ089はⅡ期方形周溝墓の周溝を再掘削して、Ⅳ期方形周溝墓を構築している（岐阜県文化財保護センター　2013　「荒尾南遺跡Ａ地区報告書Ⅱ」）。Ｂ地区では調査区西部域西側の自然流路、東部域東側大溝(SD0381)を除く中央部分全域に分布し、西部域南側に密集する傾向がある。Ａ地区では、主軸方向を揃えながら比較的整然と分布する。Ｂ地区では東部域はＡ地区と同様の傾向を示すが、西部域南側は主軸方向がやや異り、場所によっては違う企画によって構築された可能性がある。

Ｃ地区でもⅣ期方形周溝墓は広い範囲に分布し、09_10地点のSZc43～SZc46は当遺跡で現状確認しているうち、方形周溝墓分布範囲の南端と西端にあたる。Ｃ地区は調査区の制約上、全体像に触れるのは難しいが、Ⅳ期方形周溝墓周溝がそれぞれ隣接して密集する様相はＡＢ地区と同様である。一部、周溝が交差するものも認められるが、Ｂ地区西部域南部と類似する。

Ｖ期以降　ＡＢＣ地区を通じて、計16基が分布する。Ａ地区ではⅥ期を２基、Ｂ地区ではＶ期を３基確認したのみでその数は激減する。それに対し、Ｃ地区の方形周溝墓50基のうち10基を占め、占める比率がＡＢ地区より高い。さらに、Ｃ地区では各１基だが、Ⅶ基、Ⅷ期の方形周溝墓が認められる。ＡＢ地区では認められない時期にあたり、当遺跡の方形周溝墓の終焉を示すものと考えられる。

２　構造上の特徴（規模・平面形など）について

Ⅰ期～Ⅴ期までの方形周溝墓はおよそ南北方向に沿って構築されていることが多く、これと対応して長軸もおおむね南北方向に向けている。なかには、短軸を南北方向に向けている例も認められるが、ここでは方形周溝墓の規模を比較検討するため、主軸方向を検討せず墳丘下端までの長さが長い方を長軸、短い方を短軸とし、その規模が明確にできるものを対象として検討した。時期別に示したのが図2558である。

Ⅰ期　対象となるのは３基と少なく、特徴を取り上げるのが困難である。現状では10ｍを超える規模を有するものは認められないので、比較的小型の方形周溝墓が多くを占める可能性がある。

Ⅱ期　対象となるのは27基である。長軸長が10ｍを超えるものが５基あり、確認できた27基を基準とすると、その割合は19％であり、Ⅲ期20％、Ⅳ期21％とほぼ同じである。その一方で、長軸長５ｍを超えない小型のものも一定量認められる。図2558をみると長軸長７ｍ前後で大小の二極化している可能性がある。SZ090は長軸長が12ｍを超え、当遺跡中ではⅡ期～Ⅳ期を通じて最大である。平面形は長方形を呈することが多く、その様相は長軸／短軸比からもよみとれ、その比は1.28[3)]である。小型のものは正方形にちかい形状を示すものが認められる。ＡＢ地区では四隅切れの例が目立つが、Ｃ地区では顕著ではなかった。方形周溝墓の遺存状況にも左右されるので、ここでは言及しない。

Ⅲ期　対象となるのは25基である。分布がやや散漫で、３つ程度の規模に分化しているようにみえ、それは長軸長が10ｍを超えるもの、５～10ｍ、３～４ｍ程度の規模である。３～４ｍ程度の小型のものを除けば、Ⅱ期の傾向に類似する。長軸／短軸比は1.17でⅡ期に比べて、正方形を志向していることが分かるが、後述するⅣ期ほど明らかに正方形を採用しているとはいえない。Ⅱ期の長方形からⅣ期の正方形までの過渡期にあると考えられる。Ⅱ期では四隅切れの例が認められたが、Ⅲ期でほとんど確認できなかった。一箇所切れか全周するものが大半を占めるが、Ⅱ期と同様、方形周溝墓の遺存状況にも左右されるので、詳細に言及することは難しい。

Ⅳ期　対象としたのは47基である。長軸長、短軸長ともに７～９ｍの規模にピークが認められる。

長軸長でみると７ｍ前後で２分化しているようにみえる。Ⅱ期、Ⅲ期よりも対象数が多い影響もあるが、短軸／長軸比は1.11で、Ⅱ期やⅢ期と異なり個々の比が1.0～1.1前後におさまる。そのため、平面形が正方形となる例が多く、方形周溝墓の構築にあたり、その大きさや平面形についてⅡ期、Ⅲ期より強い規制が働いていた可能性がある。

Ⅱ期からⅣ期について周溝が全周するか何箇所途切れるか、全形が判明し重複の影響のない方形周溝墓で検討する。Ⅱ期は18例中、全周１例、１箇所切れ２例（ここでは隅部を箇所と表現、以下同じ）、２箇所切れ４例、４箇所切れ11例、Ⅲ期は21例中、全周７例、１箇所切れ12例、２箇所切れ２例、Ⅳ期は35例中、全周24例、１箇所切れ６例、２箇所切れ３例、３箇所切れ２例である。残存状況の課題を抜きにしてみると、Ⅱ期の４箇所切れ（四隅切れ）からⅣ期の全周へと移行していると考えられる。

Ⅴ期以降についてはＣ地区で報告されているので、ここでは省略する。

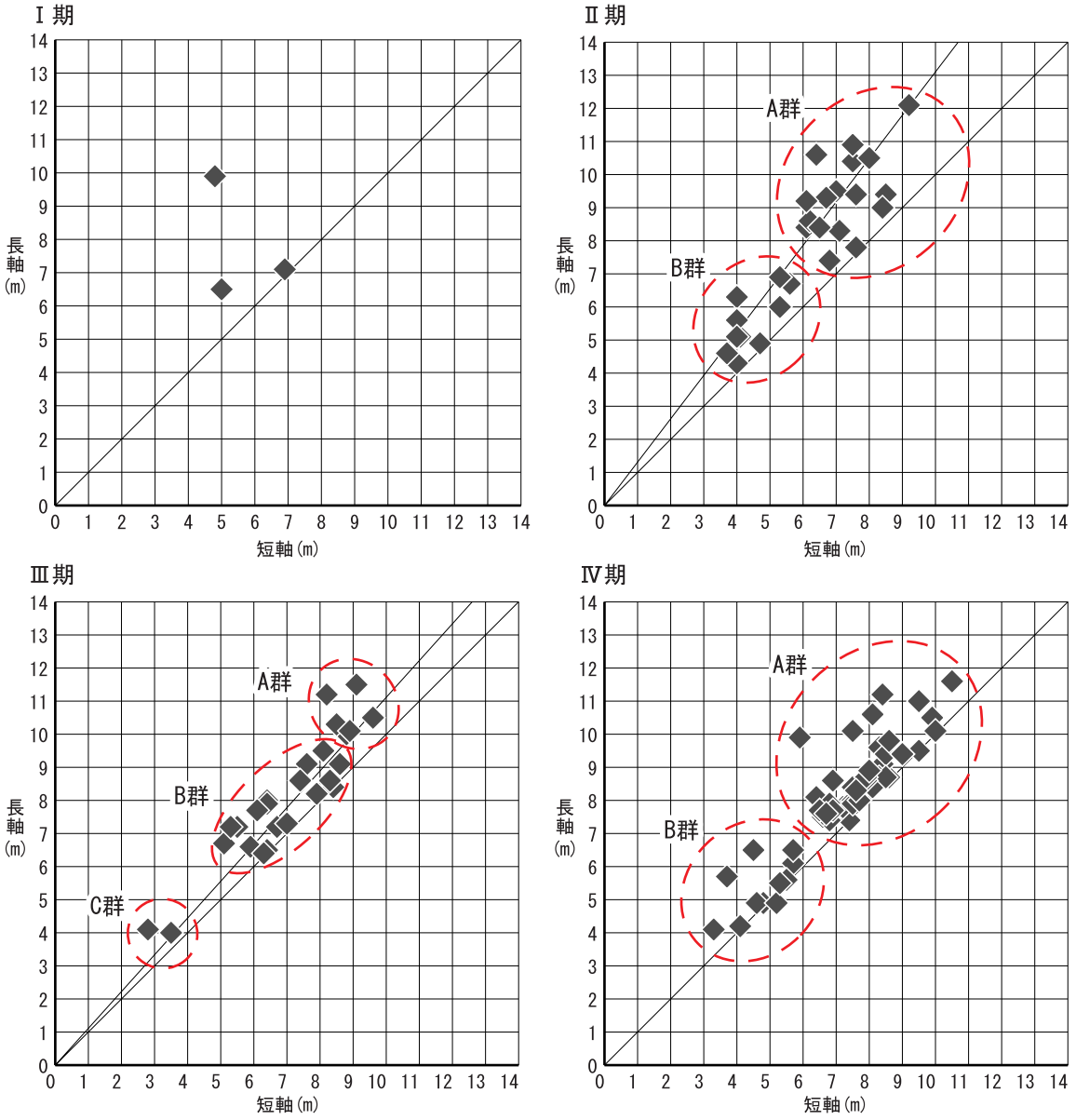


図 2558　方形周溝墓規模の推移

３　方形周溝墓の重複

各期の分布で述べたように、ＡＢ地区では一部を除いて、各期の方形周溝墓は重複することなく分布する。一方で、重複箇所には各期の分布・変遷を考える上で重要な意味があるので、重複する箇所を取り上げて検討する。取り上げるのは図2559にあるａ～ｄで、ｂについては周溝を重複しない単独立地のため、あわせて検討する。ａは西部域南部の方形周溝墓の集中箇所である。Ⅳ期方形周溝墓は主軸方向が異なりながらも周溝を共有するものもあれば、SZ135とSZ136、SZ139とSZ140、SZ141とSZ146のように周溝が交差したり、方台部のなかに周溝が位置する入れ子のようになるものも認められる。さらに遡るⅢ期SZ129とⅣ期SZ131の方形周溝墓は大きく交差する。周溝が大きく交差するのであれば、方台部の大きな改変が伴う。ＡＢ地区における各期方形周溝墓があまり重複しない状況は、先行時期の方形周溝墓の方台部や周溝が遺存し、それらを避けて後続時期の方形周溝墓を構築した可能性が高いことを示唆するものと考えられる。Ⅳ期方形周溝墓の重複は時系列からみて、方台部の改変を伴う可能性がより高いと考えるべきである。ｃもａと同様の事例でⅡ期SZ197とⅣ期SZ195、Ⅳ期SZ195とSZ196が重複する。さらに、SZ201～SZ203はⅡ期方形周溝墓の重複事例である。ｄはⅣ期方形周溝墓内（SZ217）に先行するⅡ期方形周溝墓（SZ216）が位置する事例である。Ⅱ期方形周溝墓の方台部、周溝が遺存した上にⅣ期方形周溝墓を重ねたのか、平坦になった後にⅣ期方形周溝墓を構築したのかいずれかであり、興味深い事例である。東側に隣接するⅣ期SZ215内においてもⅡ期方形周溝墓の可能性があるSD1166、SD1176が認められる。ｂは方形周溝墓の重複のみならず、近接して立地しない単独で立地する事例である。Ｂ地区東部域南東隅で、現状では方形周溝墓東端にあたる。この箇所のみ各期でみられた隣接する状況が認められず、SZ212を典型例として方形周溝墓が単独立地する。SZ212の南側にⅥ期のSD0653が位置する。SD0653はSZ212の南東隅部を屈曲して、調査区の北東から南西へのびる。SZ212周溝を避けていることは明らかであることから、Ⅵ期までにSZ212の方台部、周溝が遺存していたため、これを避け溝を構築したと考えられる。以上のように方形周溝墓の分布と変遷は、方台部、周溝の遺存状況により左右される可能性があり、さらにはⅥ期以降の遺構構築にも作用していた可能性をａ～ｄの事例は示唆しているものといえる。

４．各期の供献土器

ここでは、土器が供献された方形周溝墓や供献土器について、その出土位置、器種構成、穿孔の有無などについて概観する。

Ⅰ期　確認した９基のうち２基で、供献土器を確認した。いずれも壺である。数が少ないため、出土位置などの傾向を指摘することができない。供献土器と認定できなかったが、周溝内より小壺が出土したSZ145などの場合がある。Ⅰ期の場合、小壺を供献土器として採用する場合が多い可能性がある。

Ⅱ期　確認した54基のうち１基で、供献土器を確認したのみである。出土位置などの傾向は当然、指摘できないが、供献土器が伴わないことが通例ともいえる現象である。

Ⅲ期　確認した44基のうち11基で、供献土器を確認した。供献土器の用いられた方形周溝墓のすべてから壺が出土しており、１例のみ甕が認められた。供献土器には壺を卓越して用いると考えられる。出土位置には強い傾向は認められないが西溝中央が５例とやや目立つ。出土状態は判明するものについては、すべて転落した状況を示すものばかりであった。

Ⅳ期　確認した131基のうち44基で、供献土器を確認した。その割合は34％でⅢ期の25％に比べて

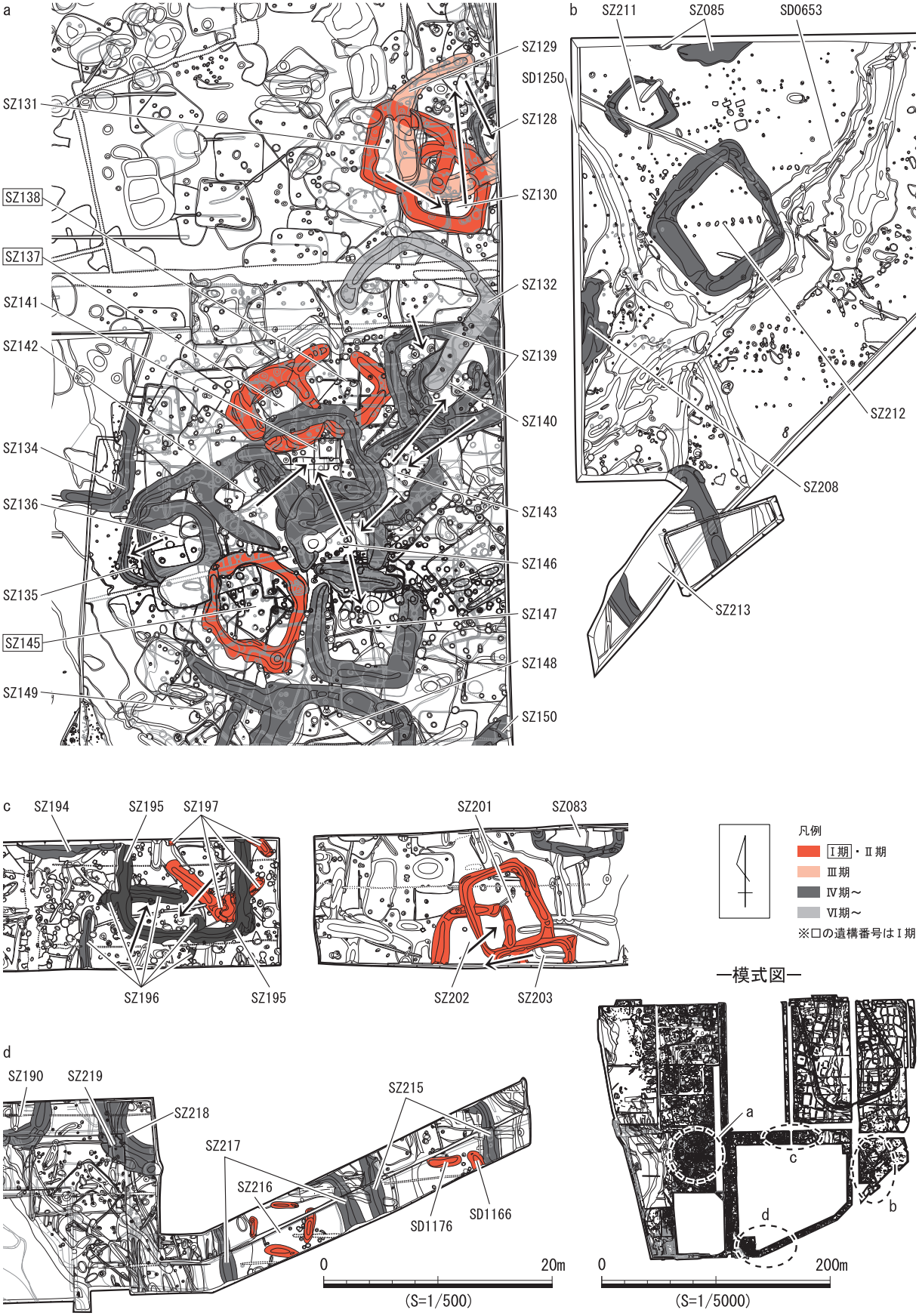


図 2559　方形周溝墓重複関係遺構図

増加する。供献土器に用いられたのはⅢ期と同様、壺が圧倒的に多い。甕は16例でⅢ期に比べて、飛躍的に増加する。甕以外に高坏や鉢が認められるが、少数の事例である。出土位置は北溝中央や西溝中央がそれぞれ、12例と11例と最も多いが、他の位置でも相当数が認められるため、強い傾向を認めることは難しい。少数事例ではあるが、周溝隅部で出土した事例が一定量認められる。単純に周溝中央出土の計36例に対して21例あり、Ⅳ期に新たに定着した現象として考えてもよいかもしれない。供献土器は転落した状況を示す例が30例あり、当然、横向きとなって出土していることが多いが、中には立位になるものや横向きでも据え置かれたように水平を保持しているものもあり、単に転落のみで片づけられない出土状況を示すものも認められた。また、壺のうちには穿孔のある資料が17例認められた。Ⅳ期になって、一部に供献土器に穿孔処理を施すことが始まったと考えられる。

５　付帯する土坑墓（木棺墓）

Ⅰ期～Ⅴ期以降を通じ、方形周溝墓以外に墓もくしは墓の可能性の高い遺構が確認できる。方形周溝墓の構築はⅠ期から始まるが、その数は少ない。Ⅰ期は他に木棺墓９基がみられるなど、多様な墓制が採用された可能性がある。Ⅱ期では土坑墓の可能性がある土坑がSK01438、SK01491、SKc0731、SKc0733、SKc0739、SKc0768、SKc0807など全地区を通じて方形周溝墓ほどではないが、一定量構築されている。これらの土坑は後続するⅢ期～Ⅳ期の方形周溝墓方台部のⅤ層上面で検出される例が認められる。後続する方形周溝墓構築以前に土坑が構築され、その後に後続時期の方形周溝墓の墳丘が土坑の上に構築されたことになる。また、Ⅱ期の方形周溝墓の空白箇所に、土坑墓の可能性のあるⅡ期の土坑を構築した可能性が指摘でき、Ⅰ期同様、多様な墓制の傾向をⅡ期も継続すると考えられる。Ⅲ期ではⅡ期で指摘した土坑墓の可能性がある土坑にはSK00349がその例にあたる。墓の可能性を示すような土器出土例がほとんど認められない。このため、土器出土の有無からすると、Ⅱ期ほど構築されなかった可能性がある。Ⅳ期は方形周溝墓構築の最盛期にあたる。土器棺墓と考えられる事例が認められるが、方形周溝墓の基数と比較するとその割合はわずかといえる。また、周溝付近に隣接して構築される場合が認められる。この場合、方形周溝墓の利用形態の一つであり、単独に立地し、方形周溝墓から独立した土坑墓とは性格を異にしていると考えるべきで、取扱いには検討が必要である。

６　まとめ（各期の造墓の様相）

ここまで、各項目に従い方形周溝墓のあり方を検討した。各期の様相についてまとめておく。

Ⅰ期　確認数が少なく、分布範囲も限定的であることから方形周溝墓の導入期であり、他に土器棺墓、木棺墓が認められる。同時期に多様な墓制の一つとして採用されたのか、Ⅰ期のなかでそれぞれが変遷したのか検討が必要である。方形周溝墓の平面形は後続する時期と比較すると、周溝外縁・内縁とも不整形で平面形が整然としない。山中遺跡の事例と比較して、平面形が長方形で整然と並ぶのとは対照的である。Ⅰ期方形周溝墓のうち、SZ193は南溝が調査区外にあるが、平面形が長方形で四隅切れの方形周溝墓である。周溝埋土上層でⅠ期土器棺墓を確認したため、Ⅰ期方形周溝墓と判断した。先に述べたⅠ期方形周溝墓の典型例と平面形が異なる。Ⅰ期のなかでも、後半になるとⅡ期方形周溝墓と同じく平面形が長方形を志向する可能性があること示唆する事例といえよう。

Ⅱ期　構築された基数からすると面的に広がり、方形周溝墓構築の本格的な開始時期にあたる。分布状況は、その構築にあたり最適な箇所を選定した結果を反映し、ＡＢ地区においては調査区中央を占地していると考えられる。平面形は長方形を志向し、主軸方向を揃えて、規則的に配置される箇所が

Ａ地区を中心に認められる。また、南北にのびる道ともいうべき空白地が認められることから、Ⅲ期に強くみられる様相がⅡ期にも認められる。一定の企画のもと方形周溝墓が構築されたと考えられる。
Ⅲ期　ＡＢ地区を通じてⅡ期方形周溝墓東側にⅢ期方形周溝墓が構築される傾向が強い。とくにＢ地区東部域では大溝とⅣ期方形周溝墓分布域に挟まれるよう分布し、強い企画のもと構築されたようにみえる。その結果、Ⅱ期とⅢ期の方形周溝墓は隣接することはあっても、Ⅱ期方形周溝墓を大きく改変し、Ⅲ期方形周溝墓が重複する様相はみてとれない。例外として図2559ａの事例がある。この事例以外にＡＢ地区はⅡ期とⅢ期の重複は認められないため、Ⅱ期とⅢ期方形周溝墓のすみ分けは厳格であったと考えられる。その観点からするとａの事例は特異な事例で、Ⅳ期までの方形周溝墓が主軸方向を変えつつ、同一箇所に継続して構築する。他の箇所で整然と配置した方形周溝墓とは異なる造墓原理が作用した可能性があり、今後の検討課題である。平面形はⅡ期方形周溝墓が平面形を長方形志向するのに対し、後続するⅣ期方形周溝墓の正方形指向の中間形態をとる。供献土器についても少数ながら供献事例が増加傾向にあり、その後のⅣ期方形周溝墓の特性の萌芽が認められるようになる。
Ⅳ期　調査区全域に方形周溝墓が展開し、全盛期といえる時期である。そのためか、Ⅱ期方形周溝墓を破壊？改変？して構築される箇所も認められるようになる。平面形は正方形を指向し画一的である。供献土器は壺を中心に伴出割合が増加し、甕があらたに伴うようになる。さて、分布状況には課題があるので検討を加える。面的に広がるといっても、すべてが周溝を共有して累々と連なるわけではなく、部分的に空白箇所も認められる。４～５基程度を１単位として構築され、これが塊状となり場所によって塊が連結する場合と連結しない場合がある。そのため、累積した現状での見え方が違うと考えられる。その意味ではⅡ・Ⅲ期でみた面的な広がりとそれに関係する主軸方向の強い指向性とは、Ⅳ期方形周溝墓のあり方は違ってみえる。塊状それぞれの原理によって方形周溝墓が構築されたことになる。先に指摘した主軸方向の違い、Ⅳ期周溝墓の重複からみてもⅡ期・Ⅲ期ほどの強い企画性は意図していない可能性がある。その一方で、空白地の有無や重複については先行する方形周溝墓の遺存状況が作用する可能性がある。Ⅳ期方形周溝墓構築時において、Ⅱ期方形周溝墓墳丘がⅣ期にどのような状態で遺存しているかによって、Ⅱ期とⅣ期の方形周溝墓重複の意味合いやⅣ期方形周溝墓の空白地に対する理解が異なることにも注意を払う必要がある。重複する場合、墳丘がすべて流失して平坦となっている場合と墳丘が構築時より流失し低くなっているが、その高まりが視認できる場合とで違いがある。前者の場合、墳丘を視認できないので窪地状の周溝を再利用してⅣ期方形周溝墓を構築した可能性が高い。後者の場合はどうであろうか。墳丘が視認できる以上、先行する方形周溝墓の残る墳丘を避けⅣ期方形周溝墓を構築することも可能である。避けずにⅣ期方形周溝墓を重ねた理由は前者と同様、埋没中の窪地状の周溝、低くなった墳丘を再利用してⅣ期方形周溝墓を構築したと考えるほかに、構築する場所が確保できないため、あえて明確に墳丘と認識できない同じ場所を選地した可能性がある。SZ89の南側にSZ95・SZ97などが連なる。こられの方形周溝墓はⅡ期方形周溝墓SZ96・SZ102と重複するが、主軸方向を違えて構築されている。この場合は、墳丘が流失し周溝は完全埋没した後、Ⅳ期方形周溝墓が構築されたのであろうか。この仮定に立つとＡ地区のⅡ期方形周溝墓とⅣ期方形周溝墓の重複は、Ⅳ期方形周溝墓の構築場所が確保できないことにより生じた現象ともいえる。一方で、Ⅱ期方形周溝墓とⅢ期方形周溝墓の重複が認められないことについてはどう考えるべきであろうか。Ⅲ期方形周溝墓を構築する際にはⅡ期方形周溝墓分布範囲の東側にⅢ期方形周溝

墓を構築するだけの十分なスペースがあったため、Ⅱ期方形周溝墓の上にⅢ期方形周溝墓を重ねる必要がなかったと考えられる。Ⅳ期方形周溝墓の構築の際には、Ａ地区ではすでにⅡ期方形周溝墓とⅢ期方形周溝墓でほぼ埋め尽くされており、時間の経過によって視認しにくいⅡ期方形周溝墓の上にⅣ期方形周溝墓を重ねた可能性が高いといえよう。また、Ｂ地区東部域ではⅣ期周溝墓の塊状分布が認められ、その間に空白地が認められる。空白地には先行する時期の方形周溝墓が位置しないので、その構築原理に先行する視認可能な方形周溝墓を介在させる必要がないことを示している。

Ｂ地区ではＡ地区とは対照的に、Ⅳ期方形周溝墓と先行する時期の方形周溝墓の重複は一部を除いて認められない。現状で明らかな重複事例はSZ128～SZ131（図2559ａ）とSZ216、SZ217（図2559ｄ）の２例である。SZ128～SZ131は先に述べたとおりである。SZ216、SZ217はⅣ期方形周溝墓SZ217の墳丘下にⅡ期方形周溝墓S216の周溝がすべて位置する。時間の経過によって平坦となったSZ216の上に、偶然、SZ217を重ねたのであろうか。Ａ地区に比べて、未調査区域があるため全容把握することは難しい。確認できた範囲からすれば、Ｂ地区ではⅣ期方形周溝墓構築時には構築するだけのスペースがあったため、方形周溝墓があまり重複しなかった可能性がある。むしろ、先行する時期の方形周溝墓との重複よりもⅣ期での重複の方が目立つ。SZ132、SZ135、SZ136、SZ139～SZ143、SZ146とSZ195～SZ203の２か所が顕著な事例である。この事例はⅡ期とⅣ期のようにある程度の時間幅があるのと同列に取り扱うことが難しい。短い時間幅のなかでの現象であるため、方形周溝墓を新たに構築する際に、先行する方形周溝墓が原形を保持して位置している可能性が高く、先に述べた周溝が交差する場合で想定すると、先行する方形周溝墓を大きく改変して、墳丘や周溝を構築することになる。改変はⅡ期方形周溝墓とⅣ期方形周溝墓との時間の経過を考慮すれば、Ⅳ期方形周溝墓の方が改変の程度が大きいと考えるのが普通である。まさに破壊ともいえる行為であろう。Ⅳ期方形周溝墓の改変には多大な作業量を伴い、さらには眼前の血縁もしくは地縁的に近い関係にある墓を改変するといった精神的苦痛を伴うことが想定され、Ⅳ期方形周溝墓の構築にあたり逼迫した何らかの事情があり、これを重複関係が投影しているのかもしれない。今後、Ⅳ期方形周溝墓の重複にどれだけの時間幅を見積もるのかなど詳細に検討する必要があろう。

その一方で、単独で位置するⅣ期方形周溝墓が認められることを先に指摘した（図2559ｂ）。Ａ地区SZ005、SZ021とＢ地区SZ212が典型例である。とくにSZ212は調査区の東端にあたり、Ⅵ期前後のSD0653が墳丘を避けるように屈曲して位置する。さらには、Ⅵ期以降の竪穴住居跡も隣接しない。Ⅵ期以降もSZ212は墳丘が原形をとどめ、Ⅵ期以降の住人たちに視認されて、周辺に遺構を掘削せずSZ212が保全されたかのようである。ここで重要なのはⅥ期以降でも視認できるよう遺存状態がよいということではなく[4)]、単独で存在していたという現象である。Ⅳ期方形周溝墓が塊状に分布するのとは別に少数で単独して分布する２系列の造墓原理があったと考えられるからである。単独で立地する方形周溝墓は塊状の方形周溝墓より、隔絶した規模や副葬品などがあれば、階層性の表出との理解も可能だが、ここで確認している例は塊状の方形周溝墓よりわずかに大きいものの、２倍、３倍と明らかに格差をもった大きさとはいえない。また、出土した供献土器も取り立てて差異は認められない。こうした立地の違いが現象面として２系統の原理に基づくことは明らかだが、その原理がとのような意図をもって構成されているのかが今後の検討課題である。

Ｃ地区ではⅥ期～Ⅷ期の方形周溝墓の分布がＡＢ地区に比較して濃密である。SZc40は墳丘が良好

に遺存する好例である。09_12地点では６基の方形周溝墓が重なり、まるでⅣ期の方形周溝墓をみるようである。SZc05は唯一の前方後方形を呈する周溝墓である。Ⅷ期にあたり、周囲には同時期の周溝墓が認められないことやその形状・大きさから当遺跡のなかでは盟主的な墓といえる。

方形周溝墓は多様な墓制の一つとしてⅠ期に始まり、Ⅱ期の面的な広がりとともに強い企画性をみるようになる。Ⅲ期はⅡ期の強い企画性を継承しつつ、平面形や供献土器などにⅣ期への過渡的様相をもつ。墓制はその間に方形周溝墓にほぼ統一された感がある。Ⅳ期は方形周溝墓が爆発的増加し、全盛期といえる。その一方で、Ⅱ期・Ⅲ期でみた面的な企画性は失われつつあるが、正方形指向の平面形や規模が均一であることから、個々には一定の規格性が認められる。しかし、長軸長が10ｍを超えるものは長方形を志向する（図2558）。同様の傾向はⅢ期にも認められることから、長軸長10ｍ超のものについては造墓主体が異なる可能性がある。方形周溝墓増加の要因について言及しておきたい。方形周溝墓を構築した集団の人口増、あるいは構築した集団のうち方形周溝墓構築可能な階層範囲拡大などいくつかの理由が推測できる。調査区の制約、そして方形周溝墓を構築した集落が明らかでないなど検討すべき点が多いなかではあるが、多様な墓制が方形周溝墓へ統一されることにより方形周溝墓が増加したと考えることも可能である。Ⅴ期以降、方形周溝墓の構築は激減し、方形周溝墓の墓域が縮小し限定的となり、ＡＢ地区が主にⅥ～Ⅶ期の集落域として機能するのと対応した現象の可能性が高い。Ⅳ期の一大墓域の上に後になって、なぜ集落を重ねたのかという点も検討課題である。Ⅳ期の方形周溝墓を削平して？住居を構築する際、消極的なメンタリタティは作用しなかったのかという点である。現象面からすればⅣ期の方形周溝墓がⅥ～Ⅶ期の住人たちが視認できたか否かによって、ずいぶん判断が異なる。方形周溝墓の遺存状況が地区によって様々のため一概に言及することは難しい。ただし、すべて平坦になって視認できなかったという状況でないことは明らかで（図2559ｂ）、全てではないにせよ、Ⅳ期方形周溝墓がⅥ～Ⅶ期の住人たちに視認可能であったことと考えることは可能であろう。視認可能なものと不可能なものとで扱いに差が生じたのであろうか。方形周溝墓の遺存状況を復元できないので、立証することが難しい。仮に視認可能なものは避け、視認不可能なものはその上に住居を重ねるとしても、Ⅳ期からⅥ期まで約200年間程度、先祖の墓域だった記憶が忘れ去れるのであろうか。先祖の墓域が伝承されていれば、方形周溝墓の遺存状況は無関係のことである。むしろ、Ⅳ期方形周溝墓を構築した人々とⅥ期～Ⅶ期の住人との血縁的つながりの有無の方が、Ⅳ期以降の方形周溝墓分布の劇的な変化に影響を与えている可能性がある。また、先祖の記憶は残っていたが、その先祖の墓域に住居を重ねなければならない状況がⅥ～Ⅶ期に生じたのかもしれない。いずれにせよ、方形周溝墓の変遷は単なる結果論としての方形周溝墓の時期や分布にとどまらず、その背景にある集落に住む集団の動向と深い関わりがあり、大きな視野で検討すべきであろう。

注

1) 平成６年度の岐阜県文化財保護センター調査分、平成８年度以降の大垣市教育委員会調査分を含む。（岐阜県文化財保護センター1998『荒尾南遺跡』、大垣市教育委員会2001『荒尾南遺跡Ⅰ』など）

2) 愛知県埋蔵文化財センター　1992　『山中遺跡』

3) 長軸／短軸で比を計算した。計算値は対象とした方形周溝墓の平均値で、Ⅱ期の場合は27基を対象とした。Ⅲ期、Ⅳ期も同様である。

4) 集落域から離れているため改変を受けず遺存した可能性がある。

第２節　Ｂ地区における建物跡等の概観

Ｂ地区では、縄文時代晩期及びＶ期からⅨ期までの竪穴住居跡402軒と、Ｖ期からⅨ期までの掘立柱建物跡22棟を検出した。このうち、本節では建物数の多いＶ期からⅨ期までの竪穴住居跡400軒と掘立柱建物跡22棟を対象として分析し、当該時期の溝状遺構、柵跡等も関連する可能性があるため、併せて説明する。

１　概要

(1)　分布

建物跡は、西部域の自然流路とそれに伴う窪地から、東部域中央を南北に貫くSD0381（大溝）までの間に高い密度で分布する（図2560）。特に竪穴住居跡は西部域中央の重複が顕著で、その多くが弥生時代中期に造営された方形周溝墓と重なって分布している。一方、掘立柱建物跡は調査区内に散在しているが、竪穴住居跡と同様に西部域中央では複数棟が重複している。

図2560　Ｂ地区における建物跡の分布と関連遺構

(2)　時期別の基数

これらの時期別の基数を大まかに把握するため、『荒尾南遺跡Ａ地区Ⅱ』（岐阜県文化財保護センター2013）の手法に準じて、原則として遺構の所属時期の下（上）限が不明な場合は上（下）限の時期とし、細別時期を跨ぐ場合はより新しい時期に帰属させ、時期別の数量を算出した。その結果、竪穴住居跡の軒数は、Ⅴ期10軒、Ⅵ期57軒、Ⅶ期272軒、Ⅷ期41軒、Ⅸ期17軒、不明３軒であり、Ⅶ期に属する住居跡数は全体の68％を占めることが判明した。一方、掘立柱建物跡の棟数は、Ⅴ期２棟、Ⅵ期３棟、Ⅶ期10棟、Ⅷ期３棟、Ⅸ期４棟であり、竪穴住居跡と同様にⅦ期の割合が高い結果となった。

(3)　竪穴住居跡の規模や構造等

図2561では、規模が測定できる竪穴住居跡の上端長軸長毎の時期別の数量を示し、その合計をグラフ化した。全体では5.0ｍ以上5.5ｍ未満が68軒と最も多く、次いで4.5ｍ以上5.0ｍ未満が55軒である。時期別では、Ⅵ期は4.5ｍ以上5.0ｍ未満が最も多いものの、Ⅶ期～Ⅸ期は5.0ｍ以上5.5ｍ未満が最も多くなり、Ⅵ期からⅦ期にかけて住居がやや大きくなる傾向が看取できた。

平面形は、方形113軒、長方形25軒、円形１軒、楕円形１軒、不整形23軒、不明237軒である。調査区が狭小であることや、遺構の重複が多く全形が判明した住居数は少ないものの、全体としては方形が優勢であった。

柱配置は、詳細が不明な住居を除いて大半が４本柱（図2562－２など）であり、少数ではあるが２本柱（SB415：同図1）、２本柱の可能性がある住居（SB193、195、290、382）、５本柱（SB442：同図3）、６本柱の可能性がある住居（SB274（同図4）、319、320）などがある。また、住居の外側に柱穴を配置するもの（SB423：同図5）や、壁際に沿って小穴を配置するもの（SB362、364、374、375（同図6）、376）なども確認した。後者は壁立式の壁下地材を埋め込んだ穴か、竪穴壁を覆う壁板を固定するための柱掘形や柱穴と考えられており（文化庁文化財部記念物課2010）、当遺跡では西部域中央付近のみで検出した。

床面上にて炉跡を検出した竪穴住居跡は８軒のみであり、全体の２％に過ぎない。炉跡の平面形はおよそ楕円形を呈し、浅い掘形内に焼土が薄く残存している状況が多い。そのうち、SB486（同図7）は炉の両端に浅い掘り込みを有し、やや特異である。また、掘形を伴わず焼土のみを検出した住

長軸長(m)＼時期	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	合計
2.5～			1			1
3.0～		1	3			4
3.5～		3	8	3	1	15
4.0～	1	4	24	2	1	32
4.5～	1	9	35	8	2	55
5.0～	1	6	46	10	5	68
5.5～	1	2	27	4	2	36
6.0～		4	14	1	2	21
6.5～		1	4		1	6
7.0～		1	1	1		3
7.5～			1			1
8.0～			1			1
合計	4	31	165	29	14	243

※SB219（円形住居）除く

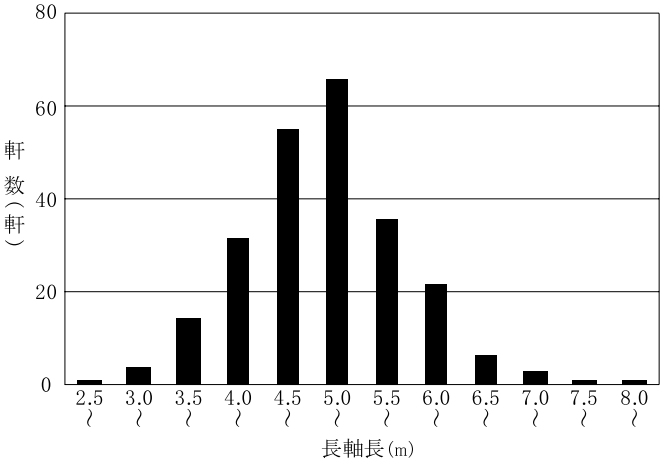


図2561　竪穴住居跡の規模

図 2562　Ｂ地区の竪穴住居跡

居は13軒であった。このような住居は、大半が床面上に１箇所の焼土範囲を確認したのみであるが、SB189（同図８）のように、やや離れた場所で複数の焼土を検出した住居もある。

また、床面上にて赤色顔料がまとまって出土した住居は４軒であり、これらはすべてベンガラであった（第６章第３節参照。）。ベンガラは住居の壁沿いで馬蹄形状に出土したもの（SB195：同図９）、炭化物とともに検出したもの（SB320、324（同図10））、壁溝や柱穴内で検出したもの（SB554）などがある。また、ベンガラの形状の多くは塊状であるにも関わらず、SB195とSB324などでは粉状であった（第６章第３節参照）。これらの住居のうち、SB195からは砥石１点、投弾とした表面に細かい擦痕が残る球形の石材１点、SB320からは叩石１点、砥石５点、SB324からは叩石１点、砥石１点が出土した。これらにはベンガラが付着していないことや、ベンガラが出土していない竪穴住居跡でも多数の叩石や砥石が出土していることなどから、ベンガラの加工・製作と出土した石器類とを安易に関連させることは避けるべきである。しかし、本章第７節で後述するように、当遺跡では状態や色調が異なるベンガラが出土していることから、遺跡内におけるベンガラ加工の可能性は指摘できよう。なお、その他として、床面上で壁溝以外の溝状遺構を検出した住居が11軒ある。これらの溝状遺構の平面的な位置は、柱穴間を結ぶもの１例（同図１）、柱穴の柱筋から壁面までの空間に柱筋に直交する方向にのびるもの４例（SB214、220、531（同図２）、560）、規則性が見いだせないもの６例（SB239、241、266、277、534、535、556）である。SB531（同図２）のような溝状遺構は、当遺跡において一つの住居内に１条もしくは２条のみ確認したが、その性格は不明である。

床面において貼床（整地土）を確認した竪穴住居跡は98軒である。住居全体の約25％を占めるが、上方を削平されている住居が多いため実際の比率はさらに高いと考えられる。98軒のうち、床面全面もしくは部分的に掘形を有する住居は78軒、溝状の掘形を有する住居は20軒である。溝状の掘形は、住居の中央部分のみ残して壁際から幅約0.5～2.0ｍを掘削しており、溝が全周する住居１軒（同図12）、溝の一方のみが切れる住居７軒（同図11）、溝の全形が不明な住居12軒である。溝の一方のみが切れる場合は北側が切れる場合が多い。溝状の掘形の機能については不明であり、時期的にはⅤ期からⅨ期まで認められ、Ⅶ期の住居に最も多く採用されている。なお、岐阜県内においては、関市松原遺跡（関市教育委員会1994）、岐阜市堀田城之内遺跡（岐阜県文化財保護センター1997）などでも、溝状の掘形を有する竪穴住居跡が確認されている。

外周溝を確認した竪穴住居跡は３軒（SB115、121（同図13）、554）であり、いずれもSD0381の周辺に位置する。このうち、SB121（同図13）は壁溝が住居外部までのび、排水溝として機能している。

(4)　掘立柱建物跡の規模や構造等

掘立柱建物跡22棟の内訳は、側柱建物20棟、総柱建物２棟である。側柱建物は桁行１間×梁行１間（桁行長3.2ｍ）の小規模なものから、桁行６間×梁行４間（桁行長9.8ｍ）の大規模なものまで存在する。このうち、Ⅳ期～Ⅴ期のSH008、SH010（図2563－1、2）は梁行の柱間距離が1.2ｍ～1.3ｍと狭く、Ⅵ期以降の大半の建物の柱間距離が1.4ｍ以上であることと異なる。しかし、Ⅵ期以降の掘立柱建物跡のうち、SH027（同図３）のみ梁行の柱穴間距離が約1.0ｍと狭く、独立棟持柱建物である点も他と大きく異なっている。Ⅶ期以降の掘立柱建物跡のうち、SH018、021（同図４、５）など梁行２間の建物が５棟確認でき、いずれも西部域中央付近にまとまっている。また、それらとほぼ同じ場所に桁行６間×梁行４間のSH019（同図６）が位置し、その規模は他の建物よりも格段に大きく、

集落の中心的な施設の一つであったと考えられる。総柱建物（SH022、023：同図７、８）はいずれも桁行３間×梁行３間であり、その規模は一辺4.0ｍ～5.0ｍである。平面形は台形状もしくは平行四辺形状であり、柱筋も歪みが認められる。

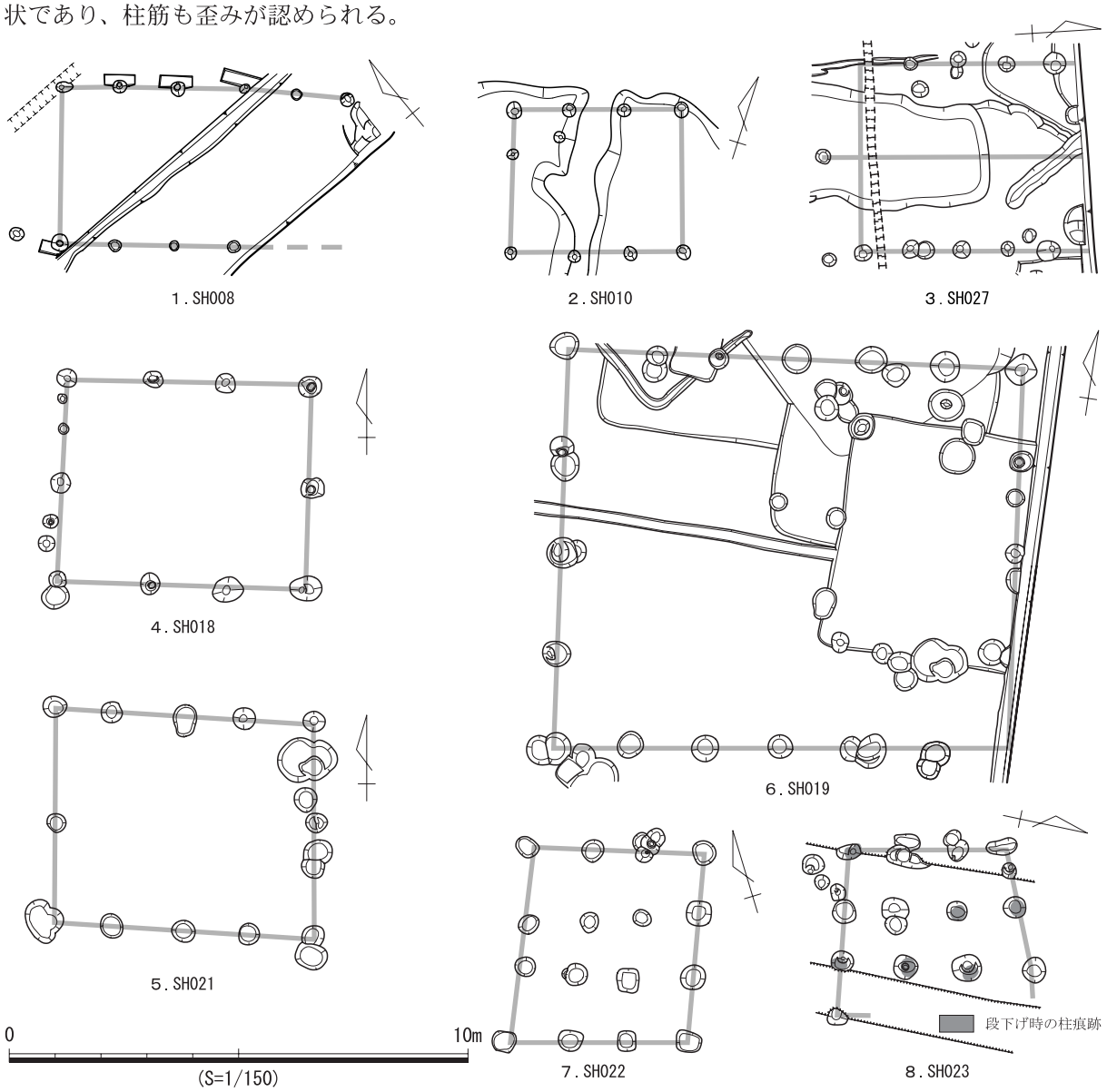
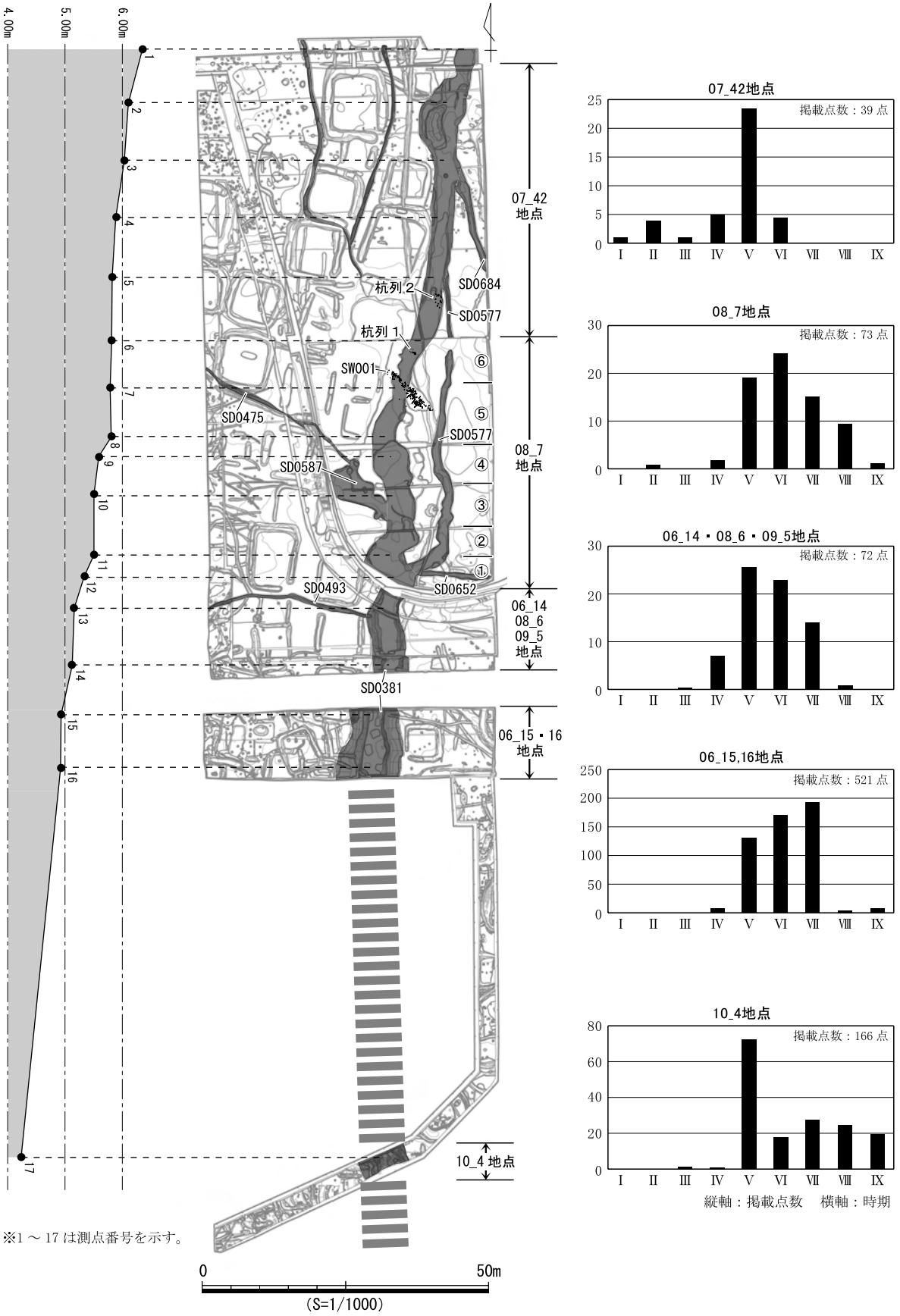


図 2563　Ｂ地区の掘立柱建物跡

2　SD0381（大溝）の消長

次に、遺跡を南北に貫くSD0381（大溝）について検討する。SD0381の底面標高は、Ｂ地区北端（図2564測点１）では6.13ｍ、Ｂ地区南端（同図測点17）では4.23ｍであり、約190ｍの間に約1.9ｍの比高差がある。このうち、測点８－９間と測点11－13間では、他よりも底面傾斜が急である。測点８－９間の底面では土坑状の窪みが認められ、土層図ではそれに対応する位置に再掘削の痕跡を確認できる（図2565A-A’）。また、平面的にも土坑状の窪みから北側の埋土は砂礫が主体、土坑状の窪み及びその南側の埋土は植物遺体を含む粘質土が主体であり、埋土の相違が認められる。一方、測点11－13間ではSD0381にSD0577とSD0652が合流しており、SD0577とSD0652埋土はいずれも平面及び土層断面でSD0381埋土を切ることを確認した（同図C-C’）。溝の掘削深度は基底面の状況



※1 ～ 17 は測点番号を示す。

図 2564　SD0381 の底面標高と掲載遺物数

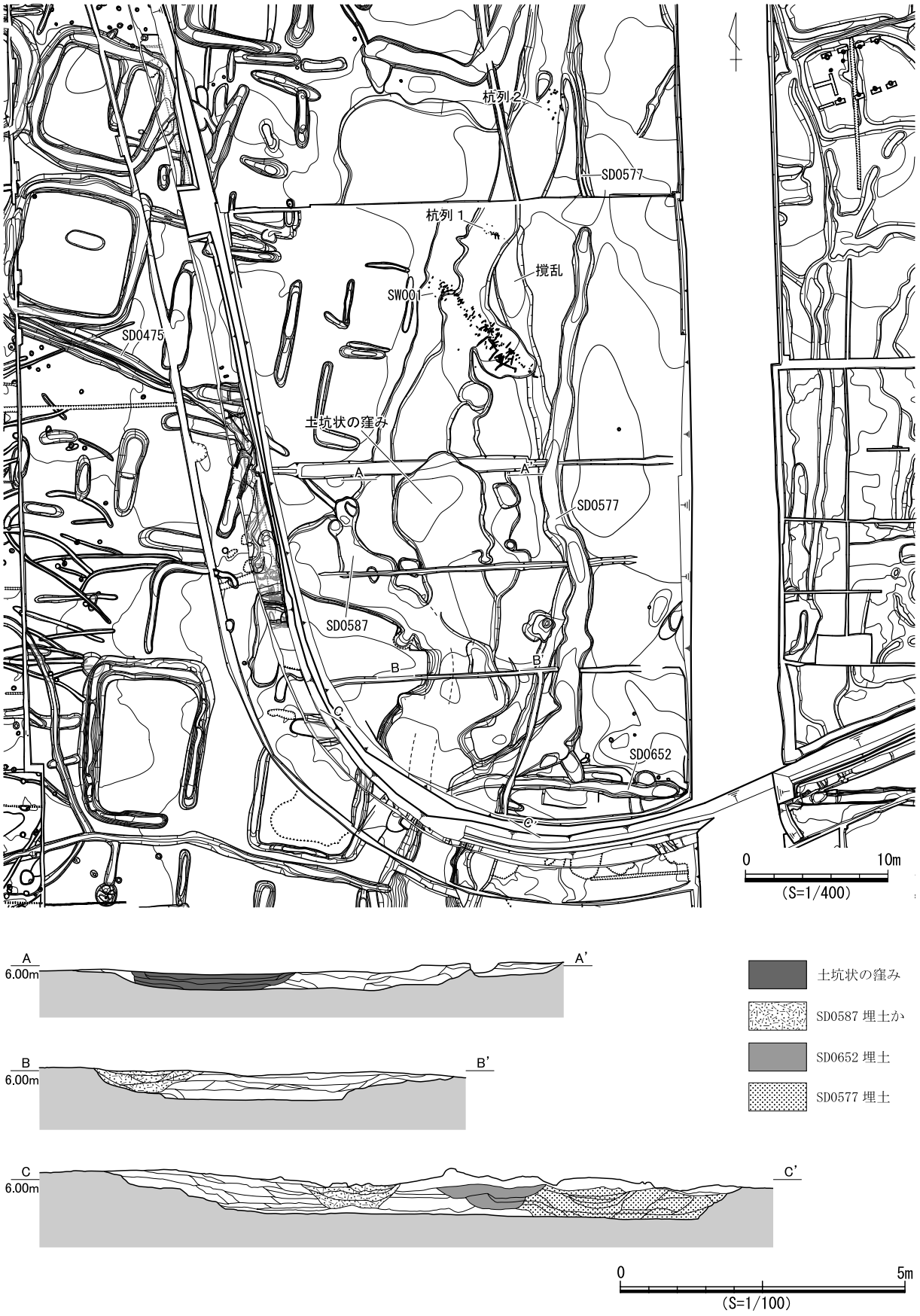


図 2565　08_7 地点周辺の SD0381

によっても変化するが、以上のことから、２箇所の底面傾斜の変化は、溝の再掘削にも関連している可能性が指摘できる。

では、測点８－９間の再掘削時期はいつであろうか。図2564の右側では、SD0381の各地点の報告書掲載土器の時期別グラフを示した[1)]。これによると、07_42地点と10_4地点ではⅤ期の遺物が最も多く、08_7地点から06_15・16地点まではⅤ期からⅦ期までの遺物が一定量出土している。07_42地点のⅥ期としてグラフに表示した数値は、Ⅴ期～Ⅵ期の遺物の按分数値が反映されており、実際はⅤ期までの遺物が大半を占めている。また、08_7地点では、発掘作業時にSD0381を南から北に向かって①～⑥区画に６分割して遺物を取り上げている（図2564）。そして、それらの出土遺物の時期を再検討した結果、①～④区画ではⅥ期～Ⅶ期の遺物が複数認められるものの、⑤区画ではⅤ期１点、⑥区画ではⅡ期１点とⅤ期～Ⅵ期２点のみである（表563）。これらのことから、08_7地点の⑤、⑥区画と07_42地点におけるSD0381からはⅤ期、降ってもⅥ期前半までの遺物しか出土していないことになる。そのため、当該期にはSD0381が埋没し、その後、Ⅵ期のある段階で08_7地点の④区画付近（測点８－９間）から南側を再掘削したと考えておきたい。

なお、Ｂ地区のSD0381内では杭列が３箇所で確認されている。一つは08_7地点⑤～⑥区画のSW001、一つは08_7地点の⑥区画の杭列１、一つは07_42地点のSD0381からSD0577が分岐する地点の杭列２である（杭列１・２は『荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ』にて遺構番号が付されていないので、仮称である）。SW001と杭列１は北西から南東にのびる堰である。杭列２はSD0381底面の高まりと東岸までの間にある多数の杭で、SD0577が分岐する下流に位置することから、堰としての機能が想定できる。一般的に堰の前面には砂礫が堆積しやすく、その改築の際には古い堰の上流側に新しい堰を設置するため、これらの先後関係は古い順に、SW001→杭列１→杭列２と考えられる。そして、杭列２やその導水溝であるSD0577埋没後に、SD0381の08_7地点④区画以南やSD0652などが掘削されたと考える[2)]。また、08_7地点④区画には、土坑状の窪みの西側にSD0475から続くSD0587が位置する。SD0587がSD0381にどのように合流しているのか詳細は不明であるが、図2565の土層図B-B’とC-C’の西側にはそれぞれ再掘削痕跡が認められる。これらが、SD0587と連続する遺構である根拠はないものの、平面的な位置関係からその可能性は指摘でき、土層図C-C’からSD0652埋没後に掘削されたことがわかる。このように、Ｂ地区中央から北側において、SD0381は常に開口していた訳ではなく、埋没と再掘削が繰り返しなされていたと考えられる。

表563　08_7地点におけるSD0381出土遺物の時期

区画＼時期	Ⅱ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅴ～Ⅵ	Ⅴ～Ⅶ	Ⅵ	Ⅵ～Ⅶ	Ⅶ	Ⅷ	総計
⑥	1			2						3
⑤			1							1
④		1	1	2		1	10	1		16
③			3	2				1		6
②			1	4		1	2			8
①		1	2	3	1		9		4	20
総計	1	2	8	13	1	2	21	2	4	54

３　時期別の推移

次に、Ⅴ期からⅨ期までの時期別の建物跡とその関連遺構の分布等について検討する。なお、各時期の分布図作成にあたり、東三河地方の集成（早野2011）を参考として、竪穴住居跡の上端長軸長4.0ｍ未満を小型、4.0ｍ以上6.0ｍ未満を中型、6.0ｍ以上を大型とした。また、図2566～2568、2572、2573では、規模が測定できない住居はすべて中型に含めて図示した。以下、順に説明する。

(1)　Ⅴ期

Ⅴ期の建物数は少なく、竪穴住居跡は西部域に散在し、東部域では南側においてSD0381の東西両

側に１軒ずつ分布する（図2566）。竪穴住居跡の規模はいずれも中型であり、SD0381東側に位置するSB554は、外周溝を有し、周溝や柱穴内からベンガラが出土した。掘立柱建物跡はSD0381の東側に２棟[3)]分布し、西部域では確認できていない。なお、西部域では方形周溝墓の方台部や周溝と重複して竪穴住居跡が構築されている。

掘立柱建物跡と関連する遺構としてSD0684、1250が挙げられ、両遺構は同一遺構の可能性が高い。この溝状遺構はSH008の南側で屈曲し、方形周溝墓間の空閑地を通っている。その機能は不明であるが、SD0684がSD0381から導水を目的として掘削されたのであれば、SH010の役割の一つとして導水

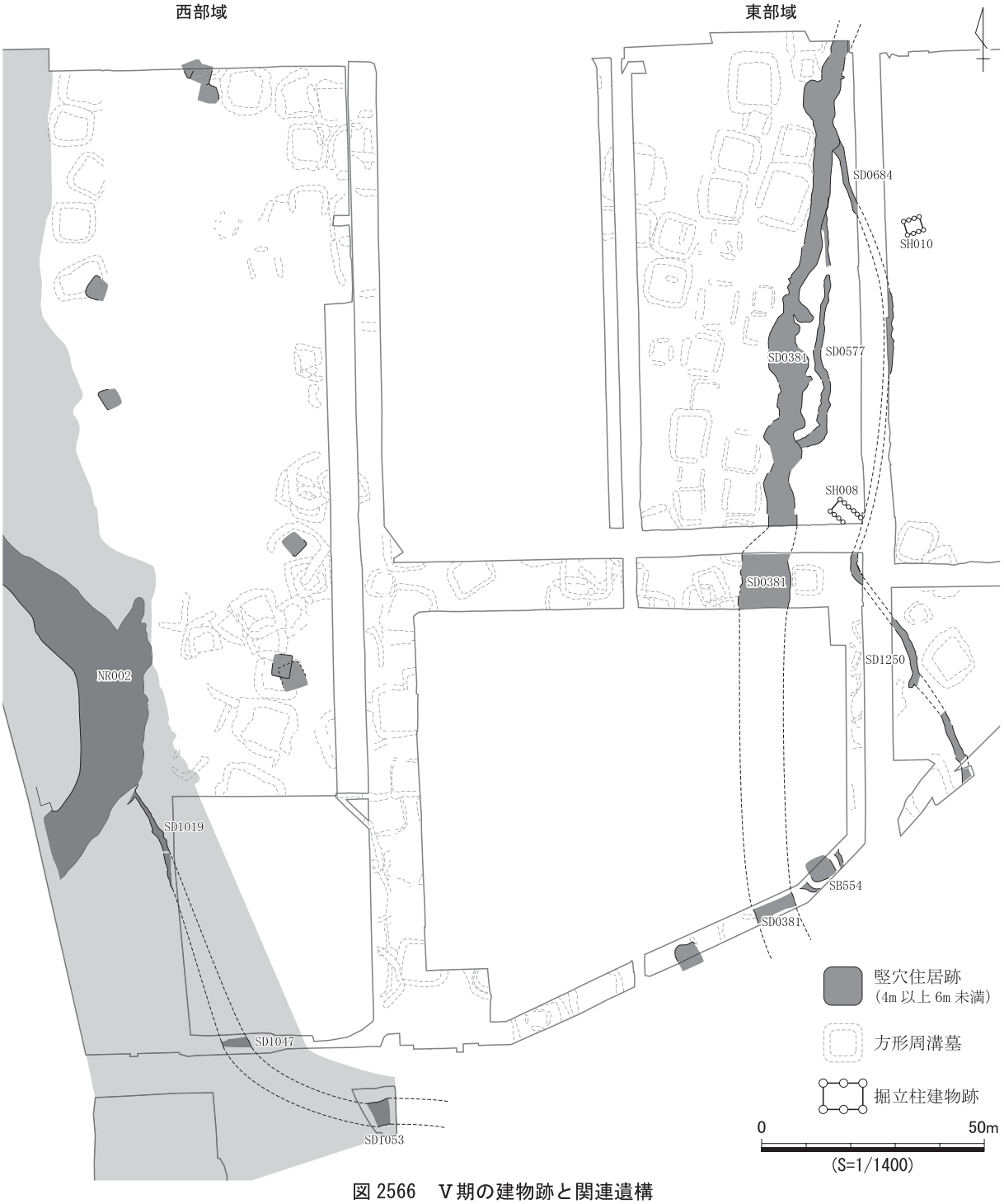


図 2566　Ⅴ期の建物跡と関連遺構

を管理する目的があった可能性も指摘できる。また、Ｖ期の建物数は少ないにも関わらず、SD0381ではＶ期段階の遺物の増加が認められる（図2564）。なお、Ｖ期において、玉類や合子、銅鏃などの特殊な遺物が出土した建物跡は確認できなかった。

(2)　Ⅵ期

Ｖ期よりも建物数が増えるものの、全体的に散在し、建物の重複も少ない（図2567）。西部域ではSD0433の南北側に、東部域ではSD0383の西側に多く分布している。SD0433、0943はＡ地区から続く一連の溝状遺構であり、両遺構はＢ地区において約9.2ｍの間が途切れていることから、この空閑地

図2567　Ⅵ期の建物跡と関連遺構

が出入口の一つであったと考えられる。この溝状遺構の北側における竪穴住居跡の規模は中型のみであるが、南側は大型、中型、小型が認められ、南北で様相が異なっている。一方、SD0383の西側における竪穴住居跡の規模は、小型と中型が認められ、SH006やSA007、008が存在する。SD0383の西側における建物群は、Ａ地区の住居跡の集中区である南東部ブロック（岐阜県文化財保護センター2013）と一連のまとまりと考えられる。なお、住居に近接するSD0433やSD0383からはⅥ期の土器が多量に出土しているが、SD0383の東側にあるSD0381（07_42地点の範囲）からはⅥ期の遺物がほとんど出土していない（図2564）。そのため、SD0383の西側の建物が機能している時点でSD0381は埋没していたと考えられ、SD0383は建物群の東端を区切る溝であった可能性がある。

Ｂ地区の東側ではⅤ期からⅥ期にかけて水田が造営され、その北東側にSD0572、0634、0635、南側にSD0652などの溝状遺構が掘削されている（図2560）。SD0652の南側には３軒の竪穴住居跡があり、そのうちSB121は外周溝が巡り、排水溝も設けてある。また、SD0381はⅥ期のある段階でSD0475との合流付近から再掘削されている。

なお、Ⅵ期における建物跡のうち、西部域の大型住居群周辺と東部域北側のものは、弥生時代中期の方形周溝墓が造営されていない範囲に構築されている。しかし、西部域の中型住居群は方形周溝墓の方台部や周溝と重複して構築されている。東部域においては、SD0383、0475、0493、0558などの溝状遺構がⅤ期からⅥ期にかけて掘削されており、これらは弥生時代中期に造営された２列に並ぶ方形周溝墓列の間に位置する。溝状遺構と方形周溝墓列との関係は、SD0383、0475、0493は方形周溝墓の周溝を切り、SD0558は方形周溝墓間の空閑地を通っている。また、SD0381の東側に位置するSD0653、1198はSZ212の周溝北東側で屈折しており、明らかにSZ212を避けている。そのため、Ⅵ期の段階において、東部域の弥生時代中期の方形周溝墓群は、ある程度可視できる状態であったと考えられる[4)]。なお、大型住居であるSB239から管玉１点、SB378から銅鏃１点が出土した。

(3)　Ⅶ期

Ⅵ期よりも建物数が増え、西部域では北側と中央付近にまとまりがあり、東部域では調査区が狭小であるため定かではないが、中央付近がまとまる可能性がある（図2568）。西部域の中央付近では建物の重複が著しく、Ⅶ期の竪穴住居跡だけでも７軒から８軒の切り合い関係が認められる。なお、Ⅶ期には西部域のSD0433やSD0943などの溝状遺構は埋没しており、Ⅵ期に大型住居が分布した西部域のSD0433の南側は分布が希薄となり、東部域のSD0383西側には住居が構築されていない。大型住居は西部域中央に多く、北側のまとまりでは１軒のみを確認した。また小型住居は西部域中央では北東側に多く、北側では大型住居の周辺に分布する。なお、弥生時代中期の方形周溝墓との関係であるが、西部域の建物跡の多くは方形周溝墓の方台部や周溝と重複して構築され、東部域でも中央付近や南側では西部域と同様であるが、東部域の中央から北側にかけての方形周溝墓列がある領域には建物が構築されていない。

掘立柱建物跡は西部域から東部域中央にかけて散在して分布し、西部域中央付近には桁行６間×梁行４間の大型建物であるSH019が、東部域中央付近には独立棟持柱建物であるSH027が位置する。

SH019周辺には、壁際に沿って小穴を配置する竪穴住居跡が存在する。東三河におけるこのような竪穴住居跡を整理した早野氏は、上端長軸長6.0ｍを超える大型のものと一般的な竪穴住居跡と変わらない規模のものがあるとし、遺跡によっては集落内における中心的な施設であったと考えている（早

野 2011)。当遺跡におけるこのような住居は５軒認められ、その規模は4.9ｍ～5.9ｍであり、一般的な竪穴住居跡と同規模である。しかし、いずれも特定の場所にまとまり、それが大型建物であるSH019に近いことは特異であるため、一般的な竪穴住居跡とは構造が異なる壁立建物と考える[5]（以下、壁立建物と称する。)。そこで、SH019と壁立建物を検出した領域を、Ⅶ期における一つの中心領域とする。中心領域の掘立柱建物跡、壁立建物、大型住居の重複関係を整理すると（図2569)、当初に主軸方位が真北から大きくずれる壁立建物SB376と大型住居SB383が造営され、その後、主軸方位が真北に近い掘立柱建物跡２棟（SH017、SH019）に代わる[6]。SH019の存続期間は不明であるが、SH017

図 2568　Ⅶ期の建物跡と関連遺構

の廃絶後にほぼ同規模の壁立建物であるSB362とSB375が南北方向に並列して構築され、その後、壁立建物SB374、大型住居SB361が造営されている。

独立棟持柱建物であるSH027の東側にはSA027が位置する（図2570）。SA027はSH027の南辺の柱筋の延長上にあることから、両者の関連性は高いと考えられる。SH027を中心とする領域の性格は不明であるが、SH027から東に約19ｍ離れたSD0381東岸から倭鏡（6710）が出土している。この倭鏡は重圏文鏡であり、出土した時点（平成18年度）では全く同じ文様の出土例はなく、この種の鏡のなかでは最も古い形態である可能性が指摘されている[7]。また、倭鏡自体が特殊な遺物であるとともに、ベンガラが鏡面と鏡背に付着している点や、外面に黒色顔料と赤色顔料が塗布され、内面に赤色顔料が残る手捏ね土器（5297）が倭鏡付近から出土している点などから、これらは祭祀に用いられた可能性が高い。しかし、倭鏡とともに出土した土器類はそれ以外には少なく、SD0381の岸辺で祭祀が執り行われたかは不明である。そのため、現段階ではSH027からSD0381東岸までの一帯を、Ⅶ期段階の一つの祭祀空間[8]と認識しておきたい。なお、Ⅶ期の段階において、弥生時代中期の方形周溝墓がどれほど人々に認識されていたかは定かでないものの、SH027はＡ地区から約200ｍ続く方形周溝墓列の南西端に位置し、SA027はそれらの空閑地（墓道）の最南端に位置している[9]。

なお、図2571左ではⅦ期の竪穴住居跡のうち、床面にて焼土もしくは炉を検出した住居（焼失家屋に伴う

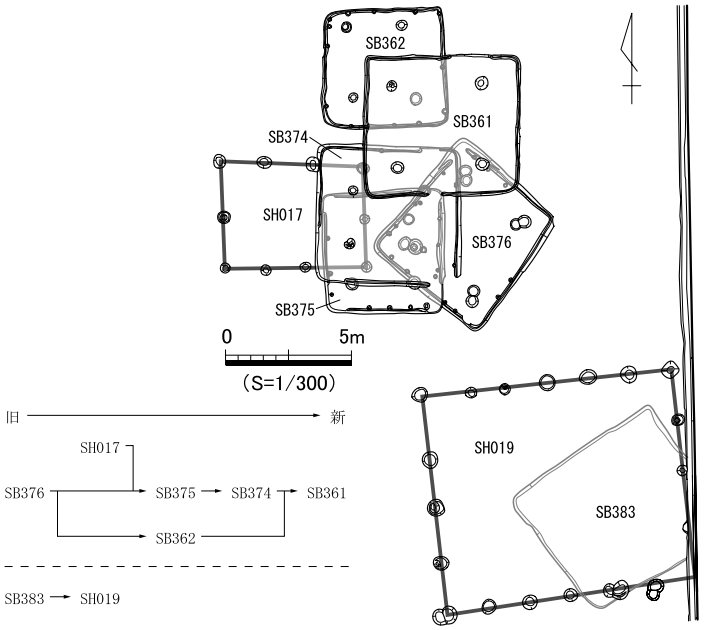


図2569　建物跡の重複関係の整理

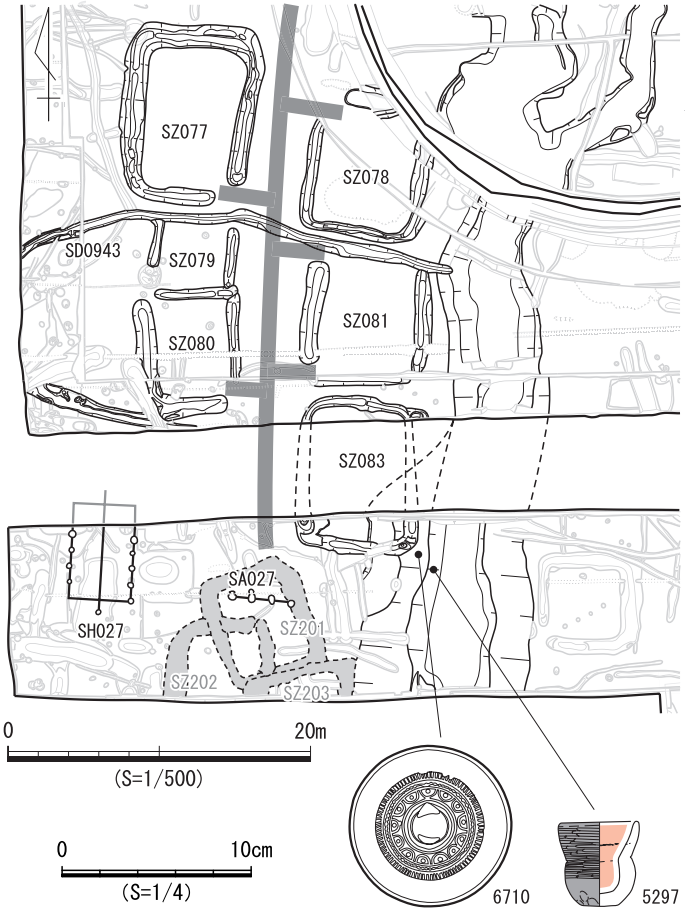


図2570　SH027とその周辺

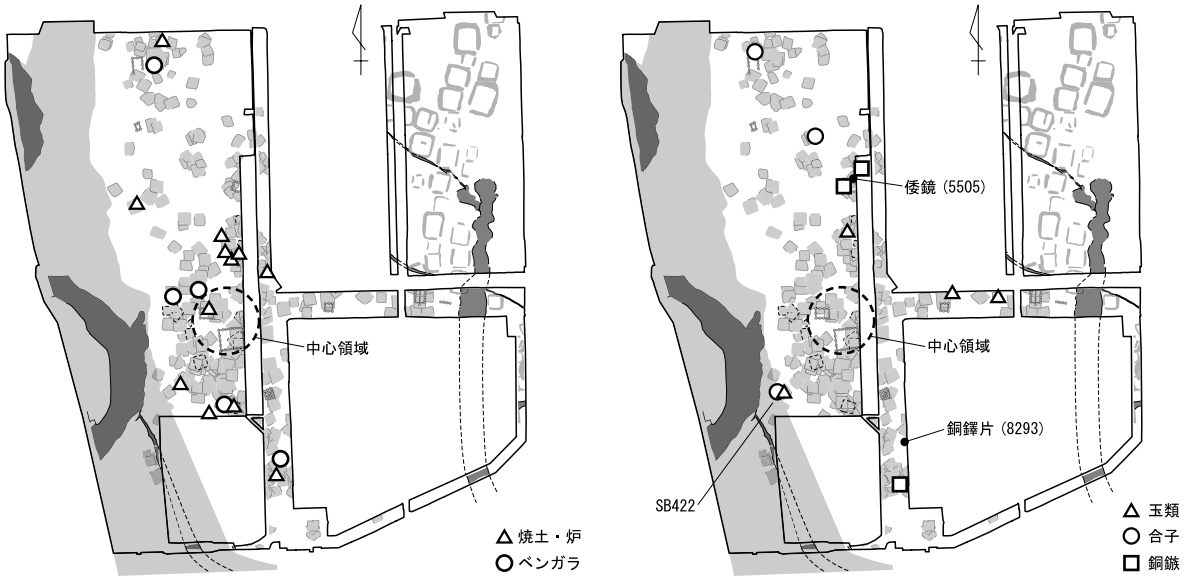


図 2571　Ⅶ期における竪穴住居跡の諸様相

焼土は除く）と、ベンガラが出土した住居の位置を示した。ベンガラが出土した住居は散在しているが、焼土もしくは炉を検出した住居は西部域中央付近のまとまりの周縁に多く認められる。また、同図右ではⅦ期の竪穴住居跡のうち、一般的に稀少品とされる玉類、銅鏃、合子が出土した住居の位置を示した。いずれも散在しているが、西部域中央付近のまとまり内からの出土は少ない。また、Ｂ地区南西端のSB422からは管玉と合子が出土している。なお、廃棄された時期は不明であるが、遺物包含層から倭鏡（5505）と銅鐸片（8293）が出土しており、その位置は倭鏡が北側の銅鏃出土住居に近接し、銅鐸片が南側の銅鏃出土住居の北側である。

(4)　Ⅷ期

Ⅶ期よりも建物数が減り、建物のまとまりは認められないが、およそⅦ期における中心領域の周縁に多く分布する傾向があり、東部域には少ない（図2572）。Ⅷ期は中型住居の比率が高く、小型住居はＢ地区北西隅に２軒、南東隅に１軒分布する。掘立柱建物跡は竪穴住居跡が多く分布する範囲内に２棟確認し、SH016は梁行２間×桁行２間の側柱建物、SH022は梁行３間×桁行３間の総柱建物である。また、SH022付近では５軒以上の建物跡が重複しており、Ⅶ期段階と同様に数回の建替えがなされたと考えられる。なお、竪穴住居跡のうちSB364のみ壁立建物であり、Ⅷ期の建物跡において玉類や合子が出土した遺構はなく、SB555で銅鏃が１点出土した。

(5)　Ⅸ期

Ⅷ期よりも建物数が減り、建物のまとまりは認められないが、Ⅷ期と同様におよそ西部域の中央付近に多く分布する傾向があり、東部域には少ない（図2573）。Ⅸ期の建物の特徴として、主軸方位がほぼ真北である大型住居が３軒存在することと、主軸方位は真北からややずれるものの側柱建物跡が４棟存在することである。側柱建物跡は、Ⅷ期の段階で建物群の空閑地であった場所に構築されているが、SH020とSH021は重複していることや竪穴住居跡も２軒が重複する場所が３箇所で認められるため、Ⅸ期段階においても数回の建替えがなされていたと考えられる。なお、Ⅸ期の建物跡において、玉類や合子、銅鏃が出土した遺構は確認できなかった。

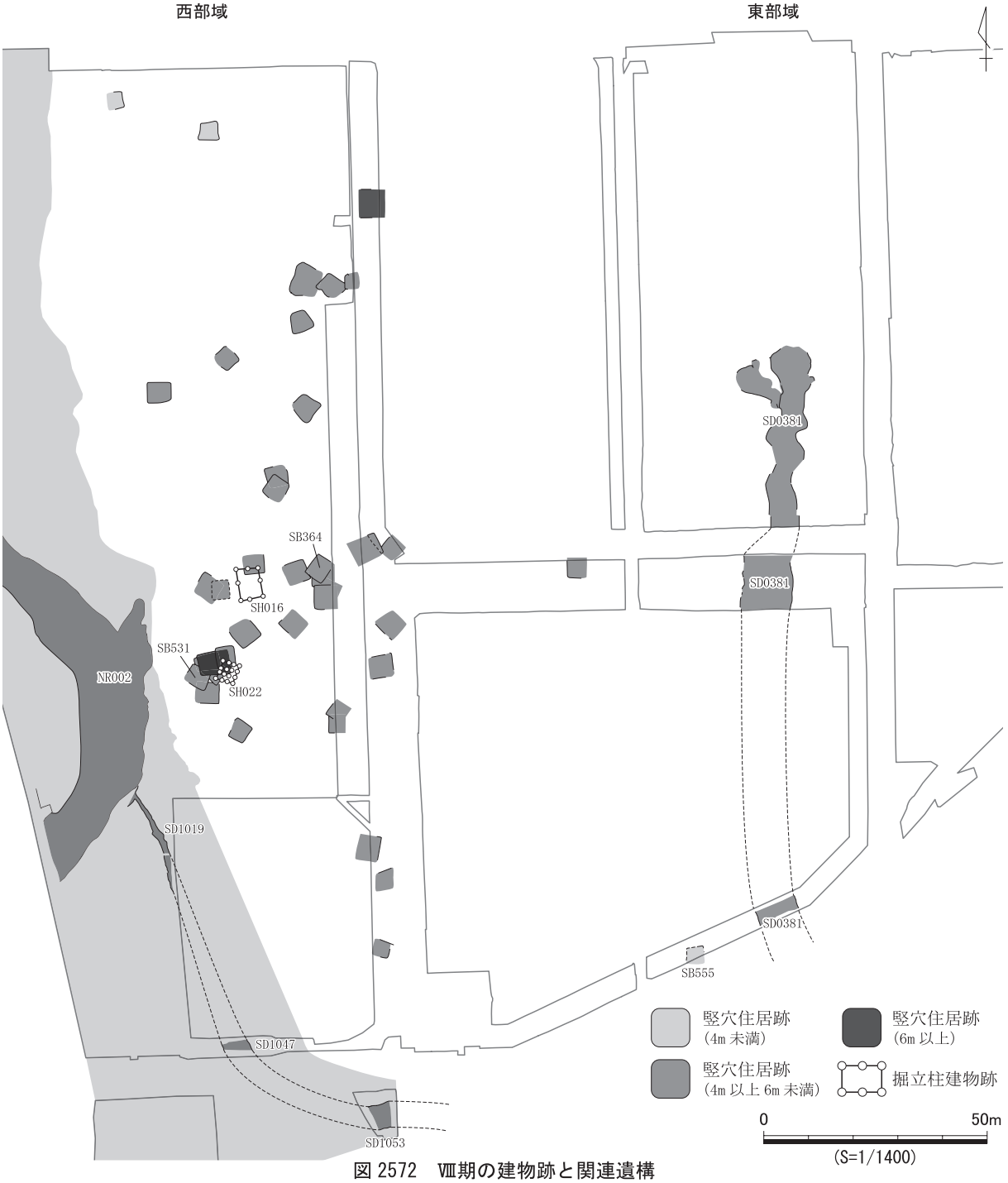


図 2572　Ⅷ期の建物跡と関連遺構

注

1）グラフを作成するにあたり、例えばⅤ期～Ⅵ期の壺と記載した遺物の時期は、Ⅴ期とⅥ期に数値を按分して作成した。

2）SD0577からはⅢ期からⅩ期までの遺物が出土しており、埋没時期は明確でない。しかし、SD0577を切るSD0652の時期はⅤ期末～Ⅵ期とされていることから、SD0577の埋没時期はそれ以前と考えられる。

3）Ⅴ期の掘立柱建物跡のうち、SH010は『荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ』の報告書においてⅣ期とされている。しかし、SH010-P5出土遺物がⅣ期～Ⅴ期、出土した柱根の放射性炭素年代測定結果が弥生時代中期から後期、検出状況がⅤ期～Ⅵ期の水田跡よりも先行することなどから、ここではⅤ期以前の建物跡と捉えた。

4）東部域のSD0381西側には桁行１間×梁行１間のSH007、009が存在する。SH007は方形周溝墓の方台部から外れた場所に位置するが、SH009は重なる。しかし、SH009は柱穴掘形が浅く、柱間が5.95mあり、建物跡の認定には

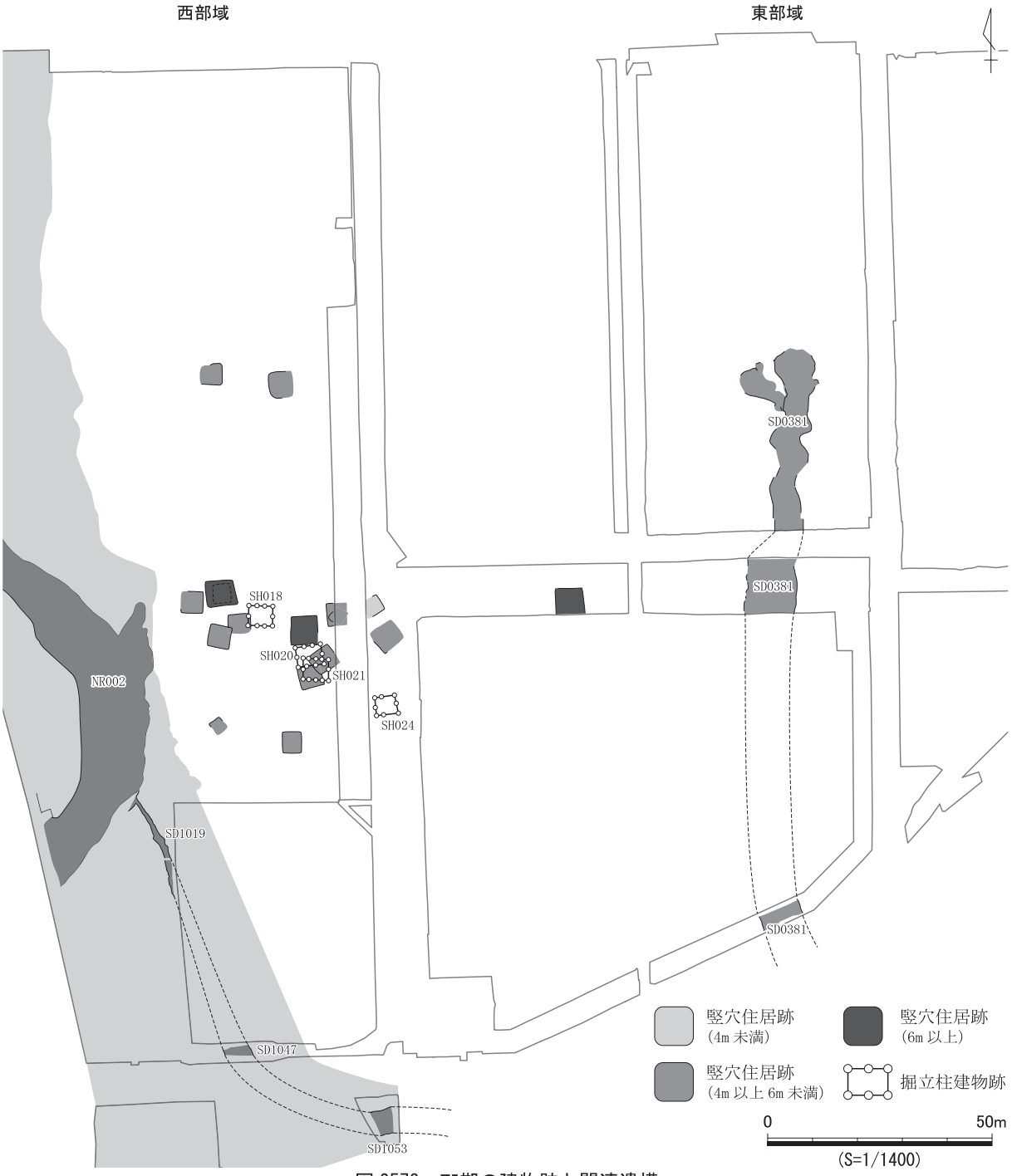


図 2573　Ⅸ期の建物跡と関連遺構

検討を要する。また、SD0381 の西側には溝が環状に巡る SD090 も存在するが、その性格は不明である。

5）今回検出した壁立建物の大半は、床面に４本の主柱穴をもち、埋土には土壁のようなスサ入りの粘土ブロックは確認できていない。そのため、いわゆる「大壁建物」のような構造ではない。

6）SB376 と SH017 は平面的には重複していないが、近接しているため同時存在は認めにくく、主軸方位の変化から SH017 の方が後出すると考えた。

7）森下章司氏の御教示による。

8）領域は区域がある程度限定できる範囲、空間は区域の境界が不明瞭である範囲として使い分けた。

9）方形周溝墓列はさらに南側に続く可能性があるものの、現状で把握できる列墓の南端は図 2568 の SZ083 である。その南側に位置する方形周溝墓群（SZ201 ～ 203）は列墓の空閑地（墓道）上で重複し、竪穴住居跡に切られている。

第３節　土器組成の概観

１　概要

表564に示したとおり、当遺跡で出土したすべての土器点数は、極めて膨大な量となる。その中でも本書の対象となる調査地点からの弥生土器・土師器の出土点数は突出して多いことが分かり、単位面積当たりの出土点数も遺跡全体の平均値よりも多くなっている。遺跡全体の中でも、当該期における人間生活の痕跡が色濃く残る一帯であることを示す数値といえよう。

表564　荒尾南遺跡出土土器点数

	縄文土器	弥生土器・土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗・陶磁器類	合計	弥生・土師点数/㎡
A地区Ⅰ	108	504,016	2,449	320	8,185	515,078	47.7
A地区Ⅱ	454	366,346	1,581	485	2,521	371,387	149.9
B地区Ⅰ	95	471,372	1,268	320	4,189	477,244	30.6
B地区Ⅱ	377	2,084,709	618	487	3,794	2,089,985	108.1
C地区	20	303,783	314	109	322	304,548	42.4
合計	1,054	3,730,226	6,230	1,721	19.011	3,758,242	68

既報告のＡ地区、Ｃ地区が示す傾向と同様に、本書の対象地点においてもその大半が弥生時代～古墳時代前期の資料である。質、量ともに豊富な当該期の資料をもとに土器組成を概観する。なお組成比は既存の方法（宇野1992）の手順に従って口縁残存率を計測した数値を用いるものとし、残存率が12分の１に満たない小破片については１に切り上げてカウントした。なお、口縁部破片数は接合後の数値である。

２　時期別の土器組成

出土遺物数・検出遺構数の多い弥生時代から古墳時代にかけては『荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ』に示したように、既存の研究成果を参考にⅠ期からⅩ期に細別時期を設定した。なお、微小な土器片についても可能な限り分類・計測を行ったが、遺存状況によっては器種・時期を細分して判断することが難しいものがあった。こうした土器については第３章第２節及び第３節にしたがって大別した。

今回報告する地点から出土した土器を時期別に集計したものが表565である。Ⅴ期～Ⅶ期に当たるものが約85％を占めて最も多く、Ⅷ期～Ⅹ期、Ⅱ期～Ⅳ期と続く。このことは、当遺跡において弥生時代から古墳時代前半にかけての長期間にわたって土地利用が継続したことを示しており、中でもⅤ期～Ⅶ期の期間においてより大規模に人間活動が展開したことの結果であると考える。この時期の土器が豊富に出土する傾向については本書の対象となる調査地点に限ったことではなく、当遺跡全体における傾向と言ってよい。『荒尾南遺跡Ａ地区Ⅰ』、『荒尾南遺跡Ａ地区Ⅱ』においては約80％、『荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ』においては95％がⅤ期～Ⅶ期の土器となっている。なお、図2574の09_18地点は出土遺物数が極めて少量であり、さらに調査区が10_5地点に近接しているため、口縁残存率、破片数を10_5地点に含めて集計した。

表565　時期別の土器組成（全地点）

	口縁残存率	比率	口縁破片数
縄文	168.5	0.4%	163
Ⅰ期	950.6	2.2%	797
Ⅱ～Ⅳ期	2,418.8	5.6%	1,561
Ⅴ～Ⅶ期	36,686.5	84.6%	24,842
Ⅷ～Ⅹ期	2,467.6	5.7%	1,321
他	664.0	1.5%	486
合計	43,356.0	100%	29,170

図2574は、出土した土器を５つの時期に大別し、その時期別の組成を比較したものである。縄文土器

図 2574　全地点の時期別土器組成

の出土は168.5（口縁残存率）と非常に少なく全体の0.4％にすぎない。地点別にみると11_4地点では4.6％という最も高い比率を示しているが、同地点は自然流路が全面に広がり、その流路埋土中から出土したものである。縄文時代の遺構及び自然流路としてはSB446、SB447、NR010が晩期としてあげられるものの数としては極めて少なく、縄文土器の出土量の少なさと比例する。この３遺構は10_3地点にあり、同地点における縄文土器の出土比率が2.7％と比較的高くなっている。上記の２地点は南北に隣接しており、Ｂ地区南西部に位置している。一方でＢ地区南東部にあたる08_9、10_4、10_5、06_15・16においては縄文土器の出土は認められず、この差異は縄文土器の出土状況における特徴的な一つの事象として指摘できる。

Ⅰ期の土器は全体の2.2％である。この中でも11_4地点においては85％を超える比率で出土しており、極めて特異な出土状況を示している。その次に出土比率の高い08_8地点が5.6％であることと比較しても、11_4地点における出土状況がいかに特殊であるかを示している。前述の通り11_4地点は自然流路が主体となる地点で、NR014からNR017の流路が時期によって流れの幅や筋を変えながら砂礫によって埋没していく地点である。土器はその砂礫堆積中から散在して出土し、器種別では壺（約57％）と甕（約37％）の２種で大半を占める。なお他地点では、Ⅰ期に限定した土器組成を比較することが可能なほどのまとまった出土が認められないため比較は困難である。11_4地点以外にⅠ期の土器が比較的多く認められるのは08_8地点（5.6％）だが、それ以外の地点では１％前後以下と極めて少量である。１％を超える地点は11_4地点と08_8地点に加え06_17・18、08_9、10_3、11_5の各地点に限られ、他の地点では１％に満たない。Ｂ地区全体を見渡すと南部に偏る傾向が認められ、当然のことながらそれは当該期の遺構密度の偏りと共通する。11_4地点で出土する土器の大半は遠賀川系土器によって占められるが、これだけ遠賀川系土器がまとまって出土する状況は県内では他に例を見ない。Ⅰ期の土器としては遠賀川系土器の他に、亜流遠賀川系土器、条痕文系土器、沈線文系土器等もわずかに認められる。

Ⅱ期～Ⅳ期の土器は全体の5.6％である。弥生時代中期の土器として大別したが、その内実はⅡ期～Ⅲ期がそれぞれ約３％に過ぎず、約94％がⅣ期の土器で占められる。当遺跡においては弥生時代中期の居住域は確認されておらず、当該期の遺構としては方形周溝墓が大半を占めている。以上の点から、弥生時代中期の土器の大半はⅣ期の方形周溝墓に伴って出土するものであると言える。地点別に比率が高くなっているのは08_8地点で44.5％を占める。08_8地点周辺は弥生時代中期の方形周溝墓に重複してその上層に建物跡が確認されることが多いが、この地点に限っては建物跡の密度が低くなっているため、方形周溝墓に伴うⅣ期の土器の比率が相対的に高くなっているものと考えられる。他には08_9地点が約20％、06_19地点が約17％、10_5地点が約16％と高い比率を示している。本書で報告する地点を北部（10_1、09_4、10_2a、08_3、10_2b、11_6・7、06_15・16、06_17・18地点）と南部（10_3、11_4、08_8、06_19、08_9、10_4、10_5地点）でおよそ大別した場合（11_5地点は南北に長いため除外）、北部の比率の平均値が4.2％であるのに対して南部の平均値は15.2％と４倍近い値を示している。本章第１節で述べたとおり、Ⅳ期の方形周溝墓がＢ地区南側に偏在する傾向とこの傾向は

表566　弥生時代中期の土器組成

	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期
壺	56.9%	85.9%	29.6%
甕	41.9%	8.3%	61.4%
高坏	0%	3.3%	5.7%
器台	0%	2.5%	0.1%
鉢	1.2%	0%	3.2%

合致している。器種については表566に示すとおり、Ⅱ期における組成は壺が約57％、甕が約42％、Ⅲ期においては壺が約86％、甕は約８％で他に高坏、器台が認められる。ただし、Ⅲ期における高坏、器台は明確に分類してはおらず、分類作業時に誤認した可能性が高い。Ⅱ期における壺：甕の比率がおよそ６：４であるのに対し、Ⅲ期になるとそれが９：１に変化する。さらにそれがⅣ期になると３：６になり、一転して壺が少数派に転ずる。時間の経過に伴うこの組成の劇的な変化の要因は不明だが、いずれにしてもたいへん興味深い事実である。第１節において、Ⅱ期からⅣ期まで方形周溝墓に伴う供献土器としては壺が圧倒的に多いと指摘したとおり、Ⅱ期、Ⅲ期においてはおよそその傾向を土器組成からも看取できる。しかし、Ⅱ期においては甕が40％を超える比率で出土している。Ⅱ期の竪穴住居跡は報告されていないという状況の中で、供献土器とは認められないⅡ期の甕が相当数出土しているという事実には注意を払うべきである。Ⅱ期の集落域が確認されていない以上、集落域の生活痕跡としてというより方形周溝墓や関連する葬送儀礼にかかわるものの可能性が高いとして理解せざるをえないであろう。Ⅳ期においてはどうか。確かに方形周溝墓の供献土器としては壺が遺存状況もよく、どうしても目を引いてしまうが、甕が供献された例も相当数確認され、しかもその甕には外面に煤が付着しているものも認められている（SZ134出土528、SZ169出土663、SZ219出土5863など）。当遺跡において弥生時代中期の建物跡や焼土痕が認められていないという事実と、火にかけて煮炊きを行った痕跡として外面に煤が付着したⅣ期の甕が方形周溝墓に供献されているという２つの事実の共存については大変興味深いところであるが、ここでは事実の報告のみにとどめる。

Ⅴ期～Ⅶ期の土器は全体の84.6％となり、出土量が最も多い時期である。中でも集落が最も大規模に展開するのがⅦ期に当たり、したがってⅦ期の土器出土量が最も多いと考えることが可能だが、ここではⅤ期～Ⅶ期をまとめて考察する。この時期の比率が高いのは10_1、10_2a、09_4、06_15・16の各地点でそれぞれ90％を超えており、北部に偏る傾向が認められる。それに対して南部には90％以上の比率を示す地点はなく、11_4地点で約６％、08_8地点で約46％、10_5地点で約66％、08_9地点で約77％、10_4地点で約78％など、その比率は相対的に低くなっている。比率の平均値を比較すると北部８地点では約85％、南部８地点では約65％となり、その違いは明確である。

図2575は、各地点から出土したⅤ期～Ⅶ期の土器の器種別組成を比較したものである。地点によって多少の差はあるものの全体として優勢なのは甕で、平均では約45％を占めている。続いて壺、高坏が約20％近くとなり、鉢、器台という順で少なくなる。なお、母数が極端に少ない10_1、11_4の両地点においてはこの限りではない。08_3地点における甕の比率や、09_4地点における壺の比率がやや高率であったりする程度の差異を読み取ることはできるが、その他の点についておよそ顕著な傾向を見出すことは難しい。しかし、当遺跡が最も隆盛を極めるこの時期に竪穴住居が密集し人々が活発に活動していたということと、この時期の土器の中で日用品としての甕が最も高い組成比率を示すことは、改めて指摘する価値のある事実であろう。表567で掲載土器の比率を見てみると甕は30％程度の比率となっているが、実際はそれよりも高い比率で出土している。また、高坏においてはそれと逆の現象が起きているという実態が見えてくる。本書に目を通して受ける印象よりも、実際は甕の出土比率が高くなっているということが言える。

表567　Ⅴ期～Ⅶ期の土器組成

	全点	掲載土器
壺	20.7%	23.4%
甕	44.8%	30.4%
高坏	18.9%	27.2%
器台	6.3%	6.8%
鉢	8.1%	8.2%
他	1.2%	4.0%

図 2575　Ⅴ期～Ⅶ期の地点別土器組成

Ⅷ期～Ⅹ期の土器は全体の5.7％である。第２節において指摘したとおり、竪穴住居の数はⅦ期がピークとなり、Ⅷ期以降になるとその数は減少の一途をたどる。それに伴い、この時期の土器の出土比率が低くなっていく。10_2b地点（12.9％）や06_17・18地点（10.0％）で比較的比率が高くなっているのは、Ⅷ期以降の建物跡がこの両地点で多く確認されていることに起因する。10_4地点（16.8％）においても比率が高くなっているが、その大半はSD0381の上層から出土したものであり、SD0381の埋没過程で窪地状になったところに廃棄された可能性が考えられる。なお、10_5地点においても18.5％と高い比率を示しているが、母数が極めて少ないためここでは参考数値としたい。

それ以後の時期、古墳時代後期以降については須恵器、中世土師器皿、灰釉陶器、中近世陶器等が各所から散在して出土しているが、量的に少ないうえ遺構に伴う出土状況も認められないため、詳細について述べることは控えることとする。

３　竪穴住居跡における時期別の土器組成

本書においてはⅤ期からⅨ期の竪穴住居跡を373軒報告しているが、そこから出土する土器の組成について述べたい。しかし、量が膨大ですべての竪穴住居跡から出土した土器について詳述することは不可能であるため、ここではいくつかの竪穴住居跡を時期別に抽出して検討するものとする。抽出条件は、遺構の先後関係や出土土器の時期認定から当該期の竪穴住居跡と認定した遺構であること、できるだけ全形に近い面積を検出していること、口縁部計測に基づく分類可能な土器が相当数認められたことによる。併せて、可能な限り広い範囲からの抽出を試みたが、条件不足によりその限りではない。なお、当遺跡においては竪穴住居跡が幾重にも重複している箇所がみられるため、出土した土器のすべてについてどの竪穴住居跡に帰属するものかについては不確定要素を完全には排除できない実態があることを申し添える。第２節において述べたとおりⅤ期、Ⅵ期と住居数が増加してⅦ期にその数が最大となり、Ⅷ期からⅩ期にかけて減少する。Ⅴ期の竪穴住居数は少なくそこから出土した土器の点数も、組成比較データの母数とするには少量であるため、ここではⅥ期以降について述べる。

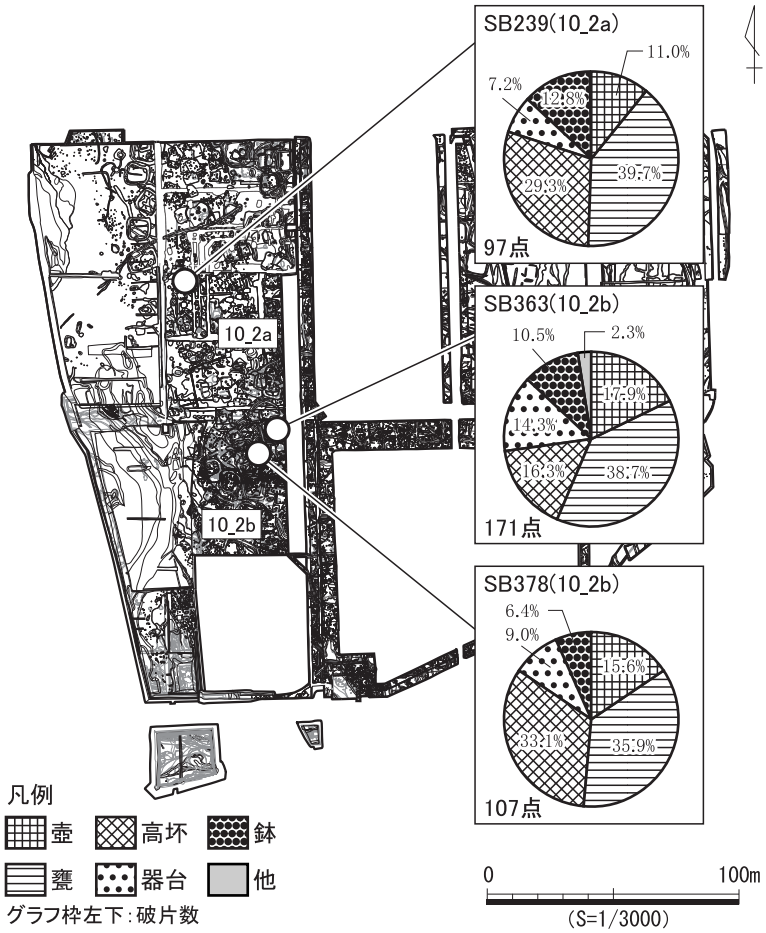


図 2576　Ⅵ期竪穴住居跡出土土器の組成比較

はじめにⅥ期について述べる。

この時期の竪穴住居跡としてSB239(10_2a地点)、SB363(10_2b地点)、SB378(10_2b地点)の３軒を抽出したが、10_2bの２軒は前述の抽出条件に従った結果、近接する２軒となった。表568に数値をまとめたが、表中Ａは「口縁残存率」を、表中Ｂは「比率」を示すものとし、以後の表もこれにならうものとする。前述したＶ～Ⅶ期全点組成（表566）と比較してみると、総じて壺、甕の比率が低くなっている。壺は３軒いずれとも20％を下回り、同様に甕も40％を下回っている。逆に高坏・器台についてはばらつきがみられるものの、およそＶ～Ⅶ期全点組成よりも比率が高くなっていることが分かる。鉢が占める比率については、竪穴住居が人々の居住空間、生活空間であることを考えればもう少し高くてもよいように思われる。なお、SB363において「他」としているものは縄文晩期の深鉢、中世土師器皿等の混入資料であるが、点数にして４点とごくわずかな出土量にとどまる。

表568　Ⅵ期竪穴住居跡出土土器の組成

	SB239		SB363		SB378	
	A	B	A	B	A	B
壺	12.2	11.0%	40.9	17.9%	19.7	15.6%
甕	43.7	39.7%	88.4	38.7%	45.3	35.9%
高坏	32.3	29.3%	37.1	16.3%	41.8	33.1%
器台	7.9	7.2%	32.7	14.3%	11.3	9.0%
鉢	14.1	12.8%	24	10.5%	8.1	6.4%
他	0	0%	5.2	2.3%	0	0%
合計	110.2	100%	228.3	100%	126.2	100%

続いてⅦ期について述べる。この時期の竪穴住居跡としてSB220(09_4地点)、SB280(10_2a地点)、SB374(10_2b地点)、SB444(10_3地点)、SB501(11_5地点)、SB537(06_17・18地点)、SB557(10_4地点)の７軒を抽出した。対象となった竪穴住居跡の中で土器点数が最も多かったのはSB537で306点、

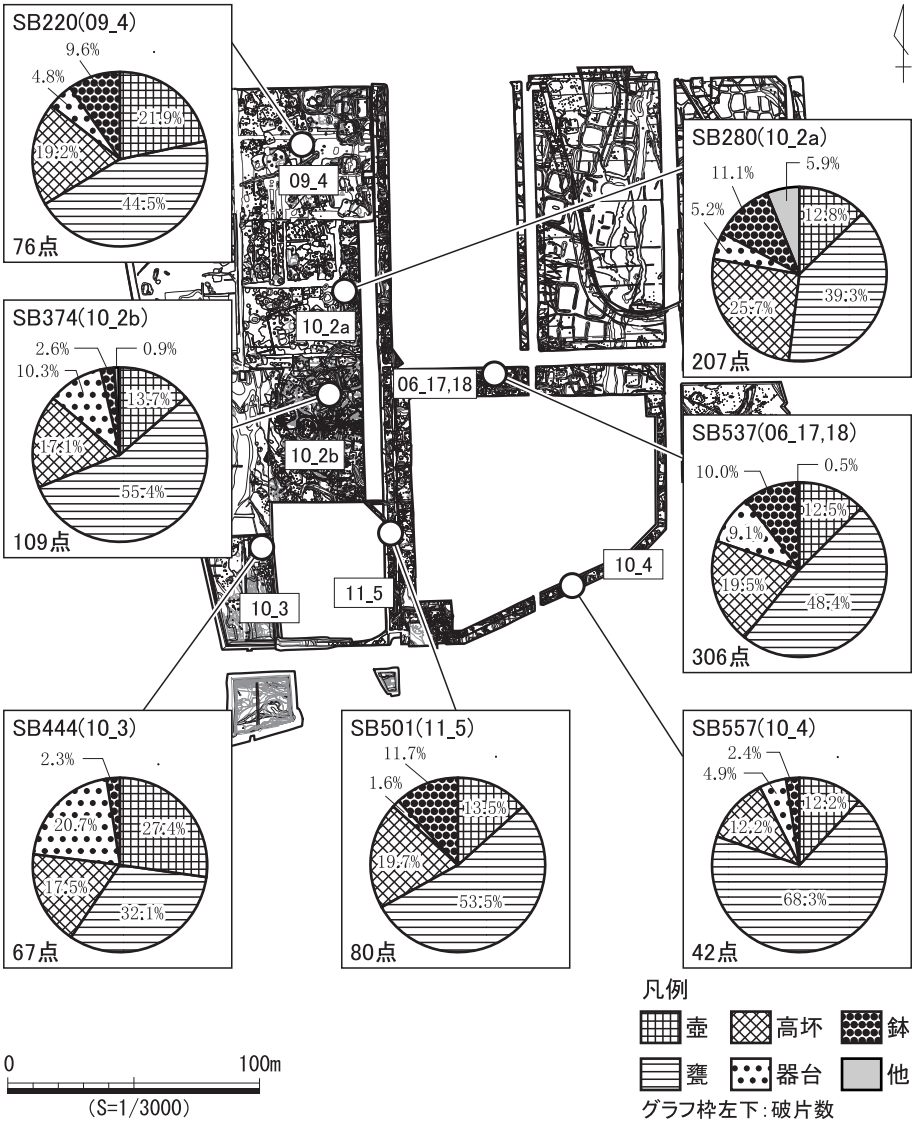


図 2577　Ⅶ期竪穴住居跡出土土器の組成比較

表569　Ⅶ期竪穴住居跡出土土器の組成

	SB220		SB280		SB374		SB444		SB501		SB537		SB557	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
壺	18.2	21.9%	37	12.8%	16	13.7%	23.4	27.4%	16.6	13.5%	54.2	12.5%	5	12.2%
甕	37	44.5%	113	39.3%	65.1	55.4%	27.4	32.1%	65.5	53.5%	209.7	48.4%	28	68.3%
高坏	16	19.2%	74	25.7%	20	17.1%	15	17.5%	24.2	19.7%	84.4	19.5%	5	12.2%
器台	4	4.8%	15	5.2%	12.1	10.3%	17.7	20.7%	2	1.6%	39.5	9.1%	2	4.9%
鉢	8	9.6%	32	11.1%	3	2.6%	2	2.3%	14.3	11.7%	43.3	10.0%	1	2.4%
他	0	0%	17	5.9%	1	0.9%	0	0%	0	0%	2.2	0.5%	0	0%
合計	83.2	100%	288	100%	117.2	100%	85.5	100%	122.6	100%	433.3	100%	41	100%

続いてSB280が207点となり、最も少ないのがSB557で42点、次にSB444で67点となっている。SB557で甕の比率が高くなっていたり、SB444で壺や器台の比率が高くなっていたりという局所的な差異が認められるが、これらは対象点数の少なさによる影響とも考えられる。Ⅴ～Ⅶ期全点組成（表566）と比較すると、総じて壺の比率が低くなっており、高坏は逆に比率が高くなっている。その他の器種についてはおよそ比率に大きな差異は認められず、甕が最も比率が高く、壺と高坏、鉢と器台という順になっている。鉢についてはⅥ期で述べたとおり、やはり比率が低いとの印象を受ける。先述のとおり、Ⅶ期は当遺跡において竪穴住居跡の数が最多となる時期であるため、時期別で考察する場合には、この時期の土器組成が当遺跡における竪穴住居跡出土土器の最も基準的な資料としてとらえるべきであろう。なお、SB280、SB374、SB537において「他」としたものは、複数の手捏ね土器を示している。

最後にⅧ～Ⅸ期について述べる。この時期の竪穴住居跡としてSB479、SB484、SB486(以上11_5地点)、SB540(06_17・18地点)の４軒を抽出したが、当該期は竪穴住居跡の減少期にあたることから、抽出条件から近接するこの４軒となった。時期認定について本文中ではSB479、SB484はⅧ～Ⅸ期、SB486はⅦ～Ⅷ期、SB540はⅨ期としているが、２節の手法に従って、細別時期を跨ぐ場合はより新しい時期に帰属させることとする。Ⅴ～Ⅶ期全点組成（表566）と比較すると総じて壺の比率が低くなり、SB486、SB540においては10％を下回っている。一方で甕の比率が高くなっており、特にSB540においては60％に迫る値を示している。SB540は対象となる土器点数が247点と４つの竪穴住居の中では最多で母数として十分であり、北端でSB537との重複が一

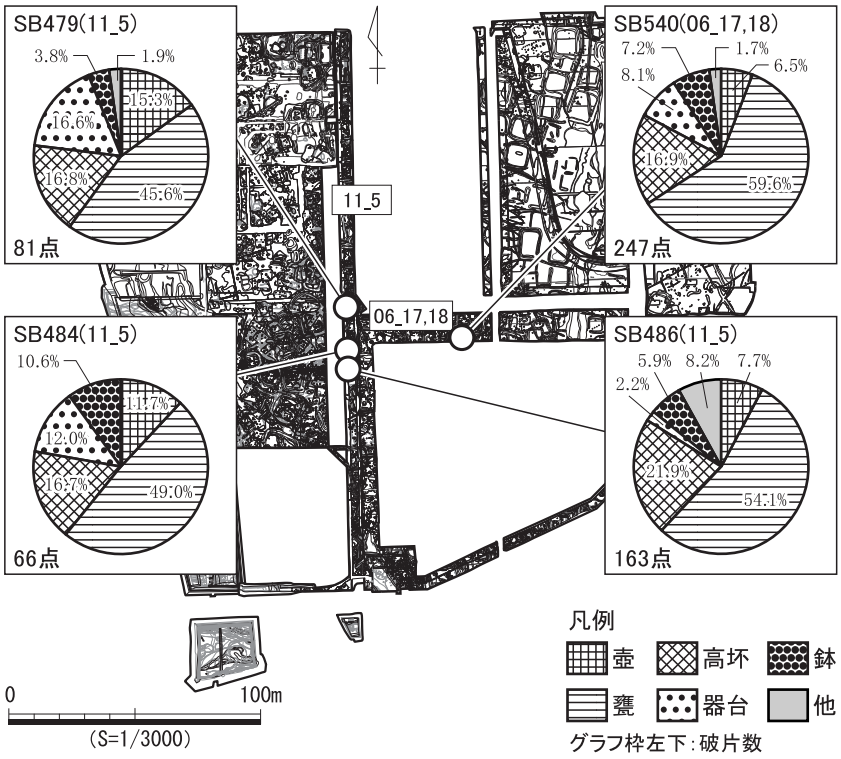


図 2578　Ⅷ期～Ⅸ期竪穴住居跡出土土器の組成比較

部に認められるものの他の竪穴住居との切り合いはほぼ認められない。南端が調査区域外におよぶため全形を確認してはいないが、東西長が６ｍ以上となる比較的大型の竪穴住居跡である。以上の点からSB540が示す組成の傾向は、一定の信頼性を有すると考える。また、SB486においても同様に甕の比率が50％を上回っており、SB540と共通する組成の傾向を示している。なお、少量ながら「他」としてカウントしたのは、手捏ね土器、手焙り形土器、縄文時代晩期の深鉢等である。

表570　Ⅷ～Ⅸ期竪穴住居跡出土土器の組成

	SB479		SB484		SB486		SB540	
	A	B	A	B	A	B	A	B
壺	24	15.3%	9.2	11.7%	14.3	7.7%	22.6	6.5%
甕	71.2	45.6%	38.5	49.0%	100.4	54.1%	207.7	59.6%
高坏	26.2	16.8%	13.1	16.7%	40.6	21.9%	58.9	16.9%
器台	26	16.6%	9.4	12.0%	4	2.2%	28.3	8.1%
鉢	6	3.8%	8.3	10.6%	11	5.9%	25	7.2%
他	3	1.9%	0	0%	15.2	8.2%	6	1.7%
合計	156.4	100%	78.5	100%	185.5	100%	348.5	100%

ここまで時期を区切って竪穴住居跡から出土した土器の組成を考察してきたが、最後にその組成の変化をまとめてみる。Ⅵ期、Ⅶ期、Ⅷ～Ⅸ期それぞれの時期の竪穴住居跡として抽出した遺構から出土した土器を総計してグラフ化し、その時期による組成の変化を示したのが図2579である。特筆すべき変化として、時期が進むにつれて壺の比率が明らかに低下（15.7％→12.7％→9.1％）し、甕については逆に比率が上昇（38.2％→46.1％→54.4％）しているという事実をあげることができる。さらに、壺と甕の主要２器種で占める比率が上昇（53.9％→58.8％→63.5％）していることも併せて指摘できる。高坏はⅧ期以降になると比率が低くなっていることも分かる。こうした組成変化の要因を考えるとき、それが当時の住人達の生活様式や食生活の変化に伴うものなのか、あるいは住人の中に新たな集団が加わっていくことによるものか、さらにこれが当遺跡特有の現象であるのか否かについてもここでは確定的に言及することはできない。また、土器は当時の生活用具の一種に過ぎず、その点においては土器だけでなく石器、金属器、木製品などの他の種類・組成の変化も含めたより広い視点から検討を加えることも必要であろう。しかし、土器の組成に先述のような明らかな変化が見られたことは、確かな事実として指摘することができる。

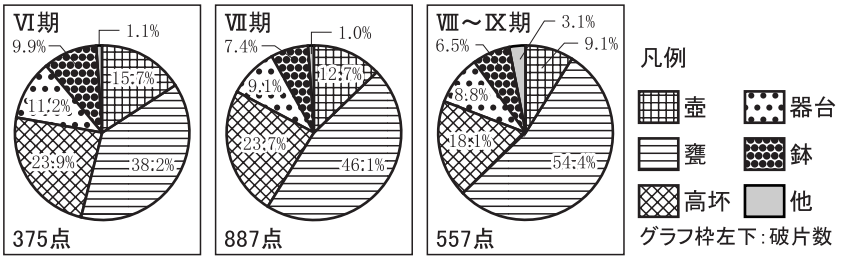


図 2579　竪穴住居跡出土土器の組成の変化（Ⅵ～Ⅸ期）

また、荒尾南遺跡における土器変遷の大きな特徴として、特に高坏において顕著に見られる加飾土器の出現が認められる。高坏Ｃ類、Ｄ類、Ｅ類においては、口縁端部や内面に多条沈線及び山形文、菱形文、連弧文等の文様を加えるものが認められ、Ｇ類、Ｈ類では外面に同様の文様を施文するものなどがあげられる。ここで抽出した竪穴住居跡出土土器のうち、器種を高坏に限って加飾が認められるものの比率を算出すると、Ⅵ期の段階では10％に満たなかったのがⅦになると40％を超える比率を示していることが分かる（表571）。Ⅵ期からⅦ期にかけての時期において加飾土器が増加する傾向を確かに読み取ることができる。

表571　高坏における加飾土器の比率

	Ⅵ期	Ⅶ期
高坏全点	110.2	237.6
加飾高坏	8	96.5
比率	7.3%	40.6%

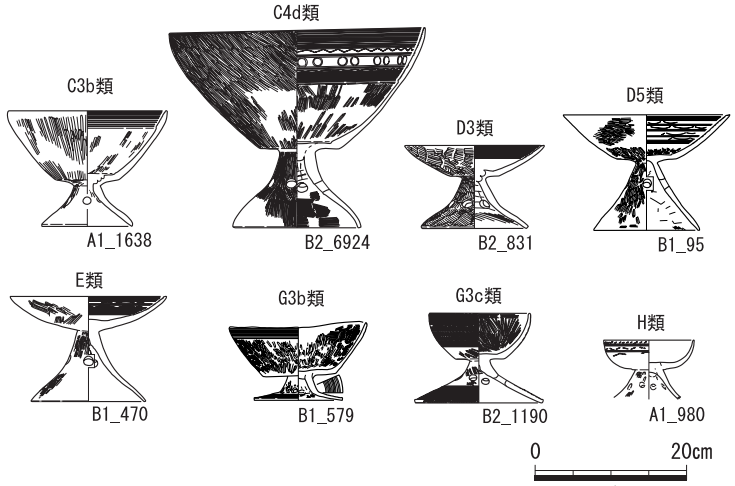


図 2580　加飾高坏の例

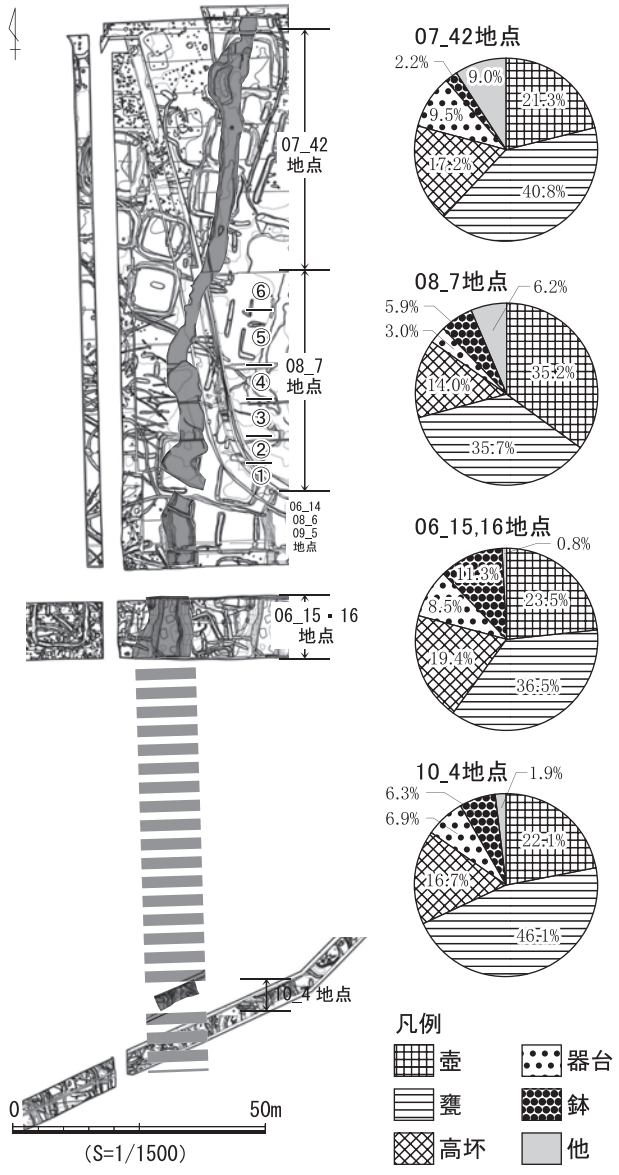


図 2581　SD0381 の出土土器の組成

４　大溝（SD0381）における土器組成

前節の文中で、SD0381 の消長について埋没時期や再掘削の時期など多角的に検討したが、ここでは土器組成の面からさらに検討を加えたい。図 2581 は報告書掲載土器に加えて、口縁計測、分類が可能な未掲載土器片も含めた地点別の土器組成を示したものである。平均してみると甕、壺、高坏の順で多くなっており、ここまでに述べてきた出土全点の平均値や竪穴住居跡から出土した土器の組成と大きく異なるものではない。しかし地点別に見ると、08_7 地点においては壺の比率が 35％を上回り、他の３つの地点に比して 10％以上も比率が高くなっている点が目を引く。前節でⅥ期のある段階に 08_7 地点④区画附近から南側を再掘削した可能性を指摘したが、08_7 地点の６区画の中では④区画の土器の出土点数が相対的に多く（約 35％）、さらに④区画出土土器の中では壺の比率が際立って高くなっている（約 51％）など、④区画の特殊性が垣間見える。再掘削が行われたことと壺の比率が高くなっていることの関連を具体的に説明することは難しいが、土坑状の窪みが認められる地形上の変化と併せて考えるに、SD0381 の中でもこの一帯が他とは様相を異にしているということは言えるであろう。

08_7 地点④区画より北部がおよそⅥ期前半までの時期に埋没し、それ以南を再掘削した可能性についてここで補足したい。第２節でその根拠として参照したのは報告書掲載土器であるが、本節では未掲載土器も含めたデータを用いているため、よりその母数は大きくなる。ただし未掲載土器片はⅤ期～Ⅶ期をまとめて分類しているため、時期を細分した

検討を加えることはできない。表573で注目したいのはⅧ期～Ｘ期の比率で、07_42地点よりも08_7地点は３倍に上昇している点である。Ⅵ期までに埋没したままの07_42地点よりも、南部を再掘削して再び深まりをもった08_7地点からより多くⅧ期～Ｘ期の土器片が出土するのは当然であり、しかもその時期の土器片はほぼ全てが南部①～④区画から出土し、⑤及び⑥区画からは１点が認められるのみである。

表572　SD0381出土土器の組成

	07_42地点		08_7地点		06_15,16地点		10_4地点	
	A	B	A	B	A	B	A	B
壺	36.2	21.3%	221.3	35.2%	1077.5	23.5%	318	22.1%
甕	69.4	40.8%	224.9	35.7%	1676	36.5%	664.5	46.1%
高坏	29.2	17.2%	87.8	14.0%	892.6	19.4%	240.5	16.7%
器台	16.2	9.5%	19	3.0%	391	8.5%	98.6	6.9%
鉢	3.7	2.2%	37.1	5.9%	517.1	11.3%	90.1	6.3%
他	15.3	9.0%	38.8	6.2%	36.1	0.8%	27	1.9%
合計	170.0	100%	628.9	100%	4590.3	100%	1438.7	100%

表573　SD0381時期別土器組成の比較

	07_42地点		08_7地点	
	A	B	A	B
Ⅰ期	0	0%	0	0%
Ⅱ～Ⅳ期	15	8.8%	5	0.8%
Ⅴ～Ⅶ期	138.2	81.3%	542	86.2%
Ⅷ～Ｘ期	5.3	3.1%	59	9.4%
他	11.5	6.8%	23	3.6%
合計	170	100%	629	100%

表574　SD0381出土の甕の比較

	07_42地点		08_7地点	
	A	B	A	B
Ａ類	34	49.0%	93	41.3%
Ｂ類	20.6	29.7%	65	28.9%
Ｄ類	0	0%	42	18.7%
他	14.8	21.3%	25	11.1%
合計	69.4	100%	225	100%

また、時期細分が可能な資料として高坏に着目する。主として高坏Ｃ類に多条沈線を主体とした加飾を施すものがⅥ期末から見られるようになり、Ⅶ期にその最盛期を迎えることから、高坏における加飾の有無からも埋没時期をおよそ探ることが可能である。07_42地点においては0/29.2(加飾高坏／高坏全点)となり、１点も認められないが、08_7地点においては4.9/87.8（5.6％）となる。わずか数点ではあるが、出土したのは①区画と③区画であり、再掘削を想定した区画からのみ出土していることになる。付け加えると、06_15・16地点では461.1/892.6（51.7％）と比率が高くなる。

さらに、表574では両地点から出土した甕を分類し、その比率を求めた。甕Ｄ類は、当遺跡においてはⅥ期のある段階から認められるようになるが、07_42地点においてＤ類は１点も出土が認められていない。一方で08_7地点では20％弱の出土が認められており、その出土した区画はやはり④区画以南に限定されている。もちろん、甕Ａ類やＢ類がⅥ期、Ⅶ期まで存続するということを考慮に入れなければならず、Ｄ類の有無だけに着目して事を論ずることの不十分さは指摘しなければならない。

以上のことから、SD0381がⅥ期のある段階において08_7地点④区画より南側を再掘削した可能性について、土器組成の観点からも一定の論証を加えることができるのではないかと考える。ただし、08_7地点より南側について再掘削が行われた範囲を検討するには資料不足であり、ここで言及することはできない。少なくとも10_4地点については、その土器の出土状況（第５章　表334）から勘案するに、再掘削の可能性は低いと考えられる。

第４節　土器の時期細分

１　一括性の高い資料の抽出

当遺跡から出土する膨大な量の土器の時期細分については、既刊の報告書においておよそ述べてきている。しかし、今回報告分についてはこれまで以上の量の土器が出土しており、検討してきた土器型式の変化や時期細分のさらなる論証となる資料及び新たに検討を要する資料などが認められる。したがって本節においては、従来の時期細分のとらえ方を補足・強化する一括性及び同時期性の高い資料群や、今回確認された新たな資料の提示によって、当遺跡における土器変遷に再検討を加えたい。時期区分については第３章第１節に示したとおりにⅠ期からⅩ期までを設定する。

縄文時代の土器については出土量が少なく、ここで新たな検討課題を提示するに至らない。弥生時代中期については一定の出土量が認められるが、Ⅱ期及びⅢ期の資料は限定的な出土にとどまり少量である。Ⅳ期の資料はその多くが方形周溝墓に伴う出土であり、従来の理解の変更を必要とする特異な出土状況や新たな資料の知見は確認できていない。また、Ⅹ期は当遺跡の終息期にあたる時期で、土器の出土量も極めて少ないため検討すべき資料が認められない。以上のことから、縄文時代、Ⅱ期からⅣ期、Ⅹ期について詳細を述べることは控え、Ⅰ期及びⅤ期からⅨ期について抽出して以下に述べる。

Ⅰ期

当遺跡出土土器のなかでも縄文土器に次いで出土量が少なく、土器棺や方形周溝墓の供献土器など単独で出土する事例は認められるが、組み合わせのある良好な資料に恵まれなかった。３点の土器が隣接して出土したSD01085を取り上げる。

SD1085（下層）　SD1085下層から出土した３点(B2_5545～5547)[1)]は溝底面の土坑状の窪地から出土し、一括性の高い資料としてみることが可能である。破片で出土することが多い資料の全形をうかがうことが可能な点も重要である。また、その共伴関係を認めることができれば、縄文時代晩期後半から続く変容壺(B2_5546)、縄文時代晩期後半の深鉢が変容したと考えられる甕(B2_5547)、弥生時代前期の条痕文系壺(B2_5545)の共伴事例となり、東海地方の縄文時代晩期終末～弥生時代前期前半の土器変遷を考える上で注目すべき資料といえる。以下に３点の資料を概観し、課題について検討する。

B2_5547は口縁部が弱く外反し、頸部は断面三角形の突帯が貼付される。肩部は弱く張り、その肩部径は口径とほぼ同じである。胴部外面と口縁部裏面に条痕が認められる。縄文時代晩期後半の深鉢が遠賀川系土器と接触して口縁部が外反した、いわば変容甕ともいうべき資料と考えられる。変容壺の突帯はその断面形が三角形で幅広であることから、変容壺と断面形が異なり変容壺との区別が可能である。条痕が横走し、縄文時代晩期後半のものが右下がりとなる点も先行する時期のものと異なる点である。当遺跡出土資料では類似資料としてSK01894出土

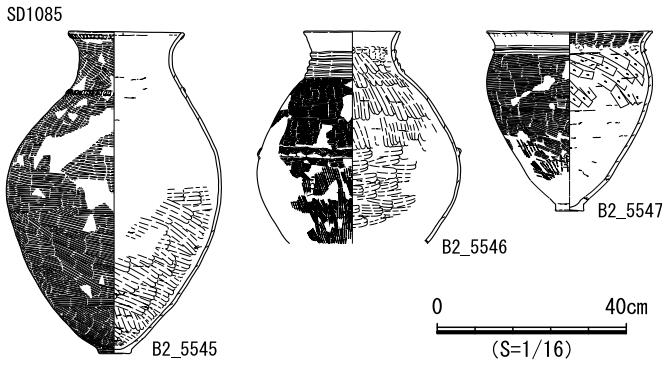


図 2582　SD1085 出土Ⅰ期の土器

78・SK04256出土99があげられる。東海地方では三重県納所青灰シルト層出土資料に類似する。

B2_5546は変容壺で口縁部がなだらかに外反して、頸部に４条の断面形が半円形を呈する突帯が貼付される。突帯以下には条痕が横走し、胴部には押し引きのある突帯が貼付される。胴部の突帯は断面高が高く、押し引きの底面との比高差が顕著である。

B2_5545は条痕文系の壺で、口縁端部と頸部に断面高の低い押圧のある突帯が貼付される。突帯を除く外面には横走する条痕が認められ、三河地域からの搬入品と考えられる。

前述したように、３点を共伴事例とした場合、これまでの先行研究からみた課題について検討する。最大の課題はB2_5546の時期認定である。胴部突帯の形状からすると、馬見塚式の段階の範疇にあり、仮に胴部突帯が破片で出土すれば、そのなかでも後半とするには難しい資料である。そのため、弥生時代前期前半と考えられるB2_5545との共伴はありえないと考えるのが妥当である。B2_5547はこれまで、口縁部の破片のみが出土する事例が知られているのみの断片的な資料である。馬見塚式段階～弥生時代前期前半のどこかに共伴する資料と考えられていたものである。今回の資料によって、B2_5545とともに弥生時代前期前半に伴う可能性が高いと考えるのが妥当で、先行型式が存在する可能性があるものの、定点的な資料として今後扱うことができる。B2_5545、B2_5547を馬見塚式段階に遡らせて位置づけることは困難であるため、B2_5546をどのように扱うか再度、以下の観点から検討する。

①胴部の突帯形状及び押し引きは馬見塚式段階の変容壺に類似する。

②口縁端部直下の突帯がなく、頸部に４条の突帯がみられる。

②は突帯が多条化するに従い変容壺でも新しい段階と考えられている。４条は知られている資料のなかでは最も数の多い部類であるため、変容壺でもB2_5546は最も新しい段階と考えることは可能である。そのため、同一の個体中に新旧の要素が混在することをどのように解釈するか、さらには変容壺が弥生時代前期に共伴する確実な事例がないなか、弥生時代前期と位置付けてよいのかという点が課題である。前者については、これまで破片資料が多いなかで検討してきたため、全形が残る資料の場合は部位によって想定されている変遷過程を辿らない場合があるのではないかと考えられる。後者についての手かがりは口縁端部直下に突帯がないことにあると考えられる。口縁端部直下の突帯の消失は頸部突帯の多条化とともに、変容壺の新しい要素であり、そのなかでも最末期あるいは新たに得られた要素の可能性がある。頸部の突帯は遠賀川系土器の壺にも通有にみられる要素であり、この要素からの影響を受けたものと考えるとB2_5546を弥生時代前期前半に位置付けることも可能である。また、B2_5546、B2_5547の両者は縄文時代晩期後半に系譜をもち変容した土器であるが、突帯形状が異なり壺・甕の区別が可能である。そうした様相も弥生時代前期とみることができる。B2_5546の時期決定には課題は残るものの、今回は弥生時代前期前半の可能性が高いと考えた。B2_5546、B2_5547のような資料が今後、他の遺跡で確認できると今回の資料の検証ができよう。しかし、変容した壺と甕が揃い、SK04526出土98の烏丸崎型変容壺出土をみると当遺跡でさまざまに変容した様相を示している可能性を示唆しているといえる。変容のあり方は個々の遺跡差が存在する可能性があり、その結果として、B2_5546のような変容壺がみられることになったかもしれない。その意味では、同一の土器が他の遺跡で出土することは容易ではないかもしれないが、今後も検討すべき資料である。

Ｖ期

Ｖ期の資料はこれまでの報告のなかで、Ｖ－３期に相当するＡ地区SK00572（下層）以外に良好な資料が認められなかった。今回の報告資料のなかにＶ－１期、Ｖ－２期にそれぞれ基準となる資料が得られたので検討する。

SB537　本住居跡はＶ期～Ⅶ期と本文中で報告した住居跡である。その出土資料はＶ期、Ⅵ期、Ⅶ期がそれぞれ混在する。なかでもＶ期前半の資料にまとまりがあり、注目できる。Ｖ期前半と考えられるのが壺B2_6333、B2_6335、B2_6336、B2_6340、甕B2_6347、B2_6348、B2_6351、B2_6353、B2_6354、B2_6355、B2_6356、高坏B2_6374～6376があげられる。いずれもＶ－１～Ｖ－２期に相当し、B2_6348、B2_6351、B2_6355、B2_6356の受口状口縁の甕は口縁部の屈曲が顕著なものの、文様帯が胴部上半に限られることからＶ－２期に位置づけられる。その一方で、B2_6347、B2_6353、B2_6354の甕はくの字状に口縁部が屈折し、Ⅳ期の系譜がみられる。B2_6347は口縁端部の上下端を拡張して、凹線に近い擬凹線を施文する。B2_6347、B2_6354の頸部直下には刺突文がみられる。Ⅳ期甕の頸部突帯上に施文される刺突文の形骸化と考えられる。B2_6353はⅣ期のタタキ甕の形状と酷似しながらも、タタキ痕は認められない。器壁は厚く、内面は頸部までケズリが認められるため、Ⅳ期甕の形状を残したＶ期の甕と考えられる。底部には穿孔があり、Ⅳ期甕と時期的に近いことを示している。B2_6347、B2_6353、B2_6354はいずれもⅣ期甕が形骸化した特徴がみられることから、Ｖ期でもⅣ期に近い時期を与えることが可能であり、先に指摘したB2_6348、B2_6351、B2_6355、B2_6356の甕より先行することは明らかである。そのため、Ｖ－１期と位置づけられるが、そのなかでもⅣ期により近い

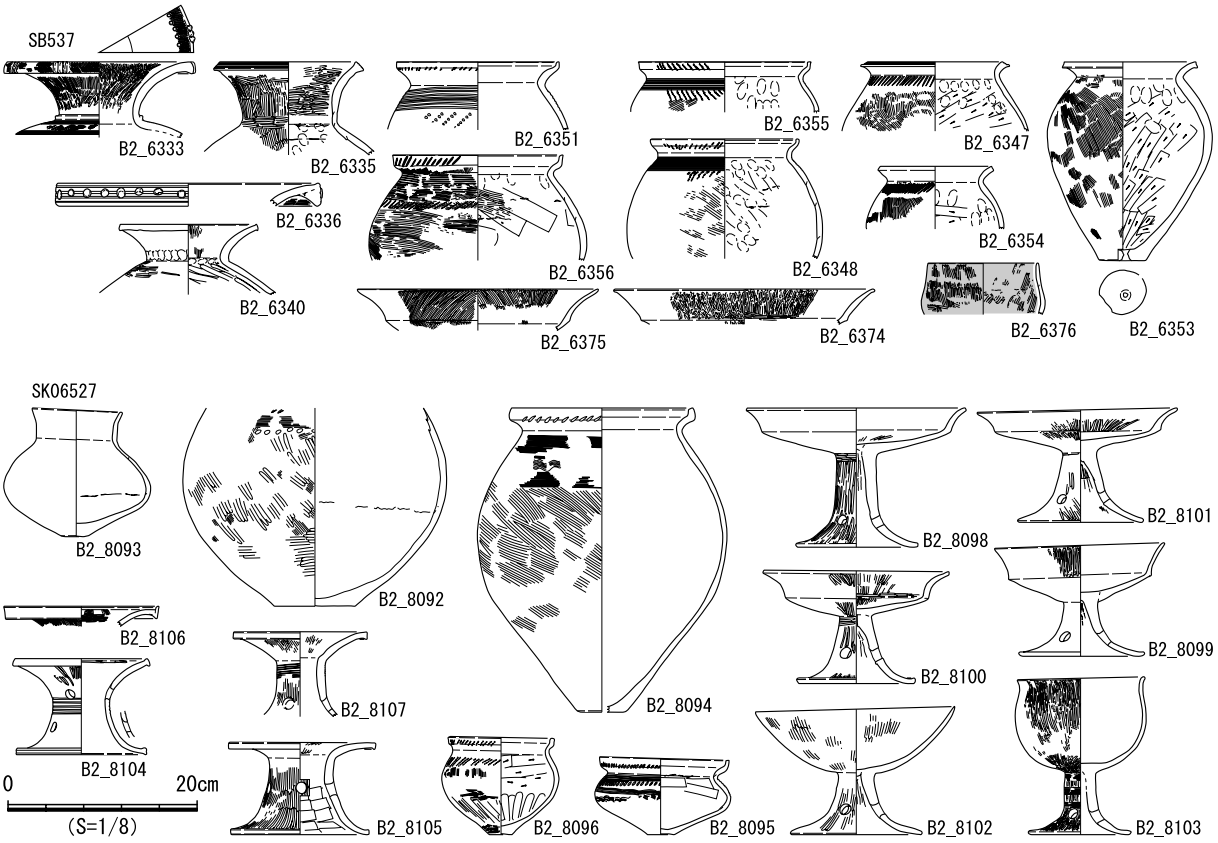


図 2583　SB537 他出土Ｖ期の土器

時期と考えられる。このようにＶ－１期でも前半にあたる甕が確認できたので、他の器種にも同様の時期にあたるものがないのか検討することが必要となる。高坏ではＶ－２期相当しか確認できなかったが、壺にはＶ－１期前半にあたるものが確認できた。B2_6333は口縁部が大きく外反し、端部をわずかに下方に拡張して、羽状文を加える。内面にも刺突文がみられる。文様はＶ期には端部に羽状文を施文する例はあまり認められないので、口縁部の形状とともにⅣ期の系譜に連なるものであろう。B2_6335は口縁端部を上下に拡張し施文するもので、甕B2_6347と共通する手法が認められる。B2_6336は生駒西麓産の広口壺でＶ期でも前半の資料と考えられる[2)]。以上のように、壺においても甕と同様、Ⅳ期の系譜を残す資料がＶ－１期前半に位置づけられる可能性が高いと考えられる。また、B2_6336と同一型式の生駒西麓産の壺はこれまで当遺跡では断片的ながら出土例が確認できる。本住居跡出土例は確実な共伴例とはできないが、この時期に組み合う可能性が高いと考え提示しておきたい。

SK06527　Ｖ期の一括資料が得られたので、あらためて検討する。壺B2_8092が口頸部を欠損する以外、甕、鉢、高坏、器台の主要器種の全形が判明する良好な資料である。甕B2_8094は口縁部の立ち上がりが短くなり、受口状口縁甕としてはやや退化傾向にある。文様は胴部上半にあたり、肩部まで及ばない。鉢には胴部が浅いもの（B2_8095）と深いもの(B2_8096)の２系統が認められる。口縁部の屈曲は著しい。高坏には口縁部が強く外反する高坏(B2_8098～8101)、碗状高坏（B2_8102)、ワイングラス形高坏（B2_8103）が認められる。外反高坏の脚裾部は強く外反し、類似した特徴がみられる。口縁部は短く外反するもの（B2_8098、B2_8100、B2_8101）と弱く外反するもの（B2_8099）の２系統がみられる。B2_8098、B2_8100、B2_8101は口縁部が短く外反するものの、坏部底部からの立ち上がりはわずかに直立する。また、脚部付根には数条からなるヨコミガキが認められ、直線文の形骸化ともみることが可能である。器台（B2_8104、B2_8105、B2_8107）は鼓形を呈し、文様の有無やその位置によって透孔の位置が多様である。SK06527出土資料は甕や高坏の特徴からＶ－２期に相当し、高坏に文様がないことや文様の形骸化とも考えられる要素が認められることから、Ｖ－２期でも後半期にあたる可能性が高い。課題は鉢のB2_8095とB2_8096の形状差である。胴部形状の差異が大きく、同一時期とみるにはやや難がある。胎土をみるとB2_8095は在地と考えられ、B2_8096は在地の赤みを帯びた焼き上がりではなく、黄灰色を帯び堅緻な焼き上がりで在地のものとは異なる。このため、B2_8096は隣接地である湖北及び湖東よりの搬入品の可能性が高く、B2_8095とB2_8096の形状差にあらわれていると考えることも可能である。また、B2_8095は形状からみるとＶ－２～Ｖ－３期にみられるもので、胴部が扁平であることから、むしろＶ－３期に近いといえる。しかし、胴部文様は肩部まで及ぶことからＶ－３期以前と考えられ、先に指摘したとおり、Ｖ－２期でも後半期に近い特徴を示していると考えることが可能であろう。

Ⅵ期

Ⅵ期はＶ期に始まる当遺跡の発展期にあたり、主に西部域において竪穴住居跡が増加し始める時期である。SB121、SD0649などの遺構からはⅥ－１期に当たる土器が一部出土していることが確認できるものの、一括資料としては不十分と言わざるを得ない。今回は溝資料であるが、主にⅥ－１期にまとまりがみられるSD0433から出土した資料について検討する。また、当遺跡において断片的には出土が認められるものの時期認定が難しかった多孔土器B2_7833について、土坑一括資料といえる資料群

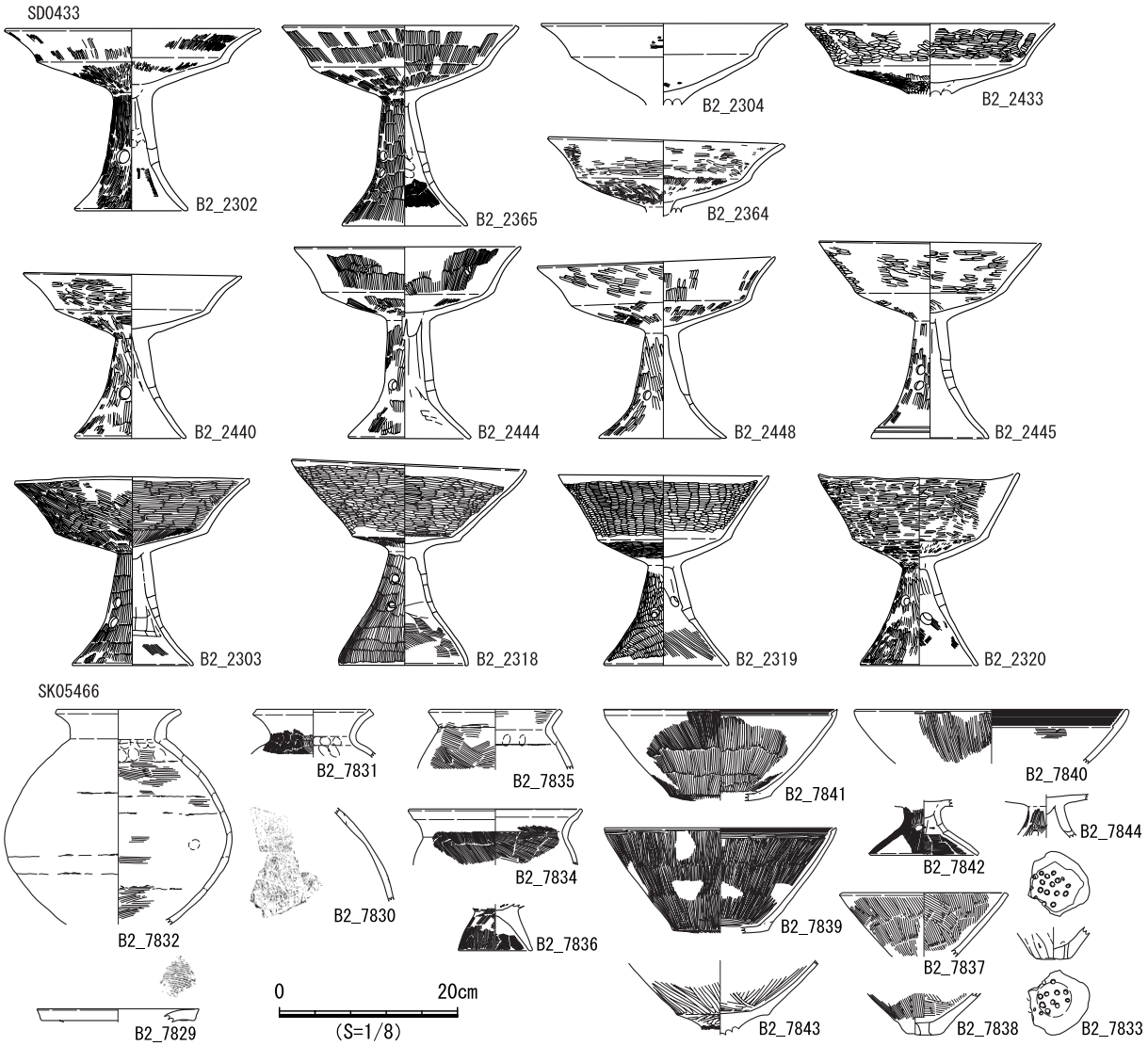


図 2584　SD0433 他出土Ⅵ期の土器

の中で認められたためここで改めて検討する。

SD0433　西側についてはＢ地区報告書Ⅰにおいて既に報告済みの遺構であるが、本書ではSD0433全体から出土した資料について検討する。09_4地点西側で１層と２層の層界付近から多量の土器が出土し、完形品も含めて遺存状態の良いⅥ―１期の資料が大半を占める。壺、甕、高坏、器台、鉢、手焙り形土器、手捏ね土器等が認められ、主要な器種がすべてそろっているが、ここでは一部の高坏の特殊性について着目したい。本遺構の出土遺物として高坏を多数掲載しているが、Ｂ類及びＣ類の一部に外面のミガキ調整がヨコ方向に施されるものが認められる点を指摘したい。なかでも遺存状態が良く、ヨコミガキが顕著に認められる資料が土器集中区８で出土したB2_2318～2320（いずれもC1a類）の３点である。脚部形状や透孔の配置、坏底部径や口縁部形状はB2_2319とB2_2320は瓜二つで、B2_2318は形状に若干の違いは見られるもののミガキ調整の手法においては共通する。他にもB2_2364（B3a類）、B2_2433、B2_2440、B2_2445、B2_2448（B3b類）、B2_2303、B2_2304（B4類）など、坏部及び口縁部外面にヨコミガキ調整が加えられる資料が認められ、報告済みの西側土器集中区１においてもB1_238（B3a類）が１点認められる。しかし、B2_2302やB2_2365、B2_2444のような外面調

整があくまで一般的で、こうした調整を施す高坏の出土例は、他にはSK01894出土B1_1361（C1類）、SD0631出土B1_2248（B4類）などごく少例で、ある一定の遺構からしか出土しないため、製作者の違いを示す可能性があると考えここで紹介した。

SK05466　壺、甕、高坏、鉢が認められる。埋土２層中から集中して大きな土器片がまとまって出土した状況や、広口壺や有段高坏の口縁部形状などからも同一時期とみてよい資料群である。壺Ｂ類２点（B2_7831、B2_7832）や高坏C3b類３点（B2_7839～7841）の口縁部形状にはⅥ期の特徴が共に認められ、この時期の共伴関係としては良好である。底部穿孔が認められる鉢（B2_7837、B2_7838）についても端部が平坦となるⅥ期の特徴が認められ、甕（B2_7834、B2_7835）も時期的に齟齬は認められない。B2_7833は底部に複数の孔があけられた鉢の一部と考えられるが、平面的にみても層位的にみても前述のⅥ期の土器とともに出土していると言ってよい。当遺跡において類似する資料としては、SD0493出土B1_2050（Ⅴ期～Ⅶ期）及びＣ地区SDc202出土C_2704、C_2705（Ⅳ期）が確認されているのみである。いずれも限定的な出土であるため関連性についての詳述は困難だが、B2_7833が弥生時代中期の多孔土器に連なる資料としての可能性は認められよう。しかし、ここで時期的に明確なまとまりが認められるⅥ期資料群に伴ってB2_7833が出土したことは、今後の多孔土器の時期認定に資する一つの材料であろう。

Ⅶ期

Ⅶ期土器には当遺跡のなかで加飾の著しい時期の土器で、「荒尾南類型」（藤田2013)とされる土器群の最盛期にあたる。土器の出土量は先に指摘されているとおり、Ⅴ期～Ⅶ期がもっとも多い。さらに各小期に区分した土器の出土量を定量的に分析することは難しいが、竪穴住居跡の件数が最大となり、集落の最盛期がⅦ期である[3)]ことから、Ⅶ期の土器出土量がもっとも多いと考えることが可能である。そのため、溝や流路から単品としては完形に近い資料は出土するものの、竪穴住居跡や土

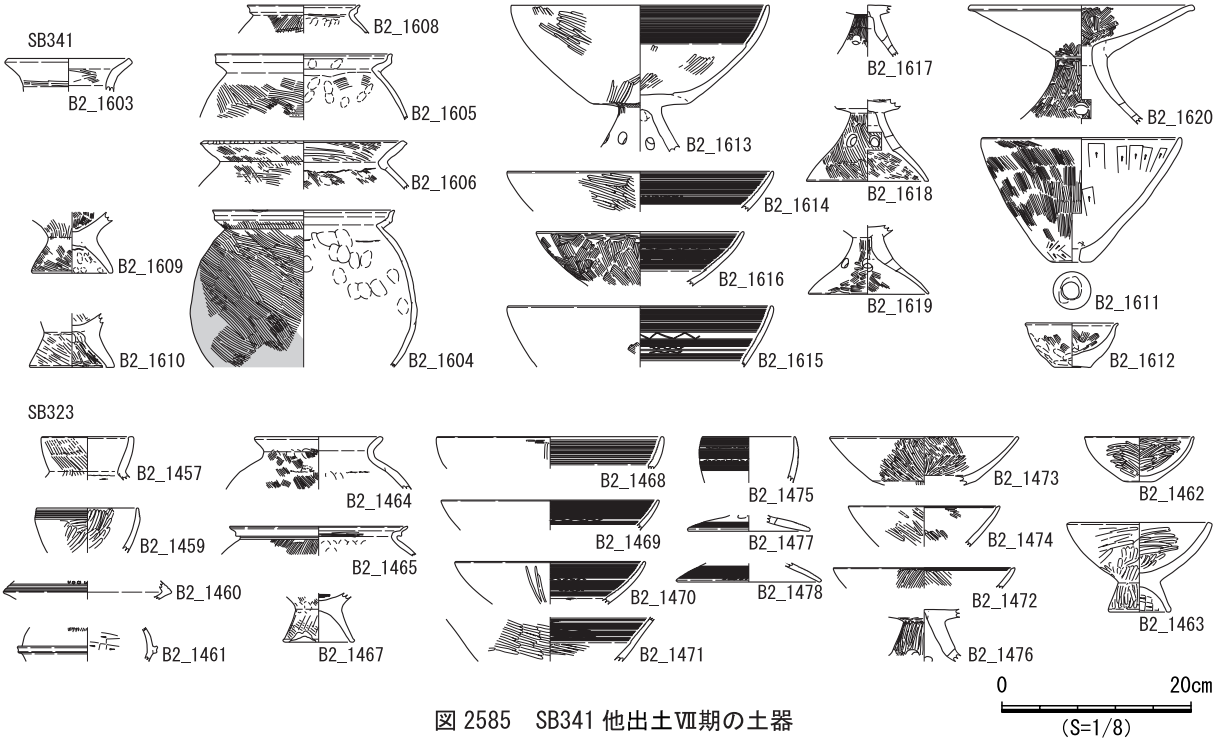


図 2585　SB341 他出土Ⅶ期の土器

坑など限られた空間からまとまって出土する事例はこれまでの報告を含めて、あまり認められない。短時間のうちに遺構掘削が繰り返された結果によるものと推測されるが、そのなかでも、今回の報告で少しでもまとまりある資料としてSB341、SB323を取り上げて検討する。

SB341　壺、甕、鉢、高坏、器台が認められる。破片資料が多いが、甕の口縁部形状、高坏の坏部・脚部形状が類似することから同一時期とみられる資料である。壺は無文の広口壺B2_1603が出土するのみで、他の壺は残念ながら認められなかった。甕は受口状口縁甕B2_1604、B2_1605、くの字状口縁甕B2_1606、Ｓ字甕Ｂ類B2_1608が認められる。他にＳ字甕Ｃ類が出土しているが混入と考えられる。ここで注意をひくのがB2_1604、B2_1605である。Ⅵ期以降にも強く口縁部が屈曲して端部が平坦な受口状口縁甕が残ることである。その一方で、胴部文様は認められないので、失っていると考えられる。B2_1606は口縁端部に強い断続的なナデがみられるくの字状口縁甕で、Ⅶ期の主要な甕である。B2_1611は底部に穿孔のある鉢で、口縁部が直線的で端部が丸い。Ⅵ期でみられた端部が平坦で、口縁部が内湾する傾向は認められない。高坏はⅥ期の高坏と類似して坏底部がやや広い（B2_1613）が、脚部が低く裾部が強く外反し、Ⅶ期の特徴をよく示している。内面文様は多条沈線単独（B2_1613）と多段化（B2_1614～1616）しているものの２種が認められる。器台B2_1620も高坏同様、脚部は強く外反する。本住居跡出土資料は総じて、高坏や器台の形状からⅦ期前半と考えられる。また、高坏内面の文様が多条沈線主体で多段化した文様についても、多条沈線帯が幅広であることからⅦ期前半と考えられる要素である。その他、甕、鉢にはⅥ期に近い要素が認められることから、本住居跡出土資料はⅦ－１期とみることができる。

SB323　壺、甕、高坏などがみられる。断片的な資料であり、ややまとまりを欠く可能性があるが、Ⅶ－２期の基準となる資料として取り上げる。ここで検討を加えるのは高坏を中心に加飾のある資料である。高坏内面に加飾のある資料はB2_1468～1471の４点で、そのうち多条沈線単独はB2_1468のみである。他の３点は多段化した文様を有するもので、口縁部の開きが強まり、多条沈線の幅がやや狭い。B2_1471はⅦ－３期で盛行する連弧文が認められる。口縁端部のみに多条沈線を施文する（B2_1472、B2_1474）手法もⅦ－３期でよくみられるものである。高坏B2_1475、壺B2_1459にも口縁部外面に加飾が認められる。高坏の形状、文様の特徴からⅦ－１期からⅦ－３期への過渡的な様相が認められることから、Ⅶ－２期の可能性が高いと考えられる。低脚高坏B2_1477、B2_1478にも加飾が認められ、加飾の最盛期ともいえる時期と考えられる。甕にはくの字状口縁甕B2_1464、Ｓ字甕Ｂ類B2_1465が認められたが断片的な資料である。壺、甕とも良好な組み合わせが不明瞭なのが課題である。

Ⅷ期

これまでの報告のなかであまり良好な資料が確認できなかった時期である。今回の報告資料中に断片的ながらも、まとまりのある資料が確認できたので取り上げて検討する。Ｓ字甕Ｃ類が伴う時期で、在地の甕が少なくなり、それまで少量であったＳ字甕が安定的に認められる。

SB483　土坑出土資料（B2_6046、B2_6047、B2_6052～6056、B2_6059、B2_6061、B2_6066）が共伴して出土した。B2_6055及びB2_6057はともにＳ字甕Ｂ類で、B2_6055は口縁部が屈曲し上段が平坦である。B2_6057は口縁部上段が外反して肩部が強く張る。B2_6055に比してB2_6057は口縁部形状や肩部形状からＳ字甕Ｃ類に近い。またB2_6061はＳ字甕Ｃ類である。これに対して、住居出土資料に

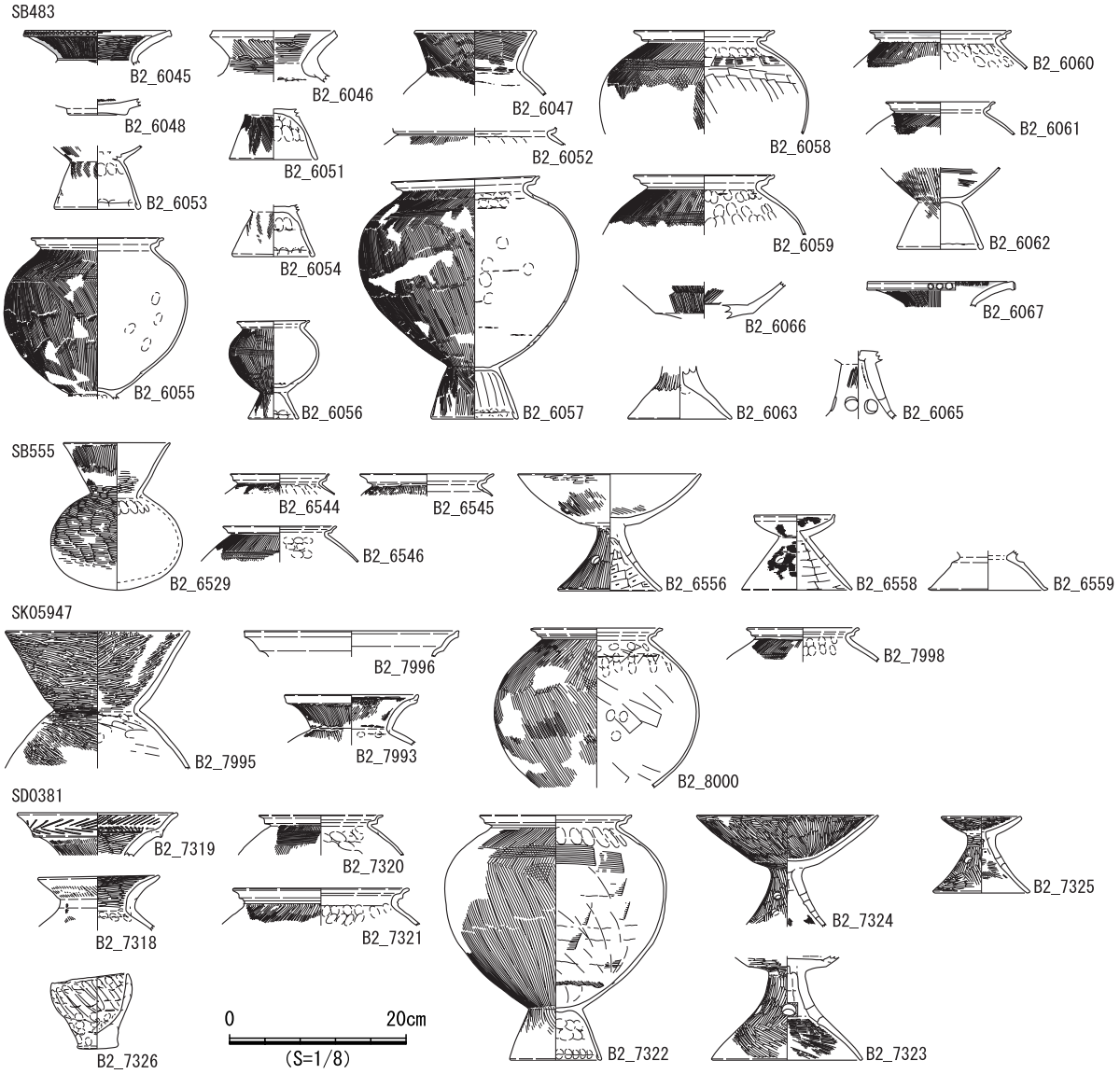


図 2586　SB483 他出土Ⅷ期の土器

はＳ字甕Ｃ類の出土が顕著である(B2_6058～B2_6060)。B2_6058はB2_6057と口縁部形状が類似する。本住居跡出土資料はやや時期差のあるＳ字甕Ｂ類の共伴とともに、さらにＳ字甕Ｃ類が伴う点に課題がある。土坑については、本文中で竪穴住居跡とは別遺構の可能性が示唆されている。時期差のあるＳ字甕共伴の有無については検討の余地が残るが、B2_6057とB2_6058にはそれほど大きな時期差はないため、今回はＳ字甕Ｂ類がＣ類と共伴する可能性があるとしてⅧ期として考え報告する[4)]。

SB555　Ⅴ期、Ⅵ期、Ⅷ期の資料が混在する。なかでもＳ字甕Ｃ類B2_6544～6546が断片的ながらも安定的に認められる。Ｓ字甕Ｃ類に伴う可能性が高い資料として高坏B2_6556、器台B2_6558、B2_6559があげられる。B2_6556は口縁部が大きく開き、底部が矮小化する。坏底部内面には段が認められず、Ⅷ期の高坏の特徴をよく示している。脚部も同様で付根が細く短く外反する。B2_6558の口縁端部はわずかに直立して、丁寧なミガキが認められる。B2_6559は山陰系の鼓形器台で搬入品の可能性が高い。いずれの器台もⅧ期～Ⅸ期に伴うが,出土した甕からみてＳ字甕Ｃ類に伴う可能性が高いと考えられる。

SK05947　一部に先行時期の資料が認められ、およそⅧ期～Ⅸ期のまとまりある資料が認められる。Ｓ字甕Ｃ類（B2_7998）とＤ類（B2_8000）が認められるため、Ⅷ期とⅨ期が混在しているものと考え、分離して資料を提示した。Ｓ字甕Ｃ類（B2_7998）に広口壺（B2_7993）、長頸壺（B2_7995）が伴う。B2_7993は口縁端部がわずかに直立する。B2_7995は大型品で、内外面に丁寧なミガキが認められる。

SD0381（９層）　溝出土資料ではあるが、Ⅷ期の資料が安定的に出土する。B2_7319は柳ヶ坪型壺で口縁部が明瞭な有段状となる。甕はＳ字甕Ｃ類（B2_7320～7322）で、B2_7320、B2_7322は口縁部の屈曲がやや強い。高坏7324は口縁部が直線的に大きく開く。B2_7325の器台は受部が皿状で、脚部が外反する。

Ⅸ期

Ⅷ期同様、これまであまり良好な資料が認められなかった時期である。今回の報告により、断片的ながらもまとまりある資料が得られたので、ここで検討する。Ｓ字甕Ｄ類と柱状脚の高坏が伴う時期である。

SK05828　柱状脚の高坏（B2_7968～7971）が認められ、布留系甕（B2_7967）、小型丸底壺（B2_7966）が伴う。B2_7967は胴部がケズリによって薄く作られている。口縁部はわずかに内湾し端部を肥厚する。搬入品の可能性が高い。B2_7966は厚手でやや作りが粗い。

SB369　Ｓ字甕Ｄ類（B2_1772、B2_1773）と二重口縁壺（B2_1770、B2_1771）が認められる。B2_1771は頸部が外傾しながら立ち上がる伊勢型二重口縁壺であり、搬入品と考えられる。B2_1770も類似する資料だが、上段の立ち上がりが短く二重口縁が形骸化する壺である。

SD0381（２層）　一部に先行する資料が認められるが、安定的にＳ字甕Ｄ類（B2_7247、B2_7251～7253）が認められ、一方でＳ字甕Ｃ類（B2_7246、B2_7248～7250）も認められるため、Ｓ字甕Ｃ類とＤ類が共伴する段階の可能性がある。Ｓ字甕Ｄ類は屈曲の強いものが多く、屈曲の弱い資料は認められない。他には壺（B2_7243）、二重口縁壺（B2_7244）、小型丸底壺（B2_7245）、布留系甕（B2_7254）、Ⅷ期から継続する高坏（B2_7255）、柱状脚の高坏（B2_7256、B2_7257）、器台（B2_7258、B2_7259）がみられる。B2_7254は薄手で搬入品の可能性がある。高坏B2_7256、B2_7257はやや長脚で裾部が強く外反する。B2_7258は受部が皿状を呈し、裾部が強く外反し、高坏と類似する。B2_7259は口縁部が直立し脚部が直線的に開く。Ｓ字甕Ｄ類や高坏の特徴からⅨ期前半と考えられる。

SK05947　先行する時期の資料がわずかに認められることや、Ⅷ期～Ⅸ期の過渡的な段階を示す資料の可能性については既にふれたとおりである。B2_8000はＳ字甕Ｄ類で、口縁部がやや屈曲して薄手につくられている。Ｓ字甕Ｄ類では前半に位置する。B2_7999は布留系甕で内面には丁寧なケズリが認められる。口縁部はわずかに内湾するが、やや厚手である。高坏にはⅧ期から継続する高坏（B2_8002）と柱状脚の高坏（B2_8003）が認められる。

SB333　先行する時期の資料が混在するが、Ｓ字甕Ｄ類（B2_1533～1538）が多く認められ、Ⅸ期の資料が安定的に認められる。Ｓ字甕Ｄ類は口縁部が短く屈曲するもの（B2_1536、B2_1537）と屈曲が弱いもの（B2_1535）が認められるため、ある程度の時間幅をもつ可能性がある。Ｓ字甕Ｄ類の他に壺（B2_1528）、小型丸底壺（B2_1530～1532）、柱状脚の高坏（B2_1546、B2_1548～1550、B2_1555）が伴うと考えられる。B2_1528は口縁端部を肥厚したもので、頸部の立ち上がりは二重口縁壺に類似する。小型丸底壺は丁寧なミガキのある精製のもの（B2_1526、B2_1529）と粗製のもの（B2_1530～

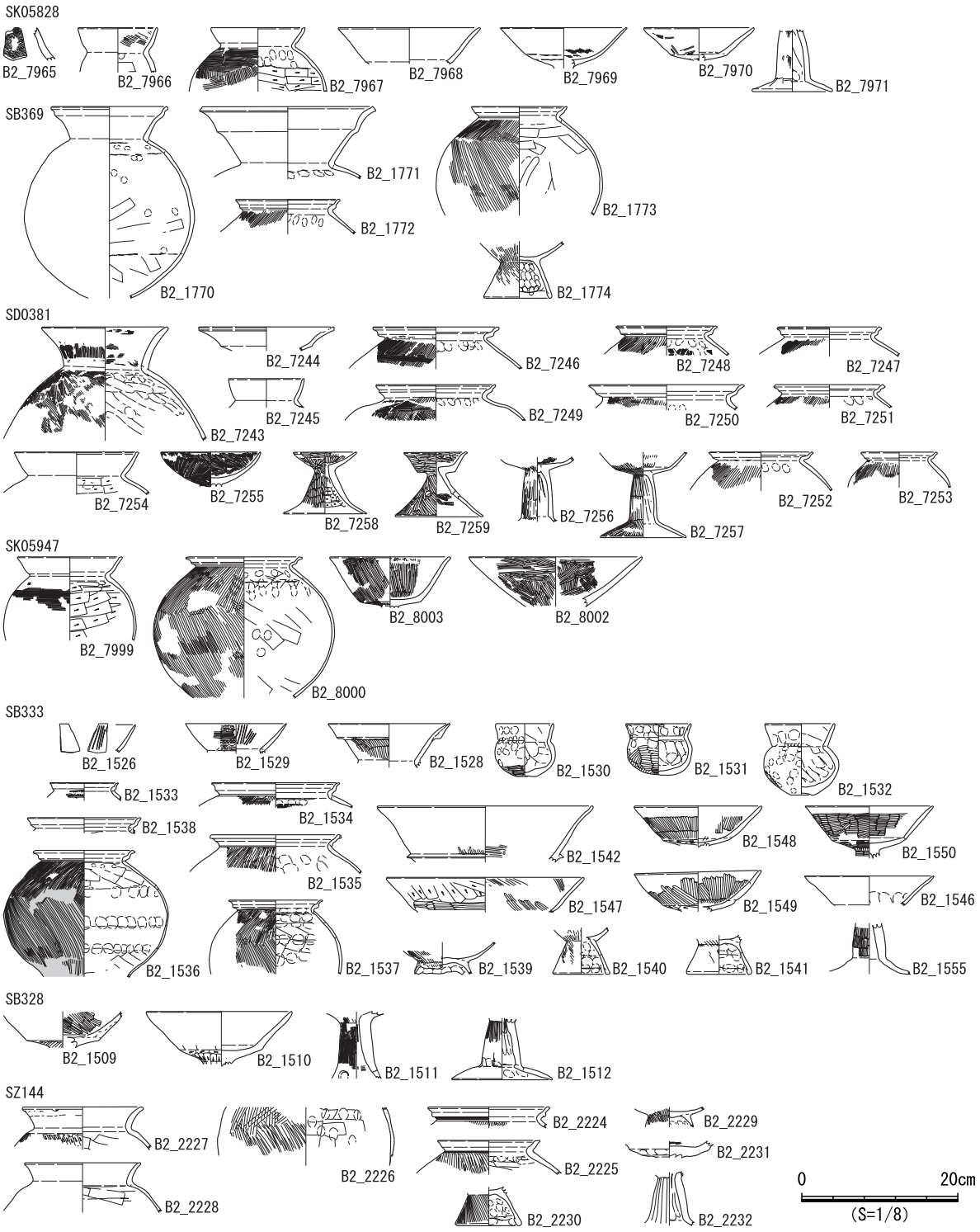


図 2587　SK05828 他出土Ⅸ期の土器

1532）の２種が認められる。高坏は丁寧なミガキがあり、B2_1542は大型品である。

SB328　柱状脚の高坏がみられる。脚部がやや低い資料（B2_1512）が認められる。

SZ144　SB328と同様、脚部のやや低い柱状脚の高坏が認められる（B2_2232）。Ｓ字甕Ｄ類（B2_2224、B2_2225）は厚手で口縁部の屈曲が形骸化している。他にくの字甕（B2_2227、B2_2228）が伴う。口縁部が弱く外反し、頸部で直下の胴部で弱く屈曲するのが特徴的である。

２　荒尾南遺跡出土土器の時期設定

本遺跡では既刊報告書において、出土土器を縄文土器、弥生土器～古墳時代の土器をⅠ期～Ⅹ期に時期を区分した。『荒尾南遺跡Ａ地区Ⅰ』では、Ⅴ期～Ⅶ期について小区分を示した。これまでの報告のなかで、Ⅰ期～Ⅹ期の時期区分については大きな変更は必要ないと考えられるが、『荒尾南遺跡Ａ地区Ⅰ』（以後、Ａ地区Ⅰ報告とする。『荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅱ』などＡ地区Ⅰ報告以降に刊行された報告書についても同様である。）ではⅤ期～Ⅶ期の様相しか提示していないことや本報告が最終であることを踏まえ、縄文土器も含めⅠ期～Ⅹ期の土器様相やその小区分について検討し概観する。

縄文土器

縄文時代晩期後半にあたる時期が主体を占める。縄文時代早期にあたるNR002出土の縄文土器を確認しているが、出土土器のうち１点のみの出土で摩耗も著しいことから、自然流路によって上流から運ばれてきたものであろう。このため、縄文土器のうち一定量の出土をみるのが、縄文時代晩期中葉、稲荷山式段階からである。この時期から当遺跡での人々の活動が開始された可能性が高い。しかし、その出土量はきわめて少なく、本格的な当遺跡における人々の活動は次の時期以降のことと考えられる。稲荷山式段階以降、西之山式段階、五貫森式段階、馬見塚式段階と継続して土器の出土が次第に増加し、このうちでは馬見塚式段階の土器の出土量が最も多い。また、これらの時期の土器は当遺跡の西側、すなわち自然流路やその近辺に展開する土坑からの出土が顕著である。SK01894からは稲荷山式段階～馬見塚式段階の土器が一定量出土しているので、SK01894出土土器を中心に稲荷山式段階～馬見塚式段階４段階に区分して概観する。

稲荷山式段階　口縁部が緩やかに外反し、端部をわずかに肥厚する深鉢（B2_709）が認められる。こうした資料は自然流路出土資料を中心に少量確認することができる。

西之山式段階　SK04005出土のB2_88、B2_89が好例である。B2_88は口縁部が弱く外反し、端部には押し引きが認められる素文の深鉢である。B2_89は口縁部が内湾しながら立ち上がる砲弾形の深鉢である。その他に、素文突帯のある深鉢B2_712、B2_3620や浅鉢B2_3650、B2_715が認められ、深鉢以外の器種も認められる。B2_715は口縁端部に方形の突起がつく精製品で波状を呈する可能性がある。

五貫森式段階　SK01894を中心に多くの資料がみられるようになる。口縁端部より下がった位置に突帯を貼付する深鉢(B2_68、B2_1340)と口縁端部直下に突帯が貼付する深鉢（B2_111、B2_187、B2_190)、口縁端部よりわずかに下がった位置に突帯を貼付する深鉢（B2_62、B2_707）など突帯貼付位置は多様である。B2_707、B2_1340は断面が幅狭で突帯上をヘラで刻む。B2_68は口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼付し、貝による押し引きが認められる。以上のように突帯の貼付位置や形状、突帯上に加える施文工具が多様なため、濃尾平野に分布する五貫森式と同列に扱うことは難しく、時期差や型式差を内包している可能性が高いと考えられる。突帯が貼付される深鉢のほかには砲弾形を呈する深鉢（B2_69、B2_708)、口縁部が外傾する深鉢（B2_67）が認められる。B2_708は単斜状の条痕が認められ、口縁部がわずかに内湾する。B2_69、B2_74は輪積み痕が顕著に残り、外面には条痕が認められない。B2_67はB2_69はと同様、輪積み痕を残すが、口縁部が比較的直線的で端部が平坦である。精製土器としてB2_1268が認められる。下野式に酷似し、広域編年を検討する場合、一定の定点を示す資料といえる。

馬見塚式段階　突帯を貼付する深鉢が主体であり、その形状が様々であるため、五貫森式段階と同じ

縄文時代

稲荷山式段階

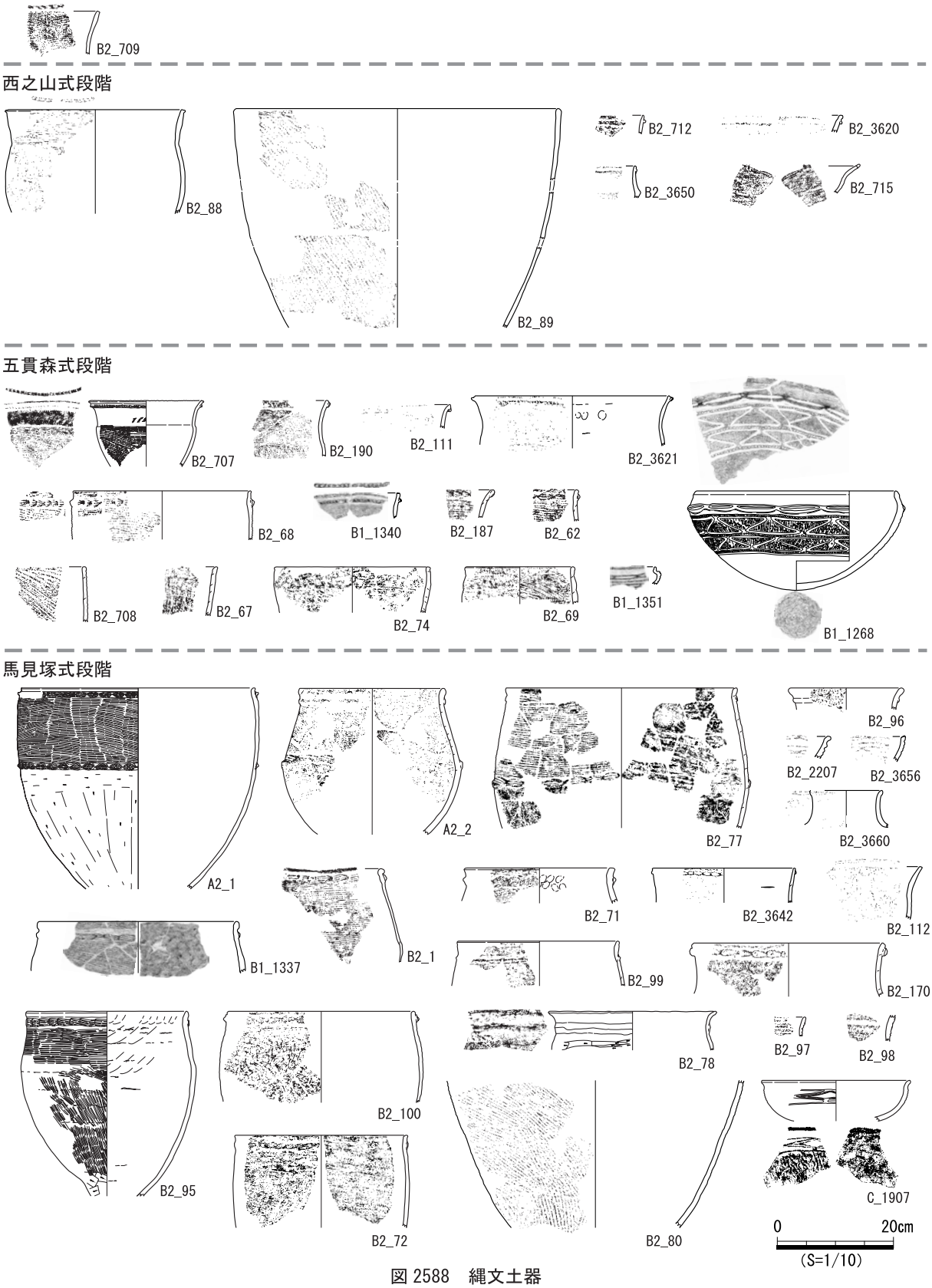


図 2588　縄文土器

く、時期差や型式差を内包していると考えられる。なかでも主体になるのが口縁端部をわずかに外反して、その直下に突帯を貼付する深鉢である（B2_1、B2_71、B2_77、B2_1337）。五貫森式段階より押し引きの幅が長くなりＯ字状を呈する。B2_71は扇形になるのが特徴的である。B2_77は二条突帯の例である。B2_170、B2_3642は口縁端部ほぼ直下に突帯を貼付し、その上に指頭による押圧を加える例である。その他に、砲弾形を呈する深鉢があるが、断片的な資料ばかりで、良好な資料が認められない。SK04256からは口縁端部の外反が弱く、突帯形状が偏平なB2_95が認められる。B2_1、B2_71、B2_77、B1_1337よりも型式的に新しい資料と考えられる。この土坑からはB2_95のほかに変容壺（B2_96、B2_98、B2_99）、砲弾形の深鉢（B2_100）が出土している。B2_99は口縁部が緩やかに外反しており、後続するSD1085出土のB2_5547と形状が近い。その一方で、断片的ではあるがB2_96は口縁部が短く外反するので、SZ144出土のA2_2と類似し、本時期の特徴を示している。B2_98は刺突文をもつ変容壺で、烏崎型とよばれる事例に類似する。B2_97は口縁部が外反し、半截竹管による沈線が認められる。変容壺や有文の土器の様相は、馬見塚式でも終末に近い時期にみられる資料と類似する。B2_100は口縁端部からわずかに下がった位置に突帯が貼付される。突帯形状は偏平で、Ｏ字状の押圧が認められる。外面には条痕が認められない。B2_112は口縁部が弱く外反するが、縦方向の細かな条痕が認められる。精製土器（B2_2207、B2_3656、B2_3660、C_1907）には、浮線文系土器が認められる。C_1907は文様が二重に表現され、この時期の最末期を示す浮線文系土器である。

弥生土器

弥生土器のうち、弥生時代後期～古墳時代前期については、弥生時代と古墳時代との区分が難しいため、弥生時代後期～古墳時代前期として取り扱い、ここでは弥生時代前期～中期を本報告のとおりⅠ～Ⅳ期に区分して概観する。

Ⅰ期　弥生時代前期が相当する。主体となるのは遠賀川系土器で、その他に少量の亜流遠賀川系土器、条痕文系土器、沈線文系土器、三ツ井式などの諸型式の土器が共存する。平成６年の県センター調査における自然流路出土土器の様相から、条痕文系土器がかなりの割合を占めると推測されてきたが、条痕文系土器が占める割合は少ないことが明らかとなった。遠賀川系土器の壺を検討すると、およそ口縁部が短く外反して口頸部境に削り出し段をもつもの（１期）、口縁部が緩やかに外反して口頸部境に削り出し段と太い沈線数条を組み合わせるもの（２期）、口縁部が大きく外反して開き口頸部境に多条化した沈線や突帯をもつもの（３期）の段階に区分可能である。頸胴部境の段、沈線、突帯の形状も口頸部境と同様の変遷を辿ると考えられる。また、遠賀川系土器の甕口縁部も壺と類似して変遷すると考えられる。濃尾平野ではおよそⅠ－１・２期が貝殻山式、Ⅰ－３期が西志賀式に相当する。

Ⅰ－１期　遠賀川系土器の壺、甕とも口縁部が短く外反し、削り出し段を形成する。B2_5542は口頸部境に削り出し突帯を形成して、その両側に沈線を重ねる壺である。口縁部が短く外反することからや、胴部が強く張らない器形であることから当該期に属すると考えられる。大型壺のほかに小型壺も認められる（B2_20）。甕は口縁部が弱く外反し、頸部に削り出し段を伴う（B2_5581）。条痕文系土器では深鉢は判然としないが壺を認めることができる。先に触れたように検討課題を残すが、SD1085出土B2_5545が相当する可能性が高い。類似する資料としてB2_87があげられるが、袋状口縁であり、型式的には後出すると考えられⅠ－１期の細分の可能性を示す資料ともいえる。馬見塚式の系譜をひく変容壺や甕が当該期まで残る可能性があり、B2_5546、B2_3662、B2_3663があげられる。B2_5546

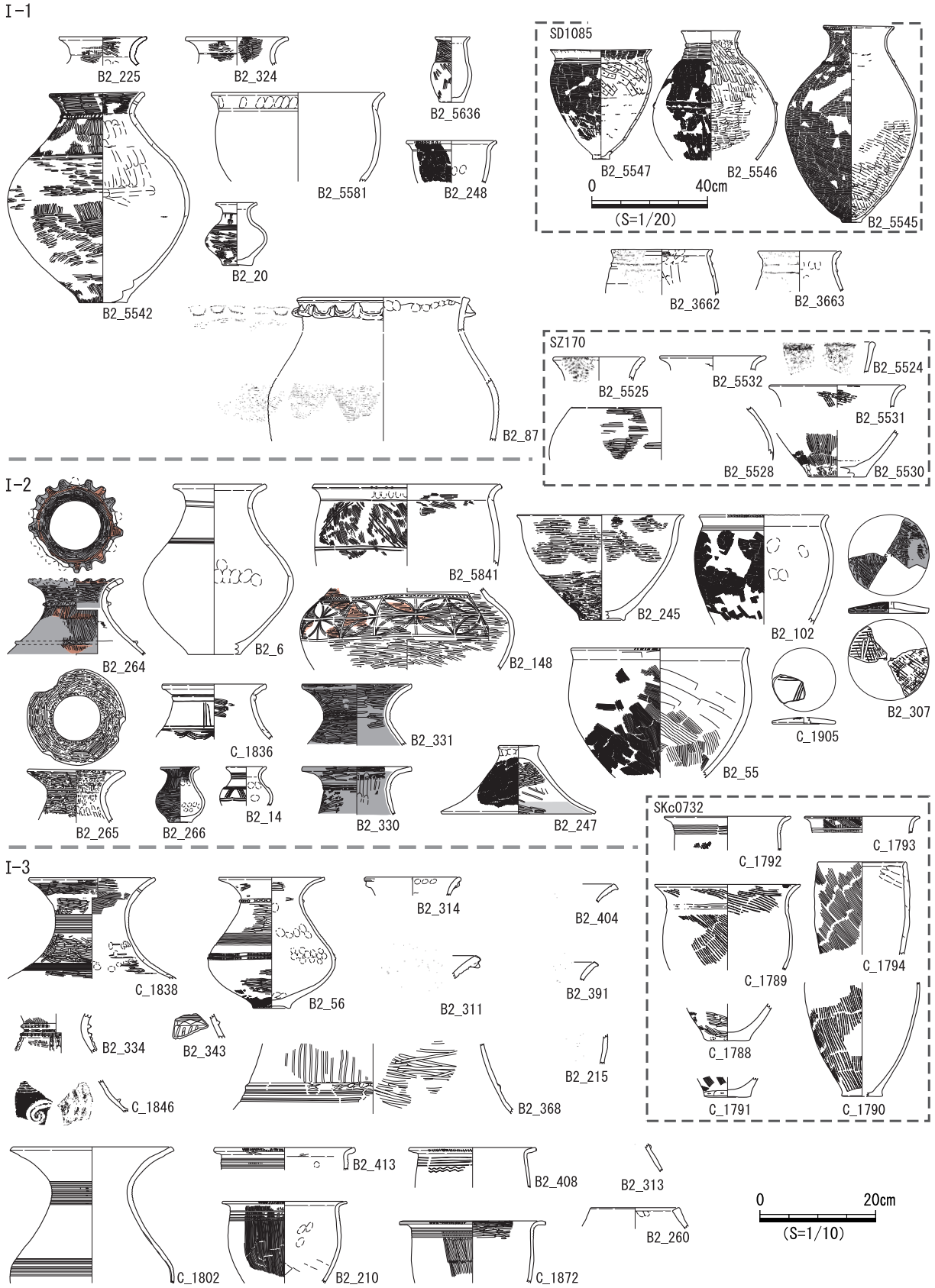

I-1
B2_225
B2_324
B2_5636
B2_5581
B2_248
B2_20
B2_5542
B2_87
SD1085
B2_5547
B2_5546
0
40cm
(S=1/20)
B2_5545
B2_3662
B2_3663
SZ170
B2_5525
B2_5532
B2_5524
B2_5531
B2_5528
B2_5530
I-2
B2_264
B2_6
B2_5841
B2_148
B2_245
B2_102
B2_307
C_1836
B2_331
C_1905
B2_55
B2_265
B2_266
B2_14
B2_330
B2_247
SKc0732
C_1792
C_1793
C_1789
C_1794
C_1788
C_1791
C_1790
I-3
C_1838
B2_56
B2_314
B2_404
B2_311
B2_391
B2_334
B2_343
B2_215
C_1846
B2_368
B2_413
B2_408
B2_313
0
20cm
(S=1/10)
B2_260
C_1802
B2_210
C_1872

図 2589　Ⅰ期の土器

の課題はすでに述べたとおりである。B2_3663は２条の突帯をもち、形状は断面高が低く偏平であるため、変容壺の末期段階を示す資料の可能性が高い。B2_5547は口縁部が緩やかに外反して、頸部に断面三角形の突帯が貼付される甕で器形は条痕文系土器に類似するが、突帯があることから変容壺と同じく馬見塚式に連なる資料と考えられる。類似する資料はSKc0732にも認められる（C_1789）。SKc0732ではⅠ－２、３期の遠賀川系土器及び条痕文系土器がみられるので、こうした資料がどの時期まで残るのか検討課題である。

Ⅰ－２期　Ⅰ期の土器のうち、最も出土量が多いと考えられる。遠賀川系土器の壺には赤彩による彩文や黒色顔料が塗布される資料が目立ち、木葉文など文様をもつ土器も認められる。口縁部はB2_6のようにⅠ－１期と比べるとやや長めに口縁部が外反し、口頸部境に削り出し段と沈線、削り出し突帯と沈線、太い沈線２条など多様な形状が認められる。太い沈線２条の資料は前二者の退化形状とも考えられるが、後続するⅠ－３期への過渡的段階と想定して、ここでは細分しなかった。口縁部の突起や口頸部にある突帯が特徴的なB2_264も、器形や彩文から当該期に属すると考えられる。B2_148は胴部に精緻な無軸木葉文のある資料である。無軸木葉文は当該期の段階にあると考えられ、有軸木葉文も同様と考えられるが、施文が雑であることから後続するⅠ－３期にまで残る可能性がある。小壺（B2_14、B2_266）も認められる。連弧文のあるC_1836の壺もこの時期と考えられる。遠賀川系土器の甕は口縁部が軽く外反し頸部に２条の沈線を加えるものが（B2_102）、当該期にあたると考えられる。遠賀川系土器は壺・甕のほかに鉢や壺蓋、甕蓋がみられるようになり、豊富な器種構成をみせる時期となる。条痕文系土器は断片的な資料を散見する程度で、判然としない。SZ170からは甕が出土し資料には時期幅が認められるが、遠賀川系土器とともに出土している。口縁部が短く外反する。B2_5525は口縁部に半截竹管による弧状の沈線が認められる。はいづめ遺跡でも出土が認められ、馬見塚式段階にも連なる資料である。甕に伴うと考え当該期と考えた。

Ⅰ－３期　遠賀川系土器の壺はB2_56、C_1802のように大きく口縁部が外反し、口頸部に突帯や多条化した沈線を伴うようになる。突帯も沈線と同様、数条になるものも認められ多条化する傾向にある。また、胴部には渦文状の突帯を貼付する資料も認められる（C_1846）。遠賀川系土器の甕は口縁部が頸部で強く屈折して、頸部には壺と同じく多条化した沈線を加える。SKc0758の例からすると、この段階から明確に亜流遠賀川系土器が伴うと考えられるが、その出土量は少量である。器形や施文の形態は遠賀川系土器に類似する。なかにはB2_368のように遠賀川系土器をこえる超大型品ともいえる資料が認められる。条痕文系土器は、断片的な資料ばかりである。壺は口縁部が強く外反し、端部に押し引きが認められるもの（B2_311）、認められないもの（B2_314）がある。甕は口縁部が壺同様、強く外反し端部に押し引きが認められる。

Ⅱ期

弥生時代中期前葉にあたり濃尾平野の朝日式の時期に相当し、一部、岩滑式に相当する資料が認められる。方形周溝墓の供献土器資料が多数を占めるため、壺が大半を占め、少量の甕が認められる以外、その他の器種はほとんど認められない。壺の器形や文様の特徴から前半と後半、Ⅱ－１期、Ⅱ－２期に区分した。Ⅱ－２期に相当する土器の出土量のほうが多い。

Ⅱ－１期　壺Ａ類は口縁部が頸部から緩やかに外反する。文様は頸部の直線文１帯のみか頸部と胴部上半の２帯で構成される。いずれも二枚貝による施文である。胴部は緩やかに膨らみ、Ⅱ－２期と比

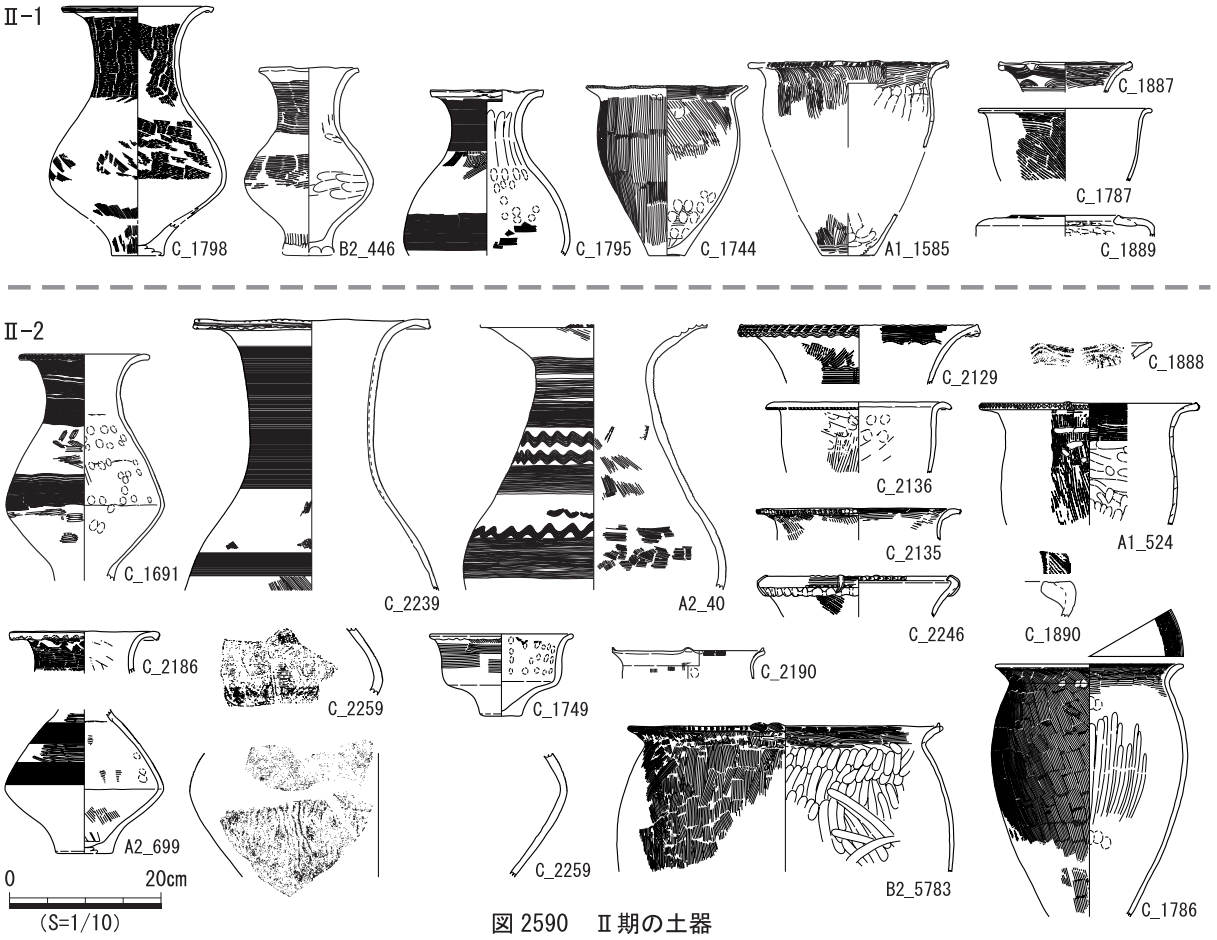


図 2590　Ⅱ期の土器

べると、肩部の屈曲が弱い。Ⅰ期からの壺の形状を継続する。甕は口縁部が短く外反するものが相当する。外面に条痕が認められ、内面の施文は認められない。羽状文を有する条痕文系の甕については細片すら確認できなかった。Ⅲ期においても条痕文系の甕は１点のみの確認にとどまったので、Ⅱ期に組成しないと考えられる。その他に、沈線文系土器（C_1887）がみられる。

Ⅱ－２期　壺Ａ類は頸部が直立して口縁部が強く外反する。端部が下方に拡張され、端部にも文様が認められることも多い。文様は頸部と胴部上半の２帯構成で、二枚貝によって施文される。なかにはわずかに直線文と波状文を組み合わせる資料も認められる。Ⅱ－１期と比べると肩部の張りが強くなり、Ⅲ期の壺の形状にちかくなる。A2_699は肩部の屈曲が顕著で口頸部を欠損するが、文様は頸部を含めて３帯構成と考えられ、当該期の資料のうちではもっともⅢ期に近い資料であろう。甕は口縁部が強く外反し、端部が下方に引き出されるものもみられる。外面は条痕とハケ目を残す２者が認められ、内面に施文が認められる資料がある。口縁端部に押圧のある資料も認められ、B2_5783はハケ工具による押圧が認められる。岩滑式に相当する壺は口縁部がやや直立して受口状となり、内面には文様が認められる（C_2129、C_2246）。確認できたのは数点程度である。

Ⅲ期

弥生時代中期中葉に相当し濃尾平野の貝田町式の時期にあたる。Ⅱ期と同様、方形周溝墓からの供献土器として出土する資料がほとんどであり、出土量が少なく器種は細頸壺のみといってもよいほど、細頸壺が圧倒的多数を占める。その他には、甕、沈線文系土器などが認められるが、１点のみの確認

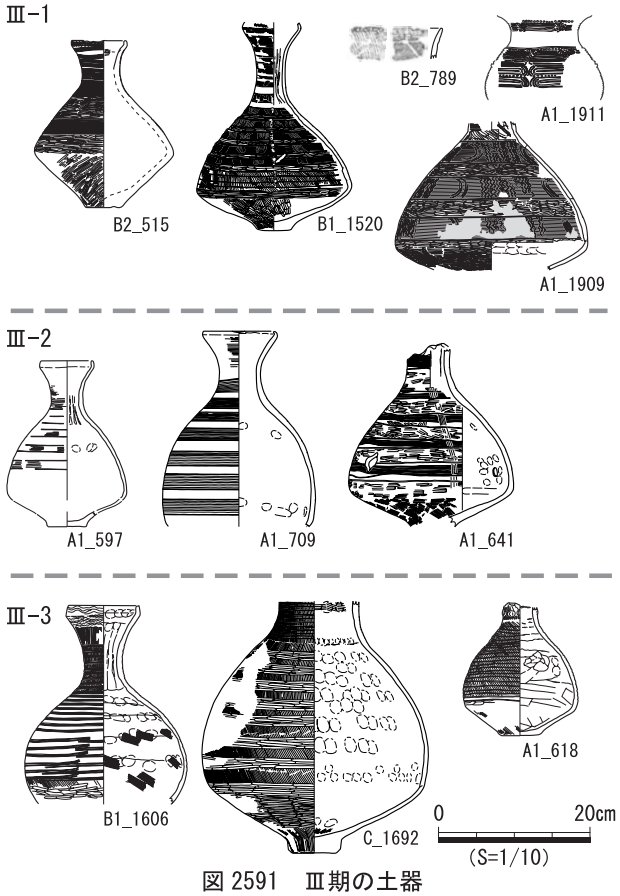


図 2591　Ⅲ期の土器

などきわめて少量しか認められない。細頸壺の器形や文様構成によって３段階に区分できる。

Ⅲ－１期　壺Ａ類の頸部が細身で胴部が強く張り、肩部の屈曲が強い。文様は口頸部のほか、胴部に少ないもので２帯（B2_515）から多いもので５帯（B1_1520）の直線文が認められる。いずれもハケ状工具による直線文の上下端に付加沈線を加えるもので、精緻な文様をもつ。また、文様間のミガキも丁寧である。精緻な文様をもつ資料の多くは、直線文帯に弧状や波状の文様を重ねることが多く、器壁が薄く胎土が黒褐色を呈して在地のものとは異なるため、濃尾平野からの搬入品と考えられる。壺Ａ類の他に、SK00133から当該期の壺と出土した沈線文系土器（A1_1911）や条痕のある甕（B2_789）がみられる。

Ⅲ－２期　壺Ａ類の胴部の張りがやや弱くなるとともに肩部の屈曲も弱くなる。Ⅲ－１期に比べると、胴部直線文帯や文様帯間のミガキがやや雑になる。直線文帯に重ねる文様も直線文と同様、形骸化するかもしくは施文が認められなくなる。A1_709のように胴部直線文帯が多段化する資料も認められるようになる。

Ⅲ－３期　壺Ａ類の器形はⅢ－２期に類似するが、胴部はさらに丸味をおびる。文様は大きく変化し、付加沈線を伴う直線文帯ではなく、数条からなる直線文帯がみられるようになる。また、文様帯間のミガキを失い、ハケ目がそのまま残る資料が認められるなど、直線文帯と付加沈線で構成された文様が形骸化する。

Ⅳ期

弥生時代中期後葉に相当し、濃尾平野の高蔵式の時期にあたる。Ⅱ期・Ⅲ期と同様、方形周溝墓の供献土器として出土することが大半で器種は壺が多くを占めるが、Ⅱ期・Ⅲ期に比べて供献される割合が増加したため、一定量の出土量がみられる。Ａ地区Ⅰの報告書では、方形周溝墓の重複関係から３段階の時期区分を想定した。今回、あらためてⅣ期出土土器を検討した結果、３段階の区分が可能と考えた。その一方で、一部に報告書で認定した時期区分と齟齬が生じた箇所もある。供献された時期、転落するまでの時間など考慮すると、供献土器からみた時期区分と重複関係からみた時期区分の相違と解釈し、今回は土器の型式変化からみた時期区分として整理した。Ⅲ期と同じく、主要器種である細頸壺の器形や文様の変化から、３時期に区分した。

Ⅳ－１期　細頸壺にあたる壺Ａ類の頸部が細身で、口頸部が緩やかに長く外反する。A1類は口縁端部が直立し、A2類は内湾する。胴部はなだらかに膨らみ、肩部は強く屈曲しない。A2類の文様は頸

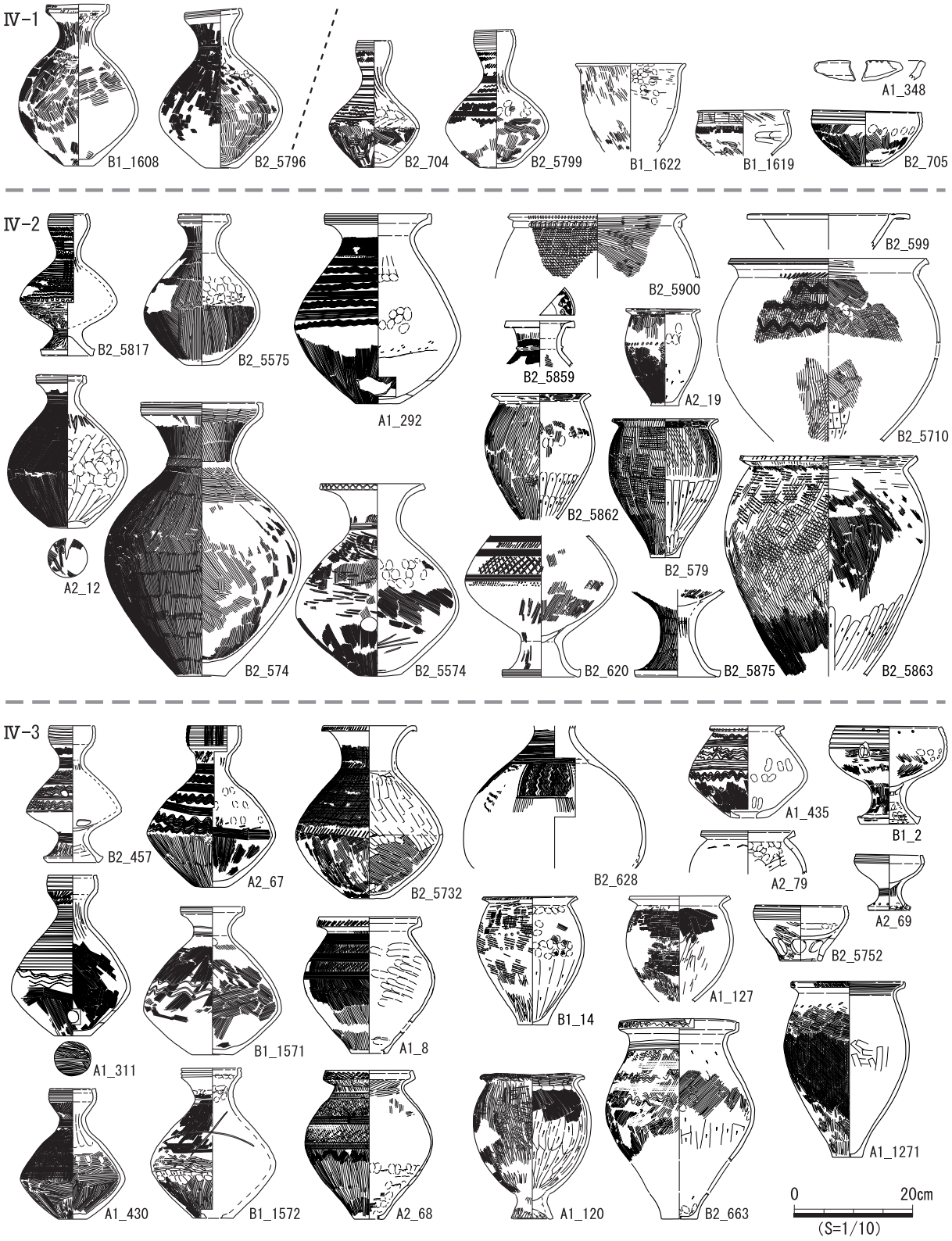


図 2592　Ⅳ期の土器

部では羽状文と直線文、胴部では波状文と直線文の組み合わせを基本とし、胴部文様は胴部最大径のやや上位までの範囲で施文する。他の器種に細頸壺以外の壺、甕、鉢があるが出土量が少なく、当該期とした細頸壺とともに供献された良好な資料に恵まれない。Ⅲ期の供献土器が細頸壺で占められていた傾向を継続すると考えられる。

Ⅳ－２期　壺Ａ類の口頸部がやや短くなる傾向が認められ、継続するⅣ－３期の過渡的な形状を示す。A2類に脚台付きの資料もわずかにみられるようになる。細頸壺以外の壺、甕、高坏がみられるようになり、器種組成が増加する。壺Ｂ・Ｃ類は一定量の出土が認められるが、いずれも大型品である。甕はＡ類が壺Ａ類に次いで出土量が多い。口縁部が頸部で強く屈曲し、肩部が強く張る資料が多く認められる。胴部中央に刺突列を伴うものも多い。鍔状口縁をもつ高坏Ｂ類の出土もみられるが、ごく少数の出土である。

Ⅳ－３期　壺Ａ類は口頸部が短くなり、頸部からすぐに口縁部が外反して立ち上がる。また、頸部径がⅣ－１期に比べると大きく、肩部がやや屈曲気味となる。壺A2類の胴部文様は肩部もしくは肩部の下位まで施文されるようになる。B1_1571は無文を基本とするA1類だが、胴部に文様がありA2類の影響が認められる。胴部文様の施文範囲は壺Ｂ類・Ｃ類でも同様である。壺Ｂ類・Ｃ類も前段階と同じく、一定量の出土がみられる。口縁部が頸部からすぐ外反し、壺Ａ類と共通する形状がみられる。甕はＡ類のほかＢ類も一定量出土するようになる。Ａ類は前段階に比べて、肩部の張りが弱くなり胴部最大径の位置がやや下方に移行する。脚台付の甕もごく少数出土する。高坏はＣ類が多くみられるようになる。脚部が短く外反し、細頸壺の脚部とも類似する。また、台付鉢もみられるようになる。

Ⅴ期

弥生時代後期にあたり、濃尾平野の山中式の時期におおよそ相当する。Ａ地区Ｉの報告書と同じく、高坏Ａ類・Ｂ類の形態から３段階に区分した。

Ⅴ－１期　高坏Ａ類、B1類が認められる時期で高坏Ａ類のほうが先行するが、Ａ地区Ｉ報告書で報告したとおり、１期に含めて取り扱う。これまで、出土資料が断片的で他の器種との組み合わせが明確にできなかったが、すでに検討したSB537出土のⅤ期前半資料が高坏Ａ類と組み合う可能性が高いと考えられ、ある程度、Ⅴ－１期の様相が判明するようになった。このため、Ⅴ－１期は前半と後半とに、将来、細分可能だと考えられ、前半は後期初頭の濃尾平野の八王子古宮式に、後半は山中式前半の時期に相当する。前半は高坏Ａ類にⅣ期甕Ａ類の影響を強く残す甕Ｂ類（B2_6347、B2_6353、B2_6354）、甕Ｂ類と同じくⅣ期甕Ｂ類の影響を強く残す甕Ａ類（B2_7414）がみられる。B2_508壺は口縁部形状にⅣ期の特徴を残すが、上向きに貼付された頸部突帯に新しい要素が認められる。類似する資料にB2_7407がある。甕Ａ類はⅣ期甕Ｂ類との区別は困難だが、口縁部の立ち上がりがややⅣ期と比べ短くなる。胴部文様は胴部中央付近まで施文されることが多い。後半は高坏Ｂ類で、これに壺Ａ類、甕Ａ類、甕Ｂ類が組み合うと考えられる。甕Ａ類は口縁部の屈曲が顕著なものの、胎土が赤褐色を呈し、それまでのⅣ期やⅤ－１期でみられた近江の湖南系と類似する黒褐色系の胎土とは異なり、在地化が進んだ可能性がある。そのため、文様も胴部中央まで施文されることが少なくなる。甕Ｂ類は口縁部の屈曲が弱く肩部の膨らみが強いものが当該期にあたる。今回の報告分を合わせても、良好な資料はそれほど多くない。前半はⅣ期の影響を残す段階、後半はⅣ期の影響を脱却した段階ともいえよう。

Ⅴ－２期　高坏B2類が認められる時期にあたり、今回の報告分にある程度まとまりのある資料が認められた(NR002-SU004、SB537、SK06527)。１期に比べると、出土量も増え、遺構にも伴うようになる。外反高坏の高坏B2類、甕Ａ類・Ｂ類のほかに、ワイングラス形の高坏Ｉ類、碗状高坏Ｈ類、さらには広口壺の壺Ａ類、長頸壺の壺Ｈ類、器台Ａ類、鉢Ａ類がみられ、主要な器種が認められる。外反高

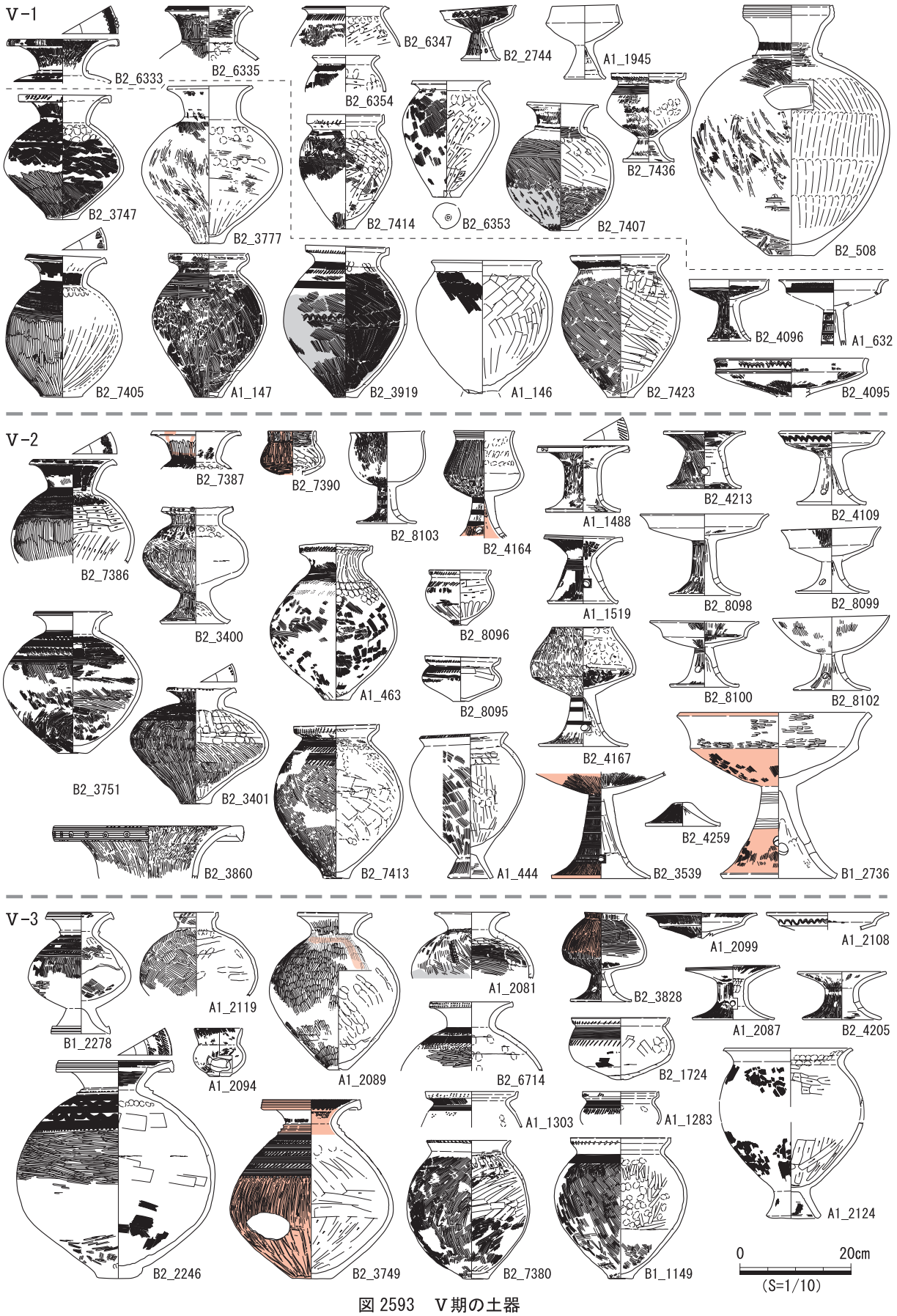

V-1
B2_6333
B2_6335
B2_6347
B2_2744
A1_1945
B2_6354
B2_7436
B2_3747
B2_3777
B2_7414
B2_6353
B2_7407
B2_508
B2_4096
A1_632
B2_7405
A1_147
B2_3919
A1_146
B2_7423
B2_4095
V-2
B2_7387
B2_7390
B2_4213
B2_4109
B2_7386
B2_8103
B2_4164
A1_1488
B2_3400
B2_8098
B2_8099
A1_1519
B2_8096
A1_463
B2_8100
B2_8102
B2_8095
B2_4167
B2_3751
B2_3401
B2_4259
B2_3860
B2_7413
A1_444
B2_3539
B1_2736
V-3
A1_2099
A1_2108
A1_2119
A1_2081
B2_3828
B1_2278
A1_2087
B2_4205
A1_2094
A1_2089
B2_6714
B2_1724
A1_1303
A1_1283
A1_2124
B2_2246
B2_3749
B2_7380
B1_1149
0
20cm
(S=1/10)

図 2593　Ⅴ期の土器

坏、ワイングラス形高坏は口縁部の波状文、脚部の直線文、さらには赤彩がみられるなど加飾が顕著である。壺Ａ類は口縁部が短く外反し、端部や内面に刺突文や波状文など胴部文様と同じ文様を施文する例もみられる。胴部は肩部が緩やかで、球形に近い形状を示す。胴部文様は胴部中位まで施文し、直線文と波状文の組み合わせを基本とする。甕Ａ類は１期と比べて口縁部の屈曲がやや鈍化する傾向にあるが、個々の資料による形状が様々であり、一定の時間幅を示す。胴部文様は刺突文と直線文を基本として、胴部上半に施文される。甕Ｂ類は口縁部が頸部で短く屈曲し、肩部が強く張る。当該期のまとまりある資料からすると、甕はＡ類が主体で、Ｂ類が客体的で出土量はそれほど多くない。また、甕Ｂ類は在地のものと胎土が異なり、尾張低地部から搬入品の可能性があり、こうした状況が甕Ａ類・Ｂ類の多寡にも作用しているのであろう。甕Ｂ類は脚台付と平底の資料があり、脚台付のものが先に触れた尾張低地部のものと考えられるものである。平底のものはⅣ期に系譜があり、Ｖ－１期から存続するとみられるが、その量は少ない。鉢Ａ類も甕Ａ類と同様の様相を示す。SK06527では胴部が腰高の形状と扁平の形状をもつものがみられる。時期差の有無については、将来の検討課題である。先に検討したように、SK06527出土の高坏は加飾が認められないため、当該期は将来的に２時期に区分できる可能性があるといえる。高坏では加飾から無文への変化が想定可能であろう。

Ｖ－３期　高坏B3類がみられる時期である。まとまりのある資料はＡ地区Ｉで報告したSK00572以外に認められなかったが、個別に当該期にあたると考えられる資料がSD0381から出土した。様相はＡ地区Ｉで報告したとおりで、高坏Ｂ類の外反が強くなり、坏底部と口縁部の境界が不明瞭となる。文様、赤彩などの加飾は形骸化し、ほぼ無文となる。ワイングラス形の高坏も同様である。壺Ａ類は口縁部が外反して端部が外傾する。胴部文様の施文範囲が胴部中央からやや上半へと狭くなる傾向があり、直線文と波状文の組み合わせのほか、刺突文など多様な文様がみられる。甕は甕Ａ類の口縁部の屈曲が形骸化し、胴部文様の施文範囲が狭くなる。２期まで２帯構成であったものが単帯の例が多くなり、一部に直線文のみとか、刺突文のみとか組み合わせを省略する資料もみられるようになる。甕Ｂ類は２期に続いて、平底の資料が認められる。器壁が薄いものが多いことから、甕Ａ類の製作技法を踏襲した可能性が高い考えられる一方で、胴部最大径が中央付近へとそれまでの時期より下がり、出土量は少ないものの型式変化しながら当該期まで継続する。

Ⅵ期

弥生時代後期末～古墳時代初頭にあたり、濃尾平野では廻間Ｉ式の時期にあたる。Ａ地区Ｉの報告と同じく、高坏Ｂ類からＣ類へ交代、有段高坏の高坏Ｃ類への型式変化から３時期に区分した。

Ⅵ－１期　Ａ地区Ｉ報告で基準資料としたSB014、SD0384のほかにSD0433出土資料が新たな基準資料として加えられる。高坏は口縁部の外反が強いB3類、口縁部が長く外反しＣ類との過渡的形状を示すB4類、口縁部が外傾しながら立ち上がるC1類が共存する。高坏B3類は口縁部形状をみるとＶ－３期のものとは区別がつかないが、脚部はＣ類と同じく長脚になるものが多い。高坏はＢ類・Ｃ類のほか同一形状の小型品であるＦ類・Ｇ類が一定量組成するようになる。大型壺は壺Ａ～Ｃ類の各種がみられるが、全形の判明する資料は多くない。胴部形状はいずれも肩部がやや張り気味で球形にちかくなる。Ａ類は口縁部が外反して、端部下端をやや拡張する例が多い。胴部文様は直線文と刺突文の組み合わせが大半を占め、波状文と組み合わせる例は減少する。文様は胴部上半２分の１程度の範囲に施文され、Ｖ期と比べると施文範囲は狭くなる。中型壺はH1類が多くみられ、Ｖ期のものより

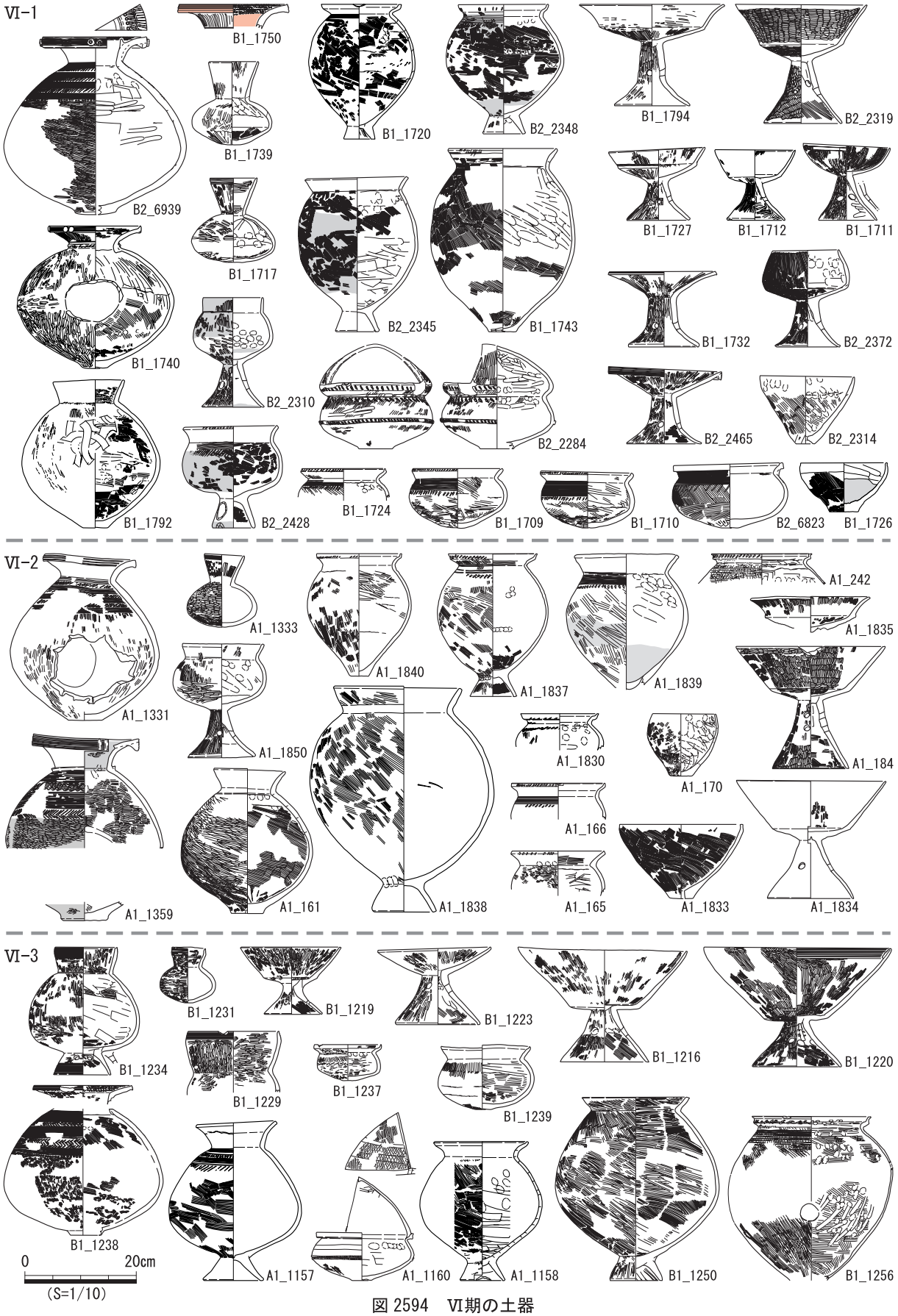


図 2594　VI期の土器

胴部が扁平となる。甕は大型品から小型品まで多様で各種がみられる。Ｖ期の甕ＡＢ類の系譜をひくA3・A4類、B2類が主体を占め、これらの同一形状の中小型品の甕がわずかにみられる。A3・A4類は平底甕のＶ期甕Ａ類から変化して脚台が付くようになり、口縁部の屈曲が形骸化する。B2類は脚台が付くのが通例だが、Ｖ期と同様、少数ながら平底の資料がみられる。胴部には上半に直線文と刺突文が施文されることが多い。甕Ａ類・Ｂ類がそれぞれ互いに折衷する傾向がみられる。鉢はＶ期鉢Ａ類の口縁部の屈曲が形骸化したA3類が多くみられる。一部に脚台付の資料も認められる。器台はＶ期Ａ類から脚部が直立気味のB1類へ交代する。

Ⅵ－２期　Ａ地区Ｉ報告で基準としたSD0383以外、今回の報告分をあわせても基準資料は得られなかった。様相は１期と類似し、次の３期との過渡的様相を示す。高坏Ｃ類は坏底部径が１期よりやや縮小するC1・C2類がみられるが、形状に大きな変化は認められない。高坏Ｂ類も共存するが、１期よりその量は減少する。大型壺は胴部最大径の位置が胴部中央よりやや下方となり、やや下膨れ気味となる。

Ⅵ－３期　Ａ地区Ｉ報告では基準資料が断片的であったが、Ｂ地区Ｉ報告でSK01881出土の良好な資料を得た。SK01881出土資料を中心に概観する。高坏はC3類が主体で、口縁端部内面を肥厚して多条沈線を加飾する例が登場する。壺Ｈ類やＧ類に口縁部上半に多条沈線を加飾するものが認められ、加飾の出現期と考えられるが、高坏で加飾するのは図示した範囲からすれば13点中２例であり、その量は少量にとどまる。大型壺の胴部は２期に比べて下膨れが進行し、胴部文様には羽状文がみられるようになる。甕は１・２期と様相を継続するが、壺と同様、胴部が下膨れとなるものが認められる。Ａ類は口縁部の屈曲がさらに形骸化し、Ｂ類では口縁部がわずかに内湾気味となる資料も認められるようになる。また、この時期からＳ字甕Ａ類である甕Ｄ類が確実に伴う。器台は脚部が直立気味のものから、外反するB2・B3類が中心となる。

Ⅶ期

当遺跡出土土器のうち最も出土量が多いが、実際のところⅦ期のまとまりのある資料が得られていない。Ａ地区Ｉ報告の通り、高坏Ｃ類からＤ類への移行、Ｓ字甕Ｂ類の甕D2類の登場を軸に３時期に区分した。およそ濃尾平野の廻間Ⅱ式の時期にあたる。

Ⅶ－１期　Ａ地区Ｉ報告以降、良好な資料が得られてない。ある程度まとまりある資料として、SB103、SB341があげられる程度である。有段高坏は口縁部が内湾するC4類が主体となり、わずかにＤ類を伴うようになり内面加飾を伴う例が顕著となる。Ⅵ－３期では多条沈線のみであったのが、多条沈線と山形文、刺突文、連弧文を組み合わせて複数帯加飾する。多条沈線単帯から多条沈線と他の文様を組み合わせる、そして組み合わせた文様を複数帯施文するという変化が想定可能だが、これらの段階を検証できる出土事例は認められない。現状では、多条沈線単帯から、短時間で複数帯の加飾へ、この段階から移行したと考えられる。小型の高坏Ｇ類にも高坏Ｃ類と同様の加飾が認められるようになる。大型壺の壺Ａ～Ｃ類はⅥ－３期からの胴部下膨れの傾向を維持する。Ａ類では胴部文様は大ぶりな山形文が直線文と組み合わさる例が認められるようになり、赤彩される割合が増加する。口縁端部は内傾しながら、下方に拡張される。壺Ｂ・Ｃ類はⅥ期と比べると、ミガキが雑であったり、口縁端部があまり平坦でなくなったりするなど粗雑化する傾向にある。甕はＳ字甕Ｂ類の甕D2類が新たにみられるようになる。甕Ａ類はⅥ期から継続してみられるが、その量は少なくなり、B2・B3類が

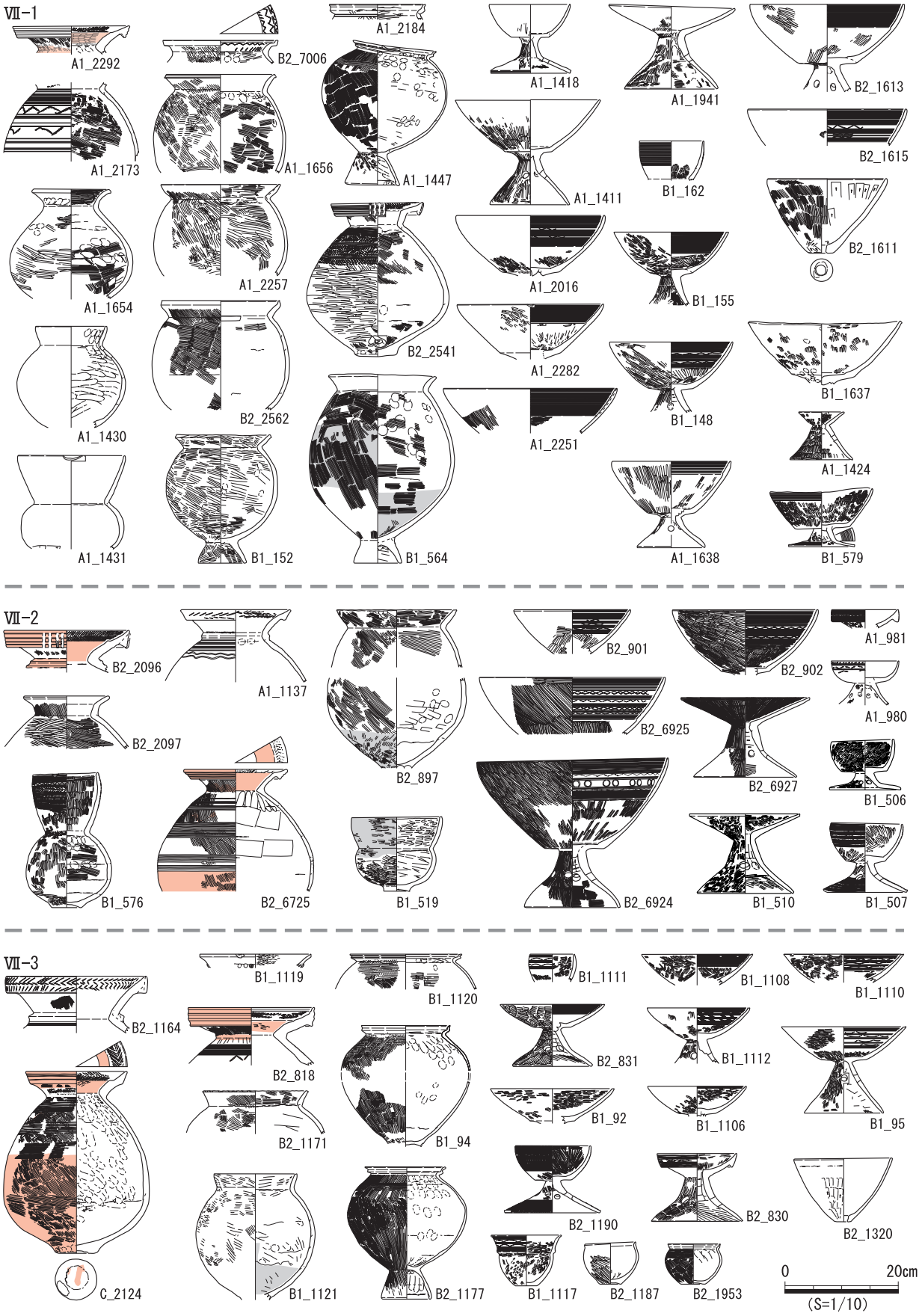

Ⅶ-1
A1_2292
B2_7006
A1_2184
A1_1418
A1_1941
B2_1613
A1_2173
A1_1656
A1_1447
A1_1411
B1_162
B2_1615
A1_1654
A1_2257
A1_2016
B1_155
B2_1611
A1_1430
B2_2562
B2_2541
A1_2282
B1_148
B1_1637
A1_1431
B1_152
B1_564
A1_2251
A1_1638
A1_1424
B1_579
Ⅶ-2
B2_2096
A1_1137
B2_901
B2_902
A1_981
B2_2097
B2_897
B2_6925
A1_980
B2_6927
B1_506
B1_576
B2_6725
B1_519
B2_6924
B1_510
B1_507
Ⅶ-3
B1_1119
B1_1120
B1_1111
B1_1108
B1_1110
B2_1164
B2_818
B2_831
B1_1112
B2_1171
B1_94
B1_92
B1_1106
B1_95
B2_1190
B2_830
B2_1320
C_2124
B1_1121
B2_1177
B1_1117
B2_1187
B2_1953
0
20cm
(S=1/10)

図 2595　Ⅶ期の土器

中心となる。B2類は口縁端部が丸みをおびる例が多くなり、断続的な強いナデのあるB3類が顕著となる。鉢は出土量が減少し、Ａ類のなかでも端部が屈曲しないA4類が主体を占めるようになり、甕と類似する様相が認められる。器台はＣ類が新たに認められるようになるが、Ⅵ期における器台Ｂ類のあり方からすると、その量は少数である。

Ⅶ－２期　良好な資料は得られていないが、内面加飾のある高坏C4類から３期の高坏Ｄ類の中間的様相を示す時期として区分した。SD0422、NR002内や西部域西端の低地となる箇所やSD0381（大溝）から遺存状況のよい土器が出土した。これらを参考に１期と３期の中間的な位置にあるような資料を示した。有段高坏はC3・C4類とＤ類が混在するが、１期に比べて口縁部の開きが大きくなり、坏底部径が小さくなる。内面加飾の文様構成は１期とほぼ同じだか、４帯あるいは５帯とさらに多段化する傾向が認められ、加飾の最盛期にあたると考えられる。その動きに応じて、多条沈線間に充填する文様も二重表現をするものや、方向を変えるもの、工具を変えるものなどさらに多様化する。スタンプ文もこの時期となる可能性が高い。わずかだが施文範囲は口縁部中程を超えるものもあり、拡大化傾向にある。そうした傾向は小型の高坏Ｇ類でも同様である。また、中型壺の壺Ｈ類への加飾が目立つのも、加飾の最盛期であるこの時期と考えられる。口縁部が内湾し、口縁部中程かもしくはやや下がった位置まで多条沈線のみではなく高坏と同様、多様な文様を加飾する。胴部は胴部の肩部の張りが弱く、腰高である。大型壺のＡ類は口縁端部がやや上方へ拡張される例がみられるようになる。その他、甕、鉢、器台ついては１期と大きく様相は変わらない。

Ⅶ－３期　Ｂ地区西部南部を中心に破片は多く出土するものの２期と同じく、良好な資料が認められない。Ｂ地区Ⅰ報告で取り上げたSK01810が数少ない基準資料である。有段高坏は高坏Ｄ類へと交代し、２期に比べてさらに口縁部が開きを強める。内面加飾は２期と同じく多様な文様がみられるが連弧文が盛行するようになり、文様が直線文と連弧文の組み合わせへ画一化される傾向にある。壺Ａ類は口縁端部を上方に拡張して、内外面に羽状文をもつ例が認められ、胴部が下膨れはさらに顕著となる。胴部文様は直線文と山形文の組み合わせが大半しなる。甕はB2・B3類が主体で、一定量のＳ字甕Ｂ類にあたる甕D2類がみられる。甕Ａ類はみられなくなり、B2類の口縁端部は丸くなる。

Ⅷ期

一部廻間Ⅱ式末を含む可能性を残すが、およそ濃尾平野の廻間Ⅲ式の時期にあたり、これまでの報告のなかではあまりまとまりのある資料は得られていなかったが、Ｂ区西部域南部やＣ地区でまとまりのある資料が確認できたので、高坏Ｅ類、Ｓ字甕Ｃ類を軸に２時期に区分した。２期から畿内からの搬入品と考えられる布留式系の土器を一定量伴うようになる。

Ⅷ－１期　Ⅶ期高坏Ｄ類がさらに形骸化して、坏底部と口縁部の屈曲が不明瞭となるものや坏底部が皿状を呈する高坏Ｅ類がみられる（B1_467）。内面にはⅦ期と同様の文様が認められるものがあるが、各文様帯の幅は狭小となる。大型壺の胴部はⅦ期から継続して下膨れが顕著である。広口壺は口縁端部が上方に拡張され、内外面に羽状文が施文される。胴部上半にはやや雑な直線文と波状文が施文され、柳ヶ坪型壺の祖型となるような例がみられる(C_760)。Ⅵ期・Ⅶ期の壺Ｃ類に系譜をもつ壺も認められる。口縁部が短く立ち上がり、胴部にはハケ目がそのまま残り、Ⅵ期・Ⅶ期と比べるとつくりが雑である。さらに二重口縁壺(B2_1689)もごく少数みられるようになる。中型壺には長頸壺がみられる。Ⅵ期・Ⅶ期の壺Ｈ類に類似するが、器壁が薄くミガキが精緻な点で異なる。また、ほぼ丸底を

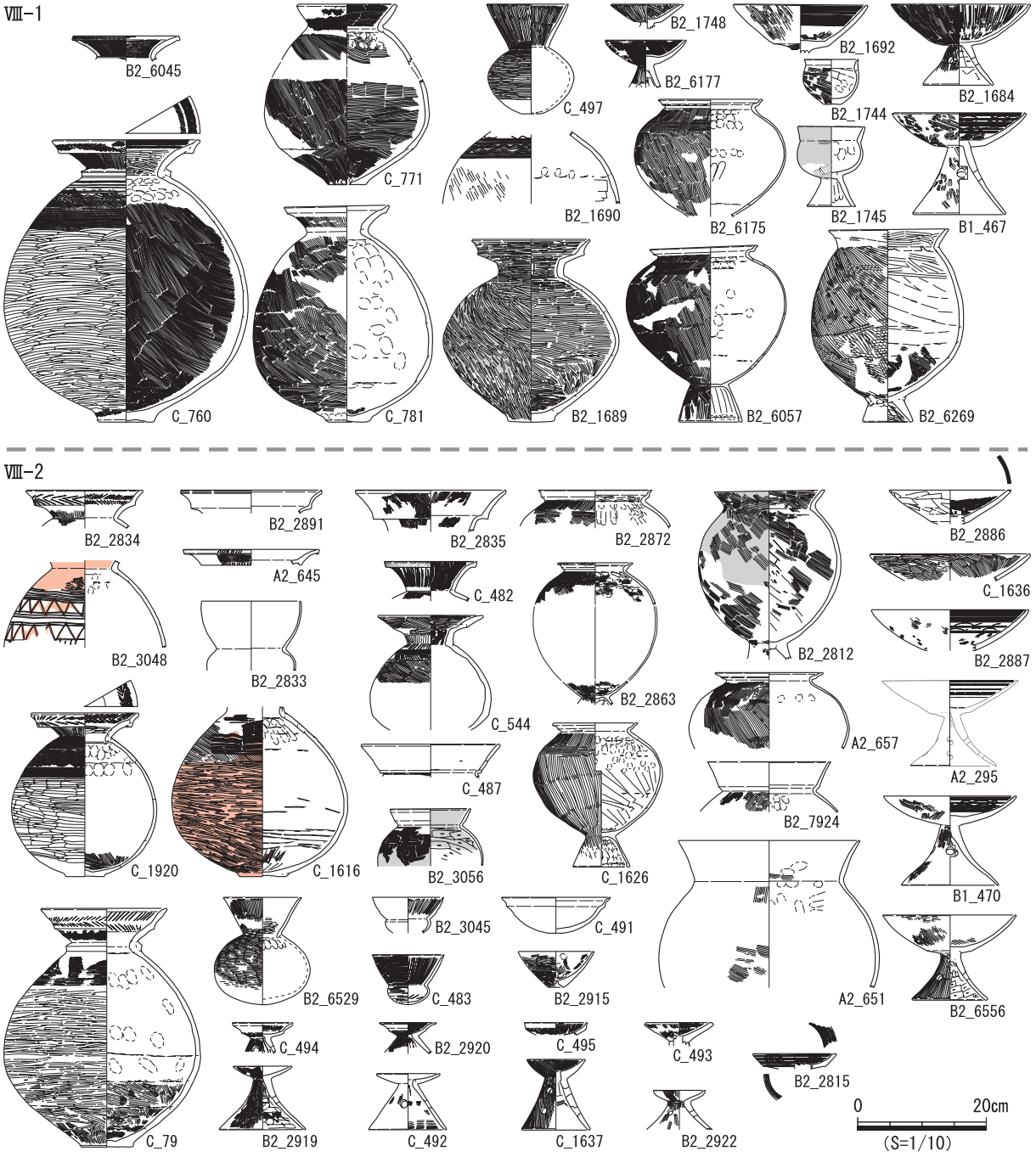


図 2596　Ⅷ期の土器

呈する点もⅥ期・Ⅶ期と異なる点である。甕はⅥ期・Ⅶ期のＢ類に系譜をもつ甕とＳ字甕Ｂ類・Ｃ類古段階が認められる。前者は頸部の屈折が弱くなり、口縁部が弱く外反する。胴部は壺と同じく下膨れで、小さな脚台が付く(B2_6269)。Ｓ字甕Ｂ類・Ｃ類の共伴の有無は確実な事例をえてないので、将来の検討課題としておきたい。鉢はそれまでの鉢Ａ類にかわって、口縁部がわずかに立ち上がる平底のものがみられるようになる(B2_1744)。

Ⅷ－２期　高坏は坏底部と口縁部の境界が分からないような例で占められる。坏底部は限界まで狭小化が進み、それとともに脚部付根の径も縮小する。大型壺は柳ヶ坪型壺(C_79)や二重口縁壺(A2_645、B2_2835)が安定的に伴うようになる。一方でⅦ期壺Ａ類の胴部文様が粗雑化した資料も認められる

（B2_3048）。長頸壺も１期と同様、丁寧なミガキのある例が認められる。小型壺には小型丸底壺が認められるようになり、いずれも器壁も薄く精緻なミガキがあり、搬入品と考えられる。胎土も在地とは異なる例が大半である（B2_3045、C_483）。Ｓ字甕Ｃ類新段階が多く占め、Ⅶ期から継続するような甕はわずかに存続する程度で、口縁部が長く外反するもの（A2_651）があり、また少数ながら布留式系の丸底の甕が認められる（B2_3056）。小型丸底壺と同じく、薄手で丁寧なつくりであり、搬入品と考えられる。器台は小型品が多くみられるようになり、受部は小さな皿状を示す例が多い。一部に口縁部端部が屈曲する例がみられる。鉢は少数ながら、布留式系の丸底鉢がみられる（C_491）。前述した壺、甕と同じく丁寧なつくりで搬入品と考えられる。

Ⅸ期

濃尾平野の松河戸式の時期にあたり、Ⅷ期と同じくこれまでの報告では断片的であった時期である。Ｂ地区西部域南部やＣ地区である程度まとまりのある資料が確認できたので、高坏やＳ字甕の形状から２時期区分し、それぞれ松河戸Ⅰ式、Ⅱ式に相当する。

Ⅸ－１期　高坏はこれまでの高坏の形状から一変して屈折脚高坏がみられるが（B2_1550、B2_1555、B2_7257、B2_6016、B2_8003、B2_7971）、わずかにⅧ期に系譜にある高坏も伴う（B2_1551、B2_7255、B2_8002）。屈折脚高坏は脚部が細身で丁寧なミガキを施す。二重口縁壺はⅧ期と比べると屈曲部が不明瞭であったり、端部が丸かったりするなど形骸化した例がみられる（B2_1770）。また、二重口縁壺のうちには、端部には強い平坦面が認められ、伊勢型二重口縁壺と考えられる例も認められ

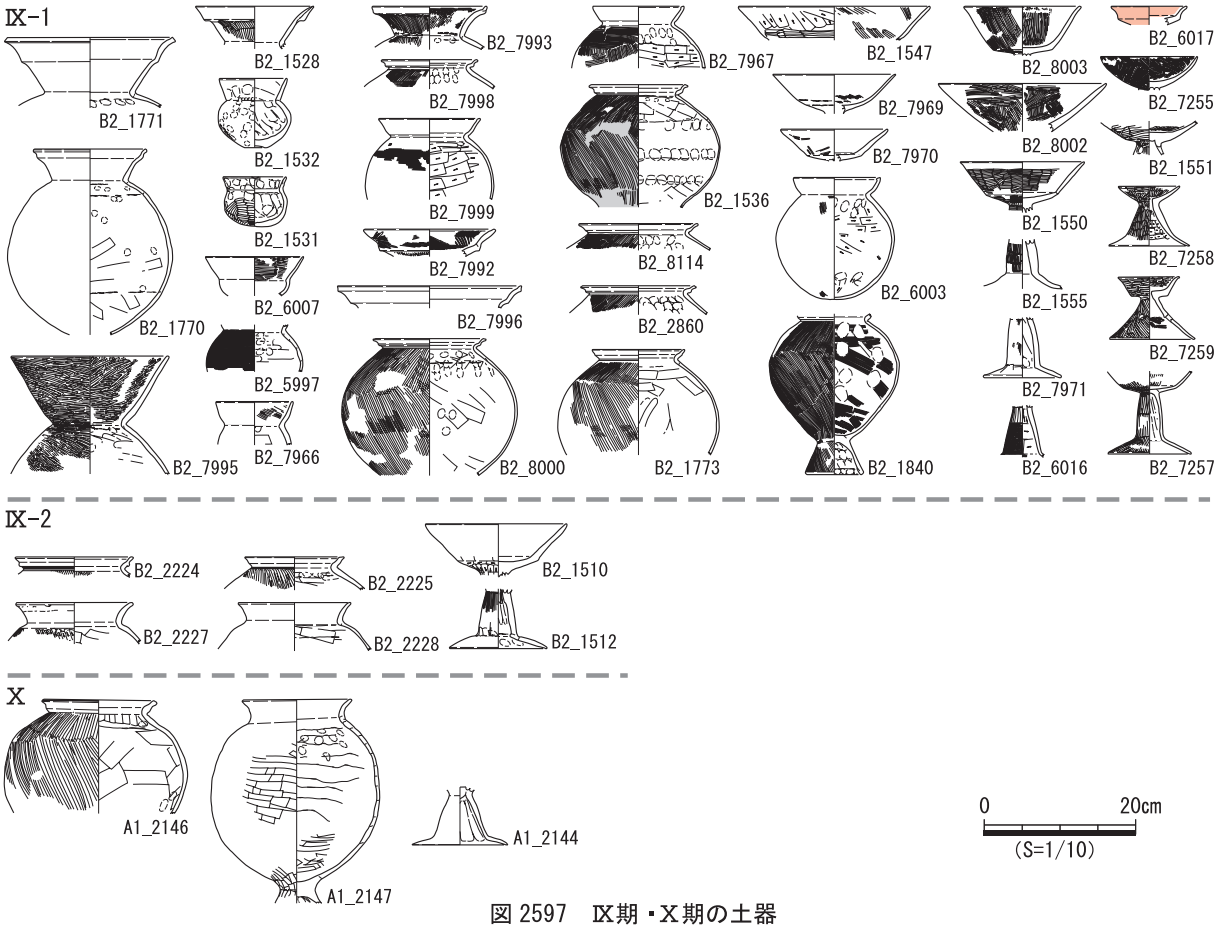


図 2597　Ⅸ期・Ⅹ期の土器

る(B2_1771)。小型丸底壺も厚手でミガキのないつくりが雑な例があり、在地化が進んだと考えられる(B2_1531、B2_1532)。甕はＳ字甕Ｃ類にかわってＤ類の古段階がみられる。その他の甕はくの字甕と丸底甕で、Ⅷ期と同様の傾向である。丸底甕のうちには小型丸底壺と同じく、つくりの雑なものがみられ、在地品と考えられるものが認められる(B2_6003)。器台はⅧ期と大きな変化は認められない。

Ⅸ－２期　１期と比べると断片的な資料が多い。高坏脚部がやや短くなり(B2_1512)、つくりが雑となる。壺は良好な資料が認められないが、１期と類似する様相をもつと考えられる。甕はＳ字甕Ｄ類新段階のものとくの字甕がみられる。布留式系の丸底甕は現状では確認できてない。くの字甕は一定量認められ、口縁部の立ち上がりがⅧ期や１期と比べると短くなり、胴部は頸部から強く張る。

Ⅹ期

濃尾平野の宇田式の時期にあたる。個々の資料としては一定程度の出土が認められるが、遺構に伴うようなまとまりのある資料は確認できていない。このため、各器種の組み合わせを提示するのが困難である。当遺跡において縄文時代から継続した人々の営みは、ひとまずの終焉を示す時期といえる。宇田型甕とそれに伴う高坏を提示する程度である。宇田型甕の口縁部形状は個別に形状が様々であるため、それなりの時間幅の想定が可能である。高坏は出土量がわずかで、脚部が短く裾部が強く開く。共伴すると考えられている初期須恵器は当遺跡での出土は認められなかった。

以上、縄文土器、Ⅰ期～Ⅹ期の土器を概観した。それぞれの時期によって土器の出土する遺構、基準となる資料の有無の違いがあり、時期区分や器種構成、さらにはその消長などの詳細を明らかにできない点がある。また、加飾土器のあるⅥ期～Ⅶ期を除いて、西濃地域の特性については言及できなかった。ここで示した時期区分は報告書の報告における基準づくりで、ある意味出発点とさせていただきたい。残る課題は将来的に再検討すべきものとしておきたい[5)]。

注

1)　遺物番号のうち、アンダーバーの前の文字は報告書名を示し、後ろの数字は各報告書の掲載番号を示す。
　報告書名は、A1：荒尾南遺跡Ａ地区Ⅰ（岐阜県文化財保護センター2012a)、A2：荒尾南遺跡Ａ地区Ⅱ（岐阜県文化財保護センター2013)、B1：荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ（岐阜県文化財保護センター2012b)、B2：荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅱ（本報告書)、C：荒尾南遺跡Ｃ地区（岐阜県文化財保護センター2014）である。

2)　愛知県埋蔵文化財センター　赤塚次郎氏、石黒立人氏のご教示による。

3)　第７章第２節参照。

4)　Ｓ字甕の共伴は明らかな一括資料で検証されたわけではないので、今後の資料の増加によってあらためて検討したい。今回の検討は暫定的なものと考えておく。

5)　残る課題はいくつかある。既存の編年、時期設定との整合、時期区分の時系列における変遷要因などである。前者はそれぞれの研究の進展によって検討されるべきものであろう。変遷要因を明らかにすることは、当遺跡の特質を解明することにもつながると考えられる。当遺跡の土器は複数の地域に起源のある土器型式がみられ、これらの土器が互いに影響を与えたり、在地化するなどの事象が認められる。こうした事象の詳細を明らかにするためには、各時期の類型化を進めるべきであろう。

第５節　石器類

ここでは、Ｂ地区から出土した石器類の器種別の組成、石材などをまとめ、出土量の多い器種に焦点をあてその時期や分布状況に見られる特徴について検討する。なお、遺物の時期は出土遺構の時期とし、これらの時期別の基数を大まかに把握するため、第７章第２節１(2)で述べた手法に準じて時期別の数量を算出した。しかし、遺物の時期は、遺構重複や埋没過程での混入の可能性があり、あくまで時期別の出土傾向や分布状況をつかむための一つの目安と考えたい。

１　石器類の分布と組成

表575では、Ｂ地区Ｉの報告書（岐阜県文化財保護センター2012b）と今回の報告書で提示した石器類の合計997点の出土地点と遺構別の出土量を示した。Ｂ地区の出土地点は発掘調査時に43の地点に細分したため、それらを図2598のようにａ～ｉの９ブロックに分けて器種ごとの数量を算出した。

表575　B地区出土石器類の地点別、遺構別組成一覧材

器種 / 地点名 遺構名	打製石鏃	磨製石鏃	石錐	石鋸	刃器	楔形石器	RF	MF	剥片	石核	打製石斧	磨製石斧	石包丁	叩石	凹石	磨石	砥石	石杵	台石	石錘	投弾	軽石製品	玉類	石製品	合計
a		1			1	1	6		6			1		9	1		45							5	76
b	1	2			1		5	1	11	1	4	3		36		4	94		4		1	3	5	1	177
c	6	1	1	1	1		12		14			4	1	39		1	78					9	6	1	175
d	4								1					2			23					1			31
e	3			1	5		3	1	14	1		3		19		1	40	1		1			3	2	98
f	7	1			8	2	10	5	42	1	2	6		89		2	139			1		15	9	6	345
g	3								3					8			19	1				9	1		44
h	2	1	1									1	2	3			4							4	18
i					1		1	3	2			1	1	2			9		1						21
不明					1									4		2	5								12
小計	26	6	2	2	18	3	37	10	93	3	6	19	4	211	1	10	456	2	5	2	1	37	24	19	997
SA，SB，SP，SH	5				6	1	4	4	22	1	4	1		49		3	91		3		1	4	7	3	209
SZ	5	1			1		5		23			6		24		2	23					1	4	1	96
SD	5	2		1	1	1	11		12		1	2	3	55			123	1				13	6	6	243
SK	1				3	1	4	2	2	2		1		32			69		1	1		2	5	2	146
ST	1													1			6								8
NR	1	1			2		2	3	2			4		18	1	1	45	1	1	1		1		4	88
遺物包含層など	8	2	2	1	5		11	1	14		1	5	1	32		4	99					16	2	3	207
小計	26	6	2	2	18	3	37	1	93	3	6	19	4	211	1	1	456	2	5	2	1	37	24	19	997
Ⅴ期SB														1			4(4軒)					1	1		7
Ⅵ期SB									7					2		1	11(7 軒)								21
Ⅶ期SB	5				6	1	4	4	11	1	3	1		34		1	61(45 軒)		3		1	2	5	2	145
Ⅷ期SB									2		1			4		1	12(9 軒)							1	21
Ⅸ期SB														2			3(3軒)					1			6
SB363(Ⅴ～Ⅵ)														1			4								5
SB517(Ⅵ)									4								2								6
SB320(Ⅵ～Ⅶ)									1					1			5								7
SB555(Ⅵ～Ⅷ)									1					3			2								6
SB280(Ⅶ)								1						3			2						1		7
SB404(Ⅶ)	1				1									1			2								5
SB429(Ⅶ)														4			3								7
SB524(Ⅶ)									5																5
SB365(Ⅷ)									1					2			2								5

全体では、砥石の出土量がもっとも多く、次いで叩石、剥片、軽石製品の順に多い。地点別にみると、Ⅶ期の竪穴住居跡（表575のⅦ期SBに対応する。なお、他の時期も同様である。）が密集するｆ地点で石器類の出土量が最も多い（面積比を別にして）。次に多いのはｂ地点、ｃ地点である。ｆ地点の石器類の内訳をみると砥石139点、叩石89点と大半を占めるので、各地点の石器類出土量の多さは砥石、叩石の出土量に比例する。砥石、叩石以外の器種をみると、打製石鏃など各地点での出土点数は10点にも満たないので、その量比を検討するほど出土量は認められない。そのなかでは軽石製品がｆ地点から15点出土し、他の地点より多いといえる。

図 2598　Ｂ地区出土石器類の地点区分と主な遺構

次に遺構種別ごとの石器組成について考えたい（表575中段）。溝状遺構（SD）と建物関連の遺構（SA、SB、SP、SH）からの出土が目立ち、いずれも他の遺構より砥石と叩石の出土量が多いことがその要因である。他の器種では軽石製品の出土が大溝から多いことが指摘できる。また、土坑からも砥石と叩石が一定量出土し、その比率（２：１）は溝状遺構と類似する。建物関連では叩石の割合（砥石：叩石＝３：２）が増加する。ここでは、竪穴住居跡から出土している石器類であれば、出土土器によって石器類の所属時期の判断が容易になると考え、竪穴住居跡の時期別に器種ごとの点数を比較した（表575中段）。

Ⅵ期とⅧ期の竪穴住居跡から出土した石器類はともに全体の約10％であり、いずれも砥石が50％を占める。Ⅶ期の竪穴住居跡から出土した石器類は74％と圧倒的に多く、砥石が43％を占め、次いで叩石、剥片の比率が高い。Ⅶ期の竪穴住居跡の盛行に伴い石器類の出土が比例して増加するともいえるが、一方で多くの石器類がⅦ期に属し、利用頻度が高くⅦ期の竪穴住居跡での生業を反映した可能性が高いといえよう。さらに、SB１軒ごとの組成を比較したい（表575下段）。その際、石器類の出土量が多い竪穴住居跡で比較した方が組成の特徴をつかみやすいと考え、５点以上の出土がみられた９軒を抽出した。SB524以外の竪穴住居跡８軒で砥石と叩石が出土しており、図2598をみると、

図2599　Ｂ地区出土の砥石分布

それらはｆ地点に集中し、Ⅵ期～Ⅶ期とした竪穴住居跡も含めるとⅦ期の竪穴住居跡からの砥石、叩石の出土は顕著である。砥石、叩石以外の石器類（打製石鏃など）には縄文時代のものもみられるが、これまで検討してきたように、砥石、叩石は出土量が多く、所属時期もⅦ期前後とある程度、特定可能であることから、砥石の分布に注目することで、当遺跡の特性につながるものと考えて検討した。

２　砥石の分布

１でも述べたとおり所属時期には一定の時間幅を想定する必要があること、また、詳細な時期ごとに砥石の分布状況を把握することは困難であることから、ここでは図2599をもとに平面的な砥石の分布状況を検討したい。

Ｂ地区全体に砥石の分布が認められ、西部から東部南側にその分布がやや偏っている状況がわかるが、特に建物関連の遺構が密集するｆ地点での砥石の分布が濃密である。さらに、西部域の自然流路の東側（図2598ａ・ｅ地点）と東部域の大溝の西側（図2598ｃ・ｇ地点）にも多く分布する。Ｂ地区Ⅰの報告書でも指摘があるが、この２箇所では水場と結びついて砥石を使用していた可能性が高い。今回の報告では、自然流路や大溝において大量の土器や木製品等とともに砥石が出土している状況が見られたことから、廃棄行為があった可能性についても加えておきたい。

次に、先に指摘した砥石分布がｆ地点に濃密であること、Ⅶ期前後の時期に多くみられることに注目して遺構の位置関係から時期別の分布状況を検討する。Ⅶ期前後は建物数が最盛期をむかえることから、建物跡及び関連遺構に図2599の砥石分布を重ねて、それぞれの時期の分布状況を比較した（図2600）。図2599を重ねた理由は、遺構から出土しなかった砥石を詳細な時期に分けることが困難であ

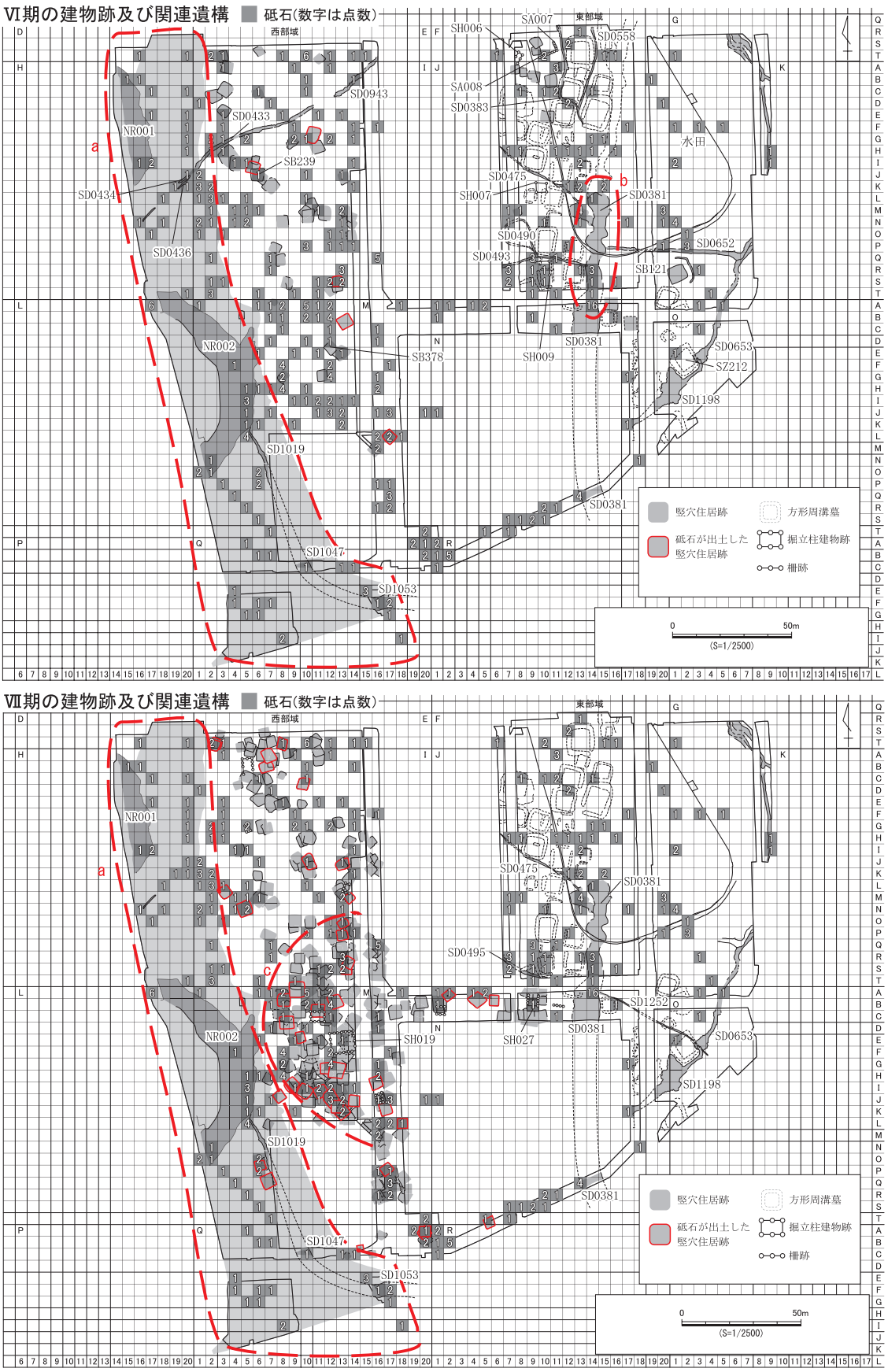


図 2600　Ｂ地区における砥石分布と建物跡及び関連遺構（上：Ⅵ期、下：Ⅶ期）

ると考えたからで、一方で、遺構から出土しない砥石についても何らかの作業の痕跡を示す可能性があると考えたからである。

図2600上は、図2599にⅥ期の建物跡及び関連遺構を重ねたもので、おおむね竪穴住居跡の密集するｂ地点とｆ地点の遺構分布の上に砥石が分布する状況が看取できる。図2600下では、図2599にⅦ期の建物跡等を重ねた。この時期はｆ地点の西部域中央に竪穴住居跡が多数構築され集落が大きく展開する。砥石の分布も西部域中央の遺構分布と重複する。さらに砥石が出土したⅦ期SBは、大型掘立柱建物（SH019）を中心に弧状に分布している（図2600下ｃ）。調査区に制約があるため、この分布が環状になるのか定かではないが、第７章第２節の３（3）で述べたように、SH019が集落の中心であると仮定するならば、砥石が出土したⅦ期の竪穴住居跡は何らかの関係を有していたのかもしれない。また、Ⅵ期かⅦ期かは特定できないが、自然流路東側に遺構分布とは重複しない砥石の分布が認められる。遺構に伴わない状態で水場に近い場所で砥石が用いられたことを示唆するものと考えられる。先にも指摘したように、遺構分布がⅦ期に卓越していることから、水場に近い場所に分布する砥石もⅦ期となる可能性が高い。

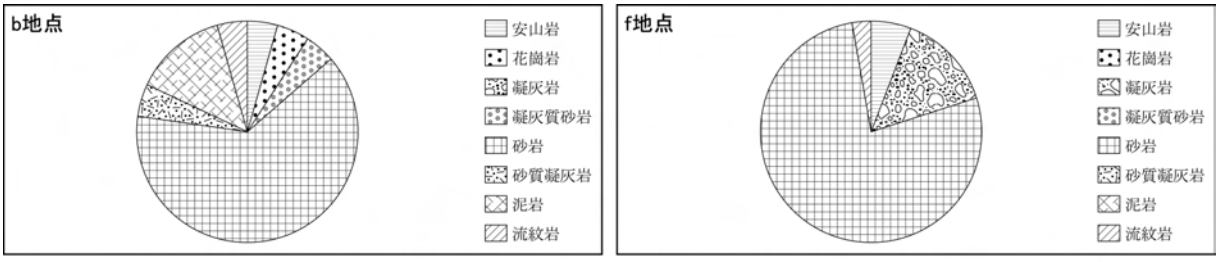


図 2601　Ⅶ期 SB 出土砥石の石材組成

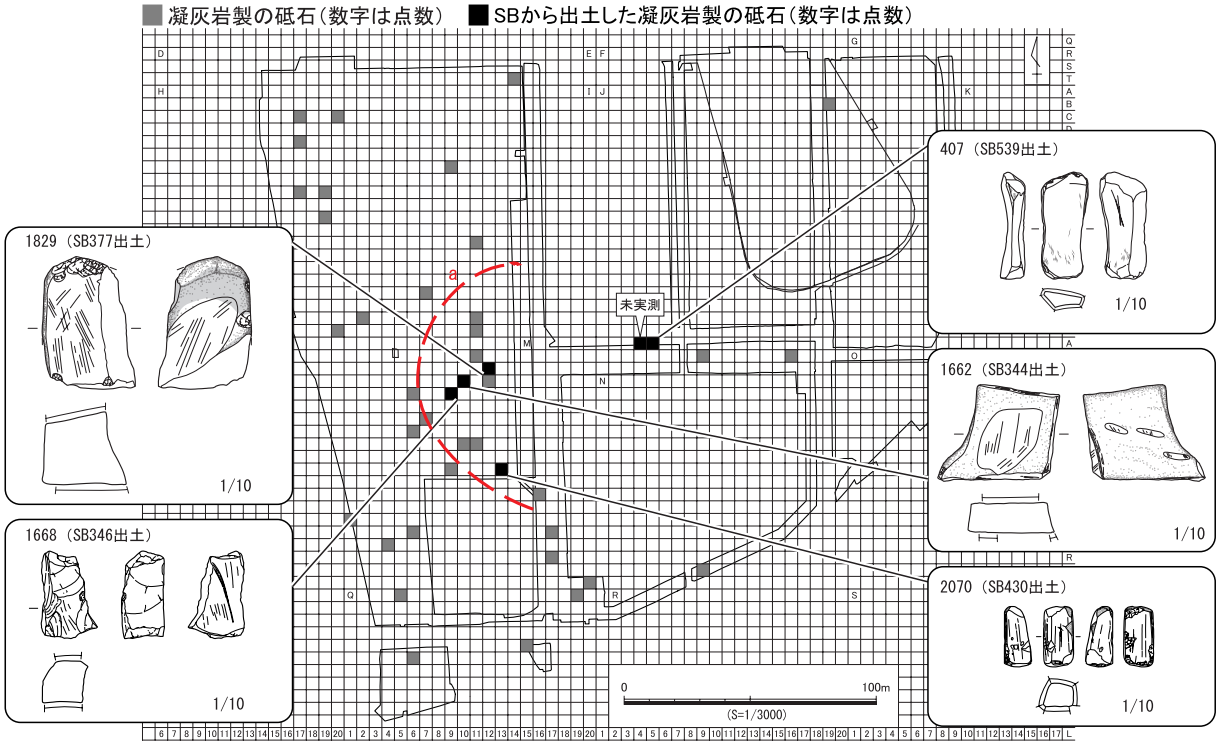


図2602　Ｂ地区出土の凝灰岩製砥石分布

次に、砥石の石材組成から分布状況を検討する。

図2601では、砥石の出土量が最も多いⅦ期の竪穴住居跡に着目し、集落域が想定されるｂ地点とｆ地点に分けて砥石の石材組成を表した。どちらも砂岩の割合が高く、ｆ地点には凝灰岩製の砥石の割合が高くなる。なかには断面Ｕ字状の溝をもつものもみられる。凝灰岩製の砥石は、その研磨痕や整形痕から、その対象が鉄器であることが明白である（図2603）。1662の裏面には鉄製工具の刃先によると考えられる研磨痕が認められ、断面Ｖ字状の溝をもつことから、研磨するために使用されたものと考えられる。また、3174（図2604）の側面には鉄器による鑿痕状の整形痕が認められ、砥石の砥面再生に鉄器が用いられていたことを示している。いずれの例も凝灰岩製の砥石と鉄器が強く結びついていたことを示す事例といえよう[1)]。

凝灰岩製の砥石の分布をみると（図2602）、凝灰岩製の砥石はＢ地区全体に散漫に分布している状況が看取できるが、竪穴住居跡から出土した砥石はほぼｆ地点の遺構密集域（図2602a）に分布する。このため、凝灰岩製の砥石はⅦ期の竪穴住居跡に伴う可能性がある。

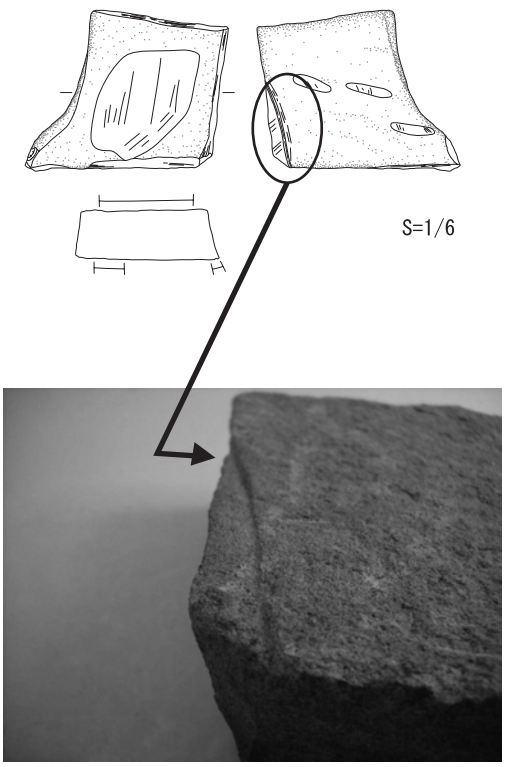


図2603　断面Ｖ字状の溝をもつ砥石（1662）

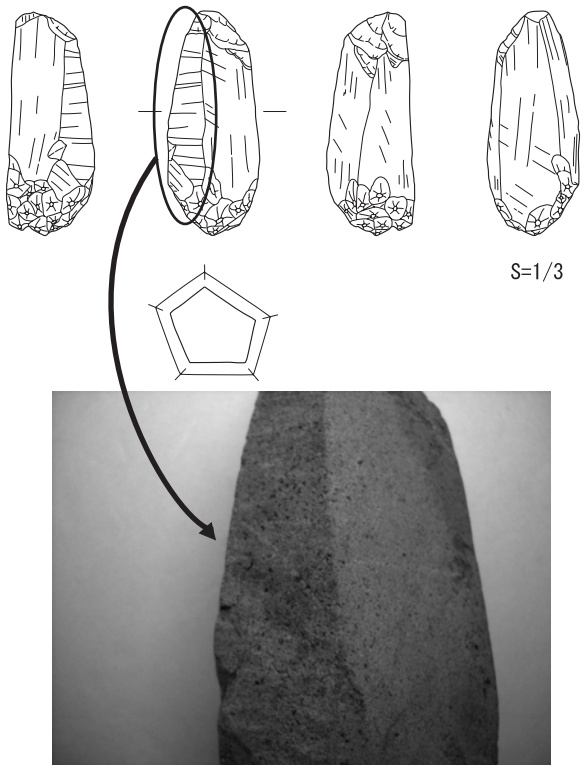


図2604　鑿痕状の整形痕がある砥石（3174）

最後に、砥石を重量別に分けてその分布状況を検討する（表576）。砥石の重量区分は500g単位とし、区分毎の点数をカウントした。さらに図2605においては、手で持ち運びしやすい重さとして「500g以下の砥石」、据え置き用とみられる重さとして「5001g以上の砥石」、それ以外の「501～5000gの砥石」というように、砥石の重量を３段階に分けてグリッドを塗り分けた。また、塗り分ける際に、5000g以下の砥石には重い砥石の破片も含まれるため、一つのグリッドに各段階の砥石が混在する場合には重い方を優先して塗り分け、5001g以上の砥石には遺物番号や出土した遺構名、遺構時期を図中に示した。よって、ここでは主に5001g以上の重い砥石に着目して分布状況を検討したい。

表576をみると、500g以下の軽い砥石はＢ地区で出土した砥石全体の45％を占め、5001g以上の

表576　Ｂ地区出土砥石の重量比較

重量(g)＼地点	a	b	c	d	e	f	g	h	i	不明	総計
～ 500	43	38	47	18	14	48	26		7	1	242
501～1000	3	11	14	5	3	10	7	1	1		55
1001～1500	2	7	3	2	9	14	6	1			44
1501～2000	4	8	5		3	8	3				31
2001～2500	2	5	3	1	1	6	2	1			21
2501～3000		4	2		2	5	1	1			15
3001～3500		2	1				2				5
3501～4000	3	2	2		1	3	1				12
4001～4500		1	1			2	1		1		6
4501～5000		2	1		2	3					8
5001～5500					1						1
5501～6000											0
6001～6500						1	1				2
7000～		2			3	7	2				14
総計	57	82	79	26	39	107	52	4	9	1	456

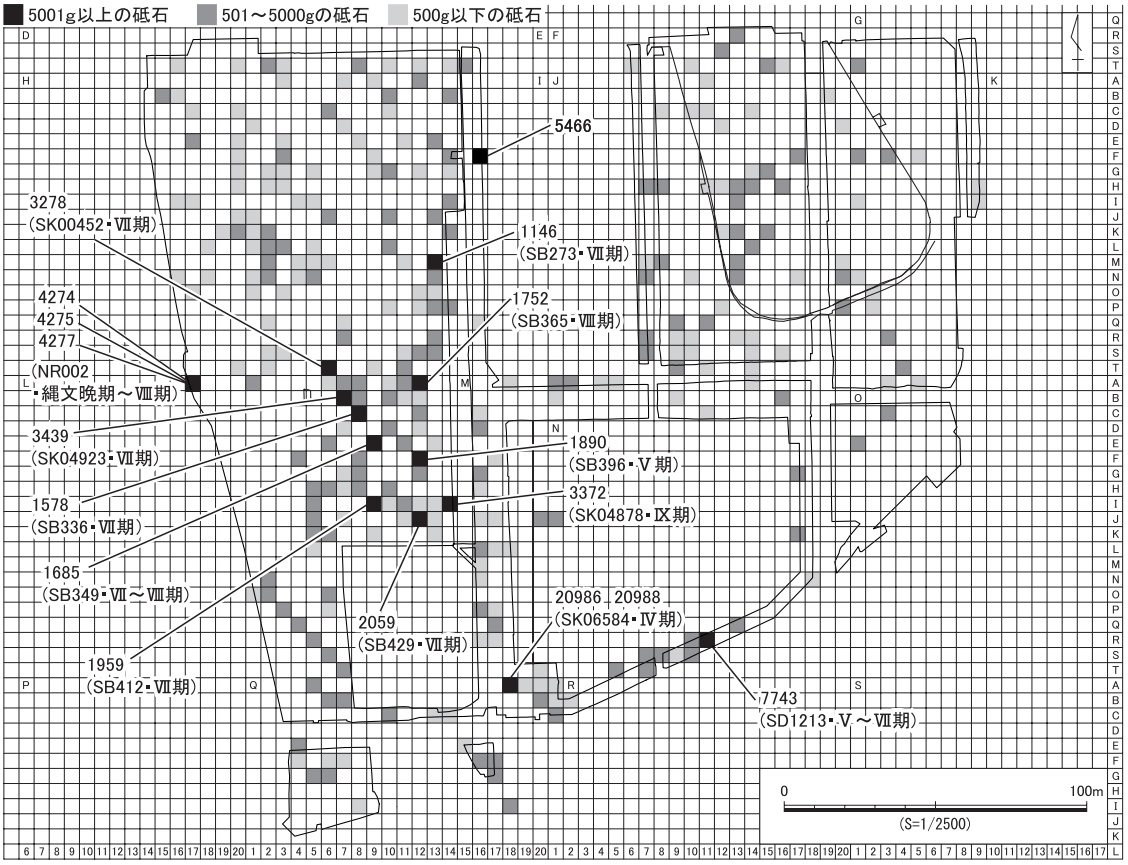


図2605　Ｂ地区における砥石分布

砥石は17点と全体の5.8％である。図2605をみると、重い砥石の約60％がｆ地点の遺構密集域に分布する。500g以下の軽い砥石は、その多くがｂ地点やｆ地点の建物跡や建物関連の遺構の位置に広く分布しているのに対して、5001g以上の重い砥石は分布範囲が狭いことは特徴的である。17点中７点の重い砥石はⅤ～Ⅷ期の竪穴住居跡から出土しており、そのうちの約60％がⅦ期の竪穴住居跡からの出土である。Ⅶ期に集落が大規模に展開するｆ地点に重い砥石が分布する状況から、竪穴住居跡

から出土した重い砥石は、それを使用した場所から大きく動いていない、さらには固定して使用された可能性があると考えられる。

以上のように、Ｂ地区で出土した砥石を、時期、石材、重量を視点に分布状況を検討したが、どの視点から見てもｂ地点とｆ地点、特にｆ地点の遺構密集域における分布状況は特徴的であり、Ⅶ期の竪穴住居跡の分布と砥石分布が重複することから、Ⅶ期段階に鉄器の利用が高いことが可能性の一つとして指摘できる。その上で重い砥石、凝灰岩製の砥石もｆ地点遺構密集域に重なることから、重い砥石と凝灰岩製砥石も連動している可能性がある。さらに、今回は叩石の検討ができなかったが、単純に比率だけみると、Ｂ地区内での叩石と砥石の比率は１：２であるのに対し、竪穴住居出土では２：３と叩石の占める割合が大きくなる。叩石にはいくつかの役割が想定できるが、大きな役割として砥面再生があげられる。こうした砥面再生の役割からすると、竪穴住居において叩石の割合が高いことは、砥石を頻繁に利用したことを示唆するものであり[2)]、その対象となる可能性が高い鉄器も同時に豊富に集落内で所有していた、また、研磨を頻繁に行う活動があったなど集落の生業の一つのあり方を示す材料となりうると考えられる。今回の検討では、細かな砥石の分類もできていないこともあり、集落内での砥石の使用場所を検討する上で可能性を指摘するのみにとどまった。生業に関わる課題については今後の検討課題としたい。

注

1）桜井氏は、弥生中期後葉以降に方柱状を呈する「定型砥石」が徐々に数を増していくようであると指摘し、中勢地域における凝灰岩・泥岩製砥石の本格的な利用開始は、弥生後期以降のことであると指摘している（櫻井拓馬2011）。

2）当遺跡に背後にはベンガラの産地である金生山が位置する。そのため、当遺跡において金生山で採取したベンガラを当遺跡内で粉末にしたなどの行為が行われた可能性もある。砥石がベンガラを粉末にする際の道具として使用されたことが想像できるが、赤い顔料が付着した砥石の存在は全体からすればほんのわずかであった。